

三上7040

74-56ホ

樋口夏子著

一葉全集

前編

日記及文範

東京博文館蔵版

明治
45. 6. 11
内交



影 撮 年 八 十 二 治 明

本

杉林の 風吹	下 石 石
-----------	-------------

杉林の 風吹	下 石 石
-----------	-------------

(色紙知册共樋口家所蔵)

杉林の
 風吹
 下
 石
 石

我が邦女流の文章を能くする者も亦多し藤式部の優麗と清納言の清奇と占未だ曾て有らずして後また及び難し降つて阿佛尼あり孝標女あり又降つて斐子あり武女あり麗子あり或は才或は學皆各形管光を發し彩毫華を生ず人をして巾幗の侮る可からず鬚眉の或は愧づべきを思はしむ然りと雖も二媛より以下要するに是草間の蟲語山徑の小花たゞ其の清約佳色悦ぶ可く憐む可きを見るのみ文妙情深人の耳目を奪つて肺腑に沁せんとするものに至つては悠悠幾百年殆どこれ有る無し明治に迨びて聖世隆昌文運蔚興す忽然として一葉女史樋口氏あつて出づ不幸にして命を短うすと雖も其の作る所の諸篇萬人を感動し一時に流

傳す詞藻の秀潤と才思の爛漫と蓋し人の耳目を奪ひ肺腑に沁せんとするもの有り嗚呼女史亦偉なりといふべし依田學海居士嘗て評して曰く古の才媛は富貴に生長し宮闈に出入す故に其の叙する所工なりと雖も未だ人情の微闕巷の秘を悉す能はざるなり若し夫れ紅淚萬斛灑いで文字と爲り熱血一腔瀝つて詞章と作り薄命を當墟に傷み情痴を狹邪に憐み今古同情の才子佳人をして痛哭流涕せしむるものは吾一葉女史濁江比長の諸篇に於て之を見ると言や實に當る間然する無き也而して世或は妄人あり女史の濁江を著して才名大に揚るを見るや則ち謂へらく女史の人となりや猶濁江篇中の女の如き也と次いで又誣者有り謂

つて曰く女史は才有つて行無し碗酒悶を遣り毒舌人を弄すと而して世又之を信ずる者有り信じて之を傳ふる者有り一狗の妄萬犬の陋達者與せずと雖も今に於て猶其の眞に然るを思ふ者有り文章の命と仇を爲す古より既に然りと云ふと雖も女史の屈を負ふも太甚し予の女史に於ける一面の識あり又數々女史に親近せる者の談を聞く私に目睹と耳聞との信ず可きに據りて考ふるに女史の性たる俊敏にして善柔母に孝に妹に慈に多感多涙中に逸氣を懷くと雖も外に異彩を露はす無し嘗て冶容を爲さず又疾言を敢てせず時に意平らかならざる有るも陰忍して諍はず而して蓋し其胸底深奥のところ稜々たり耿々たるもの有つて

存し世相と人情との之に觸るゝ有るや文これより閃
 發し辭これより流溢せるのみ世の傳ふる所の事の如
 きは斷じてこれ有る無き也久しい哉小人の才を嫉む
 や古亦これ有り其の藤を毀るは曰く死して泥犁に墮
 つと其の清を傷るは曰く老いて寒巷に窮すと藤清猶
 且小人の蠚射豸整するところとなるを免れず女史の
 譏刺せらるゝたま／＼以て其の大を容れられざるに
 見る可きのみ才人の薄命古より然り鬼憎人妬亦何ぞ
 病まんや女史名は夏子士人の女なり歳二十一初めて
 闇櫻を著す死する時年二十五其の間作るところの文
 凡そ數十篇悉く收めて其の集に在り今茲改刊新に成
 るに及んで遺妹序を徵す夫の女史の文の妙情の深百

年稀出の才たるが若きは世おのづから公論有り予復
 何をか言はん乃ち聊か見る所を書して以て贈る

明治四十五年三月

幸田露伴識

一葉全集前篇目次

日記

若葉か	げ……(明治三十四年四月十一日—六月二十三日)……	二
わか	草……(同) 七月十七日—八月十日)……	二七
筆すさ	び……(同) 七月 十九日)……	三八
蓬生日	記……(同) 九月十五日—十一月廿四日)……	七二
日	記……(同) 二十五年一月一日—二月九日)……	一一二
につ	記……(同) 二月十日—三月十一日)……	一三二
日	記……(同) 三月十二日—四月六日)……	一四六
日	記……(同) 四月十八日—五月廿九日)……	一六四
しのぶ	ぐき……(同) 六月一日— 廿二日)……	一八〇
同	……(同) 廿四日—八月)……	一九〇

X

日記	同	八月廿四日—九月	四一六
につ記	同	九月四日—十月廿五日	四二四
道しはのつゆ	同	十一月九日—十二月八日	四三二
よもぎふにつ記	同	三月廿四日—廿六年二月廿七日	四三九
同	同	二十六年二月十三日—三月十六日	四四一
同	同	三月十七日—四月六日	四四二
同	同	四月七日—五月二日	四四三
しのぶぐさ	同	四月十二日—十五日	四四四
逢生日記	同	五月三日—六月三十日	四四五
につ記	同	七月一日—十四日	四四六
塵の中	同	十五日—八月十日	四四七
塵中日記	同	八月十一日—九月廿四日	四四八
同 (今是集)	同	十月九日—十一月十四日	四四九
同	同	十一月十五日—廿七年二月廿三日	四五〇

X

つゆしづく	同	二十七年一月	四五〇
日記ありの中	同	六月廿三日—三月十四日	四五二
いはでもの記	同	三月	四五三
塵の中日記	同	三月十四日—十九日	四五四
塵中につき	同	三月廿六日—五月二日	四五五
水の	同	六月四日—七月廿三日	四五六
しのぶぐさ	同	二十八年一月三日—二月一日	四五七
水の上日記	同	四月十七日—五月三日	四五八
水の	同	五月四日—廿二日	五五九
同	同	廿三日—六月十六日	五六〇
水のうへ日記	同	十月七日—十一月七日	五六二
水のうへ	同	二十九年一月六日—二月	五六三
みづの上	同	二月二十日—	五六四
同	同	五月二日—六月十一日	五六六

74
56 不

一葉全集 前編

日記及書簡文範

樋口夏子

日記

みづの上……(明治二十九年六月十七日—七月十五日)……
同 ……(同 七月十五日— 廿二日)……

書簡文範

新年の部	………
春の部	………
夏の部	………
秋の部	………
冬の部	………
雑の部	………
唯いさゝか	………

六〇八
一八
六〇九
六六〇
八二二

若葉かけ (二十四年四月)

花にあくがれ月にうかぶ折々のこゝろをかしきままれにはあり。おもふこといはずらむは腹ふくるゝてふたとへも侍れば、おのが心にうれしともかなしともおもひあまりたるをもらすになん。さるはもとより世の人にみすべきものならねばふでに花なく文に艶なし、たゞその折々をおのづからなるから、あるはあながちにひとりぼめして今更におもなきもあり、無下にいやしうてものわらひなるも多かり。名のみことごとしう若葉かげなどいふものから行末しげれの祝ひ心には侍らずかし。

卯のはなのうきよの中のうれたさに

おのれ若葉のかけにこそすめ

卯月十二日 吉田かとり子ぬしの澄田川の家に見の宴に招かるゝ日也。友なる人々は師の君のがりつどひて共に行き給ふもおはしき。おのれは妹のたれこめのみ居て春の風にもあたらぬがうれたければ、いでやともになどそゝのかして誘ひ出ぬ。花ぐもりとかいふらんやうに少し空打霞みて日のかげのけさやかならぬもいとよし。上野

の岡はさかり過ぬとか聞つれど、花は盛りに月はくまなきをのみ愛るものかは、いでやその散がたの木かけこそをかしからめといへば、ならばが岡の法師のまねびにやといもうとなる人は打ゑみぬ、さすがに面なくて得いはず成ぬる事もをかし。我すも家より上野の岡は遠きほどにてもなかりければ、まだ朝露のしげきほどに來にけり。聞けんやうにもあらず、清水の御堂の邊りこそ大方うつろひたれど、権現の御社の右手の方など、若木ながらまださかり也き。さと吹く朝風のひややかなるにぬれたる花びらの吹雪と斗散みだるゝはいとをしくて、おほふ斗の袖もかななどいはまほしけれど、例のと笑はれんがうしろめたくてやみぬ。澄田川にも心のいそげばをしき木かけたちはなれて車坂下るほど、こゝは父君の世にい給ひし頃花の折としなればいつもいづもおのれらともなひ給ひて朝夕立ならし給し所よと、ゆくりなく妹のかたるをきけば、むかしの春もおもかけにうかぶ心地して、

山櫻ことしにもほふ花かげにちりてかへらぬ君をこそ思へ

心細しやなどいふまゝに、朝露ならねど二人の袖はぬれ渡りぬ。山下といふ所よきりてむかし住けん宿のわたり過るほど、よの移り行きまこそいとゆるけれ。まだ八と

せ斗のほどに下寺といひつるおきつち所は鐵の道引つらねて汽車の通、其車といむる所を始め、區の役所、郵便局など、其頃思ひもかけざり、出来にたり。わがはらから難波津ならふ頃、その師のがり行とて常に、よふほどやがてはかくならんなど人の語りて聞かせつれど、其はいつの事なるべき。厩氣樓のたぐひにこそと打笑み草にしたりしも、よの事業の俄かなる早くも聞けりやうに成りにたるを、おのれらこそあれ其折に露たがはず何仕いでたる事は、にとしのみ重ねたるよと打なげかれぬ。このほとりより車ものして角田河まは行り。枕ばしといふより車はかへしにき。散もはじめず咲ものこらぬ花の匂ひいとこまやかに、遠くのぞめば只一村の雲かと斗うたがはれ、近く見渡せば梢につぶる雪かとのみ見ゆる。まだ人々少なきほど、花のかげを我が物にしてみありくほど、まことと小蝶に身をかへたらん心地ぞする。秋葉、しら毘のわたりよざりて梅若の、花を探りき。このあたりには人のかげもなきがいと嬉し。かへさには長命寺の櫻も、る求めて妹に渡しぬ。こは母君にまゐらせんとて也。おのれは三めぐりのほとりにて袂わかちぬ。かとり子ぬしの家はその御社のそがひに高くそびえたる三階がそれなり

おのれより先にみの子の君、つや子の君おはしき。例のされごとひかわすほどに、今日は大學の君たちきそひ舟ものし給ふとてはや木まゝにこぎいで給ふも折からいとうれし。遠眼鏡ものして見渡せば、此高どのしたこぎ行やうにぞみゆる。赤しろ青紫など細々にて服の色わかち、おのがじ、漕きそふさま水鳥などのやうに心のまゝ也。堤にはその友たちの君なるべし、赤よ白よなどおのが引方を呼はげまして心もとなげに舟とともにかけ給ふもいといさまし。みの子の君うらやましげに見居たまひて、かち給はいさもこそ嬉しからめとの給はすに、おのれもまけたまはいさもこそくやしからめと打うめきて笑はれにき。かゝりしほどに師の君も友たちの君たちも來給ひぬ。龍子の君、静子の君はきそひ舟見にまねかれ給ひてこなたのむしろには後にこそつらならめとて出行給ふ。難陳などもよふすほどまことに心や空にあくがれけん花のかげ斗みえてそゝろにすぎぬ。折から花火のあがりぬれば師の君

花にはなびをそへてみるかな

とかき給ひて此かみつ給へと伊東の夏子ぬしにしめさせ給へば、君たちちに、思ふどちまるとするさへうれしきを

とかいしるし給ひてさしおき給ふさま例ながら優にうるはしうこそ。更にも
君句のしもかき給ふ。

蛙の聲ものどけかりけり

おのれにかみをとすゝめたまふに打おどろかれて、かの花かげにあくがれありくう
かれ心呼かへすなどまことにあわたし。時うつるとせめられて、

おもふどちおもふことなき花かげは

といひたらんやう成しがうつしごゝろならねば覺えず。猶君たちの玉の言の葉いと
しげかりしもみな忘れにけり。この事終りて後久子の君が引すさび給ひし琴のねは心
なきおのれさへ松風のひききともやいふべからんと思はれ侍りき。いでや日もくれな
んとすなるを御ことのねに心はひかるゝものから、花かげのくらくならんもいとをし
ければと師の君の給ふ折しも、龍子の君もしづ子の君も歸り來給ひぬ。あるじの君
今しばしとも、の給ひしかど、まかり申して出ぬ。供なる男子ども、酒など給ふほど
なれば後よりよとて、師の君はじめ十三四人して堤には來たりぬ。折しも日かげは
西にかたぶきて夕風少し冷かなるに、咲あまりたる花の三つ二つ散みだるゝは小蝶な

どのまふやうにみえてをかし。酔しれたる人の若き君たちにされ言などいひかくるぞ
ろうがはしくもいとにくし。やうく日の暮行くままにそれらの人はかげもとゝめす
なりにたれば、今は心安しとて花の木かげたちめぐり、おのがじゝされかはすほどに
いつしか名残なく暮はてゝ、川の面をみ渡せば水上は白き衣を引たるやうに霞みて向
ひのきしの火かげ斗かすかにみゆるも哀れなり。いでやまかりなんよ、月だにあらば
よかるべきよなんめるを中々にうしろめたければと師の君の給ふも實にことわり、
若き君たちのみなればなり。今しばしともいはまほしけれど、供の男子なども來てそ
ゝのかせば、いとをしけれど木かげ立はなれて車ものする折から、春雨少し降そめぬ
れば別れの涙にこそとの給ひかはす。枕ばしまではもろとも成しが、こゝよりおのが
じゝ行別れ給ふさままことに残りをしげなり。まことに春のうちの春ともいふべき日
なりと思ふにも、今しばし空の晴なましかばとおもはるゝはかの蜀をのぞむとかいへ
る人心にや。

十五日 雨少しふる。今日は野々宮きく子ぬしがかねて紹介の勞を取たまはりたる
半井うしに初めてまみえ参らす日なり。ひる過る頃より家をば出ぬ。君が住給ふは海

近き芝のわたり南佐久間町といへるなりけり。かねて一たび鶴田といふ人までものす
ること有て其家へは行たる事もあれば、案内はよくしりたり。愛宕下の通りにて何と
やらんいへる寄席のうらを行て突當りの左り手がそれなり。門くゞりいりておとなへ
ばいらへして出きませしは妹の君なり。此方への給はすまゝに、左手の廊下より座
敷のうちへと伴れいるに、兄はまだ歸り侍らず今暫く待給ひねと聞え給ひぬ。誠や君
は東京朝日新聞の記者として小説に雑報に常に君があづかり給ふ所におはせば、さも
こそはひまもなくおはすべけれど思ひつゞくるほどに、門の外に車のとまるおとのす
るは歸り給ひしなりけり。やがて服など常のにあらため給ひて出おはしたり。初見の
挨拶などねんごろにし給ふ。おのれまだかゝることならばねば耳ほてり唇かはきて
いふべき言もおぼえず、のぶべき詞もなく、ひたぶるに禮をなすのみなりき。よそ
めいか斗おこなりけんと思ふもはづかし。君はとしの頃卅年にやおはすらん、姿形
など取立てしるし置かんもいと無禮なれど、我が思ふ所のまゝをかくになん。色いと
良く面おだやかに少し笑み給へるさま誠に三才の童子もなつくべくこそ覺ゆれ。丈は
世の人にすぐれて高く、肉豊かにこえ給へばまことに見上る様になん。おもむろに當

時の小説のさまなど物語り聞し給ひて、我思ふに叶ふべきは人好まず、人このまねば
世にもて遊ばれず、日本の讀者の眼の幼なる新聞の小説といはれ有ふれたる奸臣賊
子の傳或は奸婦いん女の事跡様の事をつゞらざれば世にうれざるをいかにせん、我今
著す幾多の小説いつも我心に屑としてかきたるものはあらざるなり、されば世の學
者といはれ識者の名ある人々には批難攻撃面も向けがたけれど、いかにせん我は名譽
の爲め著作するにあらず、弟妹父母に衣食させんが故なり、其父母弟妹の爲めに受く
るや批難もとより辭せざるのみ、もし時ありて我れわが心を持て小説をあらはすの日
あらんか甘んじて其批難を受けざるなりとの給ひ終はつて大笑し給ふさま誠にさこそ
と思はれ侍れ。猶の給はく、君が小説をかゝんといふ事譯野々宮君よりよく聞及び侍
りぬ、さこそはくるしくもおはすらめどしばしのほどにこそ忍び給ひね、我師といは
れん能はあらねど談合の相手にはいつにても成りなん、遠慮なく來給へといとねんご
ろに聞え給ふことの限りなく嬉しきにもまづ涙こぼれぬ。物語りども少しする程に夕
げしたゝめ給へとして種々ものして出されたり。また交もふかゝらぬものをと思へば
しばし辭すに、君、我家にては田舎ものゝ習ひ舊き友と新らしきとをとはす美味美

食はかきたれど箸をあげさせ参らするを例とす、心よくくひ給はゞ猶こそ喜しけれ、我も御相伴をなすべきにとあまたゞび聞え給へば、いろひもやらでたゞべ終りぬ。かゝりしほどに雨はいや降に降しきり、日はやう／＼くらく成ぬ。いでや暇給はりなんといへば、君車はかねてものし置たりのりてよとの給ふ。歸さにしたゞめ置たる小説の草稿一回分丈差置きて君が著作の小説四五冊を借参らせて出ぬ、君がくまななみ心ぞへの慕しく八時といふ頃にぞ家に歸りつけり。

廿一日 夜野々宮君吉田君参る。野々宮ぬしが役にて園遊會のもよほし有とやらくにて其時持参らせ給ふ景物様のものゝ相談せばやとて來らせ給ひし成き。同夜十一時頃歸宿さる。此日先の日の小説の續稿成りたるをもて明日は桃水師のもとへまからんとて其夜清書すべかりしも、五回斗かきたる程に母君のあまり夜のふくれば明日の事にせずやとの給はすまゝにやみぬ。

二十二日 例の午後よりなから井うしをとふ。種々のもの語りども聞えしらせ給ひて先の日の小説の一回新聞にのせんには少し長文なるが上に餘り和文めかしき所多かり、今少し俗調にと教へ給ふ。猶さまゞの學者達をも紹介し参らせんなれどいさゞ

かさわる所なきにしもあらねばやみぬ、されど吾友小宮山即眞居士は良師ともいふべき人なれば此君のみには引合せ参らせんなどの給ひ聞ゆ。昨夜かきたる丈の小説の添刪給へとて差置たるまゝ、此日は早々歸りぬ。人一度みてよき人も二度めにはさらぬもあり、うしは先の日ま見え参らせたるより、今日は又親しさまさりて、世に有難き人哉とぞ思ひ寄ぬ。

廿四日 までに草稿名残なくしたゞめぬ。あすは小石川の稽古日なり。其夜は中々にあわたゞしかりき。其夜郵便して草稿は半井うしに送り参らせぬ。

廿五日 雨ふる。つとめて小石川に行く。ひる頃より空名残なく晴て日かげ花やかに差入りぬ。今日は何となく物の手につかぬ様に覺ゆるは何故成しやおのれもしらす暮々に歸宅す。其夜桃水師のもとより消息あり、小説の事にももの語りあり、かつ先の日約し置きし即眞居士への紹介をもなすべければ、さわる事なからんには明日午前より神田の表神保町俵とかやいへる下宿までもうこよとなり。母君にも斗り参らするに行ねとの給ふ、今宵は何となくむね打ふたがりてねぶるべき心地もせざりき。あけの朝早く起出てみれば空はいつのまにか黒きくももておゞはれはてぬ。今日は

雨にこそと、打わぶれば、母君降なましかば行かでも有なんと給へど、私の用なるを空しくまたせ參らせんやは、つよく降なばそは詮なし大方ならば必らず參らんとて支度する程に、雲の切開みえ初ぬといふ、うれしくて家をば出ぬ。田町といふほとりより又くろき雲おびたしく出来て雨俄に盆をかへす様に成ぬ。今更に歸りなんか同じことぬれぬべければ志す方へとて、此ほとりより車ものしてゆく。小川町の浴集館が南の方へ新らしく開きたる土地の下宿屋なり。おのれこのとしまでまだ下宿に人とひたる事なければ、何となく心おくして入もえかねたれど、はつべきならねば、ねんじて半井うしやおはすといひ入たり。はしたあやし氣の面もちして誰君にやと問ふ我名を通すれば、此な方へと伴ひ入れぬ。少やかなる間幾間かしらす數多かり、うしのいませしは二階下の座しきにて、二間に住居給ふかとみゆるに、筆筒などの並べあるは手廻りたる事よと心には思ひて座につくほど、君は手紙したゝめ居給へりき。暫し免させ給へとてかき終り給ふ。今日は洋装にて有たり。やがて例のいとおだやかに、昨日はあまりよき日成しものから今日の雨をば心づかて手紙參らせたるはいとあしき業なりき、實は小宮山君も俄に腦の病ひやしなはんとて、此明日かま倉地方へ赴

むかれたるをとしていとくう氣の毒がり給ふ。小説の事につきてもねんごろに聞えしらせ給ひて、此次ぎはかゝるも書み給へ、おのれかねてよりかゝんの心組み有しかども暇を得ずして日頃過ぬとて、かくくしてかくせばをかしからんなど物語り給ふ。それより先に今日はまづ君に聞え置度事ありてとの給ふ、そは何事にかと問ひ參らすれば、いなとや餘の事にもあらず、余やいまだ老果たる男子にもあらず、君はた妙齡の女子なるを交際の工合甚だ都合よろしからすと、君真に迷惑氣にの給ふ。さもこそあれとかねて思へばおもて火の様に成ておのが手の置場もなく只恥かわしさをもちおほはれたり。猶の給はく、よりて吾れ一法を案せり、そは外ならず、余は君を目して我が舊來の親友同輩の青年と見なして萬の談合をもなすべければ、君は又余をみるに青年の男子なりとせで同じ友がきの女子と見給ひて隔てなく思ふ事の給ひねと聞え給ひて打笑みたり。我が家の貧なるをも君しろしめし給ふものから、もし差つかゆるともあらば何にても言ひおこせよ、我身に應ずる事は心の限りなしてんなどの給ひて、君が貧困の來歴など残るくまなくつげ給ふにもさまく思ふこと多かり。ひる飯又君がもてなしにあづかりて家にかへる。師がの給ふ所をきけば、吾が家のまづしきは未

だまづしとすべきにもあらず、君の經來り給ひけんこそ中々にまさり給へれとぞ覺ゆる。

五月二日 小石川稽古なり。空めづらしく晴渡りて一村のくももなければ、來給ひし人々いと多かり。師の君の給はく、いかで今日過さず植物園のつゝじ牡丹みてこんはいかにとうながしたまへば、人々いとよき事なんめりとしてみなうれしと思ひたり。三時頃より十三人して行。師の君例の直なる道は行たまはであやしう傳通院うら藪めきたる所を分おはす。行どもく其道ならねばゆかるべくもあらず、里の子の草村に遊び居たる呼びてとひたるにいとよく教へくれたり、見にくき子成しかども可愛かりき。五時といふを限りに人は入ぬなりといふを十分ほど前なりしかばあわたしく切符もとめて入ぬ。中のけしき人々のさまは詞たるまじく、餘日記しぬべし。六時頃みなくかへる。

八日 桃水君をとふ。をしへをこはんとてなり。此日は風あらくして天氣好かりき例の時に趣き侍りぬ。君やがて歸宿したまひて小説のことに付て種々ものがたりどもあり。例のねんごろにをしへを給ふ、今日ぞ小宮山君に紹介いたし侍らんにはし侍

給へよ、今社よりの歸さにこゝへ寄給ふべ

なり。少し有て日かげや、落ぬべ

き頃に即眞居士は參られたり。君はよはひ井田 水ぬしに二つのこのかみにおはすとか、たけたかやかならずこえ給はず人がらいとおだやかにみうけ侍り。ものがたりするほど例の夕げのむしろ開かせ給ふ。我身は久しう有ぬべからんもうしろめたければしばく暇たまはらんとひて出ぬ。み心ぞへの車して歸る、夜八時。

十二日 ぬしのもとよりふみあり。麴町平河町といへるに屋轉りしたまひしのみしらせなり。かつはもつがたり度事侍ればまみえられべくやとなり。やがてかへししたゝめておくる、十五日にまからんとて、申す。

十五日 ひる過るほどより契りしやうに半井のうしを平河町にとふ。こたびの家はいとめでたき所なりけり。行てのちしばし有て歸らせ給ふ。何等のみ用にやと、ひ參らするに、いなとよ我がしる大阪の書しにて雑誌をこたび發発せんとす小説かく人世話し給はれと申しつれば君をこそと物語りおきつるなれ、さるをあやにくに露國太子殿下の急變にて俄に用事出來たりとて今朝しも汽車にて歸阪なしたり、斷りまゐらせんともおもひたれどはや及ばじとおもひてさしおきぬ、百罪ゆるし給てよと詫給ふも

心ぐるし。此日はものがたり少しして歸る、日没前成し。

廿七日 前約の小説稿成しをもて桃水ぬしにおもむく。今日は我れ例刻より遅かりしをもて君既におはしき。種々我爲よかれのものがたりども聞えしらせ給ふ。歸宅し侍んとする時に今しばし待給へ、君に參らせんとて今料理させおくもの、侍ればとまめやかに給ふを例のあらくもいろひかねて其まゝといまる。やがて料理は出來ぬ、こは朝せん元山の鶴なりとなり。さる遠方のものと聞くにこと更にめでたし。たふべ終れば君いでや歸り給へよ、あまりくらく成やし侍らんなど聞え給ひて、今日もみ車たまはりぬ。かへりしは七時。

卅日 残りの原稿郵便して送る。此日は礪河の稽古なり。

卅一日 みの子ぬしの發會三番町の萬源にて催しあれば、おのれは早くより趣く。會主としばしものがたり居るほど師の君もまた來給ひぬ。來會する人卅人斗おはしき五時といふ頃人々歸る。おのれは七時頃にや有けん家に歸る。

つぐの日 朝まだきにみの子ぬしに文參らす。子ならひども少しして、夫より小石川の師の君昨日いたくつかれ給ひつるやう成。心にかゝればみ様子みんとてとふ。

さしたることもおはさざりき。ひる頃歸る。

二日 あす半井うしへまからんとてふみ參らす。

三日 空少しく曇る。例刻より桃水うしをこふ。君近きほとりの友がり行給ひきとてはしため迎ひして歸り給ふ。此次の趣向ものがたりて君が説をとひ參らすに、思ふふし名残なくいひ聞せ給ふ。やがて雨少し降初ぬ、暇こひ參らすれば今しばしなどの給ひて、あやし君來給ふ折には必らず雨天なるも、しかし今日は雨降ぬべきことこそあれ、いつになく今朝三時といふに朝床はなれつるはとの給ひて、いたく笑ひ給ふ。さもや侍らん此後我身まうでん時にはかならず朝寝し給ひてよとされごといへば、君いとまおもてにして、うけたまはりぬとの給へしはいとおもなかりき。門の戸いづるやがて車ものして歸る。家に入る頃より雨いといたく降る。はやく暇申してよかりきなどかたりかわす。

六日 小石川稽古なり。人々におくれてみの子ぬしと二人手ならひする。歸路くら子ぬし我家へ來給はんとあるにいなみかねてともなふ。夜八時頃歸り給ふ。頼まれたる針仕事遅くまでする。

七日 よへの残りの仕事ども早くよりして十時頃出来る。それより机にむかふ。
 八日 今日は灸治に行ばやの心ぐみ成しも空もやう少しあやしければやめにす。午後より晴る。夜十二時床に入る。

九日 快晴。今日は礪河の月次會なれば早朝より支度などせばやとて四時頃起出づ十時頃至る、來會者廿八斗、散會は五時頃成き。おのれは少し残りて名古屋の禮子ぬしに送るべき各評の名先などしたゝめて、歸宅せしは既に日暮て後成し。今日の床かざりは水府立原某が畫きたる竹に鶴の掛ものに古さつまの花瓶に夏菊と姫百合の投入も優にやさしかりき。小笠原家よりマキノノリヤとやらん名はこちたけれどうるはしき花送られたり、もと我國のものならねば趣はことなりたるものから中々に見所多かり、葉はゆづり葉に似てそれよりはうらの色薄く、花はふやうに類したれど中のしべことなれり、名残なくひらけばさし渡し六寸位にはなれりとか、名のうるはしからぬ爲歌によまれぬこそくちをしけれ、此花のみならずかゝる類ひいと多かり。

十日 朝より空くもる。みの子ぬしととも今日は圖書館に書物みに行んの約成しかば序をもて灸治にも行かばやとて、ひるより家を出て、下谷に行く。二時頃よりみ

の子ぬしと共に圖書館に行く。六時歸宅す。

一日師の君のもとに小集有し時坐中の男女の年齢比べせんといふ人あり、夫をかしからんとて師もの給ふ、男は六人にて女は十四人有り、負くべきにはあらずとおもへば、文雅堂のあるじ伊豆田一渡りみ渡して數をとる、鈴木重嶺うしは七十八との給ふこれ斗にても女子の方の四人振は有るとて一同笑ふ、梅村のりをぬし七十、加藤安彦うし七十二、はや二百の數をこえたり、江ざし恒久君七十、木村正義君少し下りて四十九、水野忠敬子四十、合て三百七十九との給ふ、女の方は師の君四十八、伊東延子ぬし五十九、みの子ぬし三十五、とよ子ぬしも同じく、かとり子ぬし四十七、小川信子ぬし四十五、これら少しは數のうちながら、残るはいづれもく口をしきまでに若し、高田不二子ぬし廿三、前島きく子ぬし廿、田邊静子ぬしもおなじく、伊東の夏子ぬしも同じくといへば、師の君雷同し給ふにはあらずやとの給ふ、小笠原のつや子ぬし十六、廣子ぬし十九、中む田恒子ぬしの十三などいふこと更に口をし、おのれは、甘といへば師の君あまりの掛直なり、まけじだましひかと笑ひ給ふ、誠のことなるものからいつまでも若き様に思ひ給ふもをかし、かぞふれば四百十九なり、あなうれし

や四十斗のちかちこそことみなくどよむほどに、小出祭ぬし來給ひぬ、すはや味方の一人ふるたるよとて男方又色めいてみゆ、君はいくつくとせめとへば、おもむろに戸籍改めにや拙者は當年六十歳との給ふ、まことにはおはすべけれど空言にやと斗にくし、決をとればこなた甘のまけに成ぬるぞ限りなくうらめしきや。

十一日 今日も空曇る、入梅なりといへればさもや有へし。今日の新聞上に小舟町二丁目石崎廻漕店所有汽船石崎丸小樽より東京へ向て出帆し、四日の夜なるべし銚子の沖合に差かゝる折しも如何になしけん脆くも沈没を爲て乗組五十餘名残りなく溺死したりとか、同五日の朝銚子の濱邊に一片の救命標流れつきたりしより漸く人の知る所と成しに、やがて随時に屍體小荷物など漂着したりき、さても何故にかかゝる難破船の有し事と燈臺局は申に及ばずしるべ絶えてあらざりしやといふに、救命の汽笛の燈臺局に達ざりしをみれば海濱を去ること三里以上の沖合にて沈没は爲したるなるべしと也、大方は犬吠岬の西南長崎浦の前面遊りなるべしや、このあたり暗礁多き所なれば也、誠や當夜は東風つよく吹あれ波浪高くとに濃霧さへ海面を閉たる夜也とか、とにも角にも涙ぐまるゝ物がたりにこそ。

十三日 今日小石川稽古也。朝七時頃より行。師は今しも起出給ひし所也き。みの子君より乙骨まき子君の手紙を受る。石田農商務次官の紹介を以て大島みどり君入門す。伊東夏子君より依田學海君著作の十津川の物語少し聞く、人々の歸り給ひし後例の通りみの子君と二人習字をなす。歸宅の時師の君より四つ入單物一反賜はる。

十四日 雨天。今日はみの子君と共に圖書館へ行約束成しも、さはり有て行難ければはがきにて其旨を斷る。國子關場君へ行て書物ども少し借てくる。うちに學海居士の十津川もありき。昨日風説を聞てひそかに欽慕したりしに不斗見る時をうるもいとうれし。

十五日 まき子君への返事出す。午後より秀太郎來る。今日も終日雨天成りし。半井君を訪はんの心組成しも俄に心病ましければやめにす。

十六日 朝より雨天。早朝三田の兄君より書狀來る。午後秀太郎遊びに來る。日没後半井うしより書狀來る。物語り度ことあり明日か明後日來よと也。例の小説の事なるべしとおもふにも胸つぶくと鳴こゝちす、何となく心にかゝりて夜一夜いもねす夜もすがら大雨成し。

十七日 朝まだきはまたよ半の餘波の雨雲立おほひて晴ぬべきけしきもさらにみえざりしを、ひるつ方より少し雲の絶まる様に成ぬ。いでや今日こそ半井うしをばとはめとて俄に支度どもして午後二時といふ頃より出なんとするはしに奥田の老人來るさらば諸共にとて出ぬ。奥田の姫とは眞砂町にて別れたり。かなたの家近く行ほど、こゝかしこ軒提燈ひまなくかけつらねたるは今日なん日枝の祭禮なるべし。おぞや心もつかでとおもひぬ。やがて例のおとなへばはしたため出來ぬ。導かるゝまゝ例の座敷にまう昇りて御歸りはいまだにやととひつるに少しいぶかしげの面持して君は今日は郵便は給はせざりしにやといふ、いなとよ妾よりは參らせず昨日うしよりみ消息有て今日あたりこよとの御仰成しかば成とこたふれば、さらばやがて歸り給はん今朝家を出給ふ時今日は會議の有ければ歸りは例より遅からんなど仰給ひしかばといふに、さらば今しばし置給てよ、さても歸らせ給はざれば又こそ參らめなど物語るはしにかう子君歸り來給ひぬ。まさなごといひかはすはしに五時も過たり。いよゝ歸らせ給はぬにやあらんさらば日の暮さらんほどに暇申さめと思ふ折しも、例の夕げのあるじまうけし給ひぬ、いなみ申さんもさすがにてしばし物して終りしほどに師は歸り給ひぬ

もの語りどもいと多かり。小宮山ぬしの深き御慮例のうしの情深きなどかたじけなしともかたじけなし。されど筆にまかしてかいするさんもかつは我身づからやましきこともあり、よく爲し得べき事にあらぬか、今しも思ひわきがたければこはおのづからあらでのちに昔し語にもならばいとうれしけれと今はもらしつ。暇乞申して出る頃ははやうく西にかたぶく頃成し。今日は道かへて湊端を歸る。夕風少し冷かに吹てみほりの水の面て薄暗く、枝さしたるゝ松の姿伏したるも起たるもさまゝにいづれ千とせのこもらぬもなく、老てますゝさかなりなどいふはかゝるをやなどおもはる、み返れば西の山のはに日はいりて赤き雲の色のはたてなどいふにや細く棚引たるも哀なり。行かふ人の無きにはあらねど市路ならねばいとさうゝし。堤の柳の絲長くてたれてなびくは人もかく世の風にしたがへとにやいととまし。引かへて松のひさのたうゝとなるは高きいさぎよき操のしるべ覺えて沈みし心も引起すべくなん。秋の夕暮ならねと思ふことある身にはみる物聞くものはらわたを断ぬはなく、ともすれば身をさへあらぬさまにもなさまほしけれど、親はらからなどの上を思ひぬれば我が身一つにてはあらざりけりと思ひもかへしつべし。あゆむともなしにいつか九段の

坂上には成ぬ。こゝよりはいとにぎはしく馬車など音絶えずはせ行ばあしもとなど
 もあふなげなり、猶おもひついでうつむき勝にくる様のいかにあやしかりけん、道
 行人のおもてさしのぞく様にするもいとつゞましく、人わろければさしもみえじと思
 へど猶おのづから色にももる成べし。家に歸りたるはくらくなりて成けり。
 十八日 朝より晴なり。めづらかに嬉しく、人より茄子苗の若やかなるを貰ひて
 母君植る。

十九日 今日も晴なり。朝とく庭前の梅の實をおとすみそこしといふ筈に一ツあり
 たり。あやしう蟲ばみたるなどもあれば正味は夫より少なかるべし、こは先の日こゝ
 の家差配の大方おとしてゆきたる後なればにや、残らずには二升の餘なるべし
 などいふ。ひる過るほどより、今日も圖書館へ行く。先の日の約も有ればみの子君を
 誘ひつるに君待つて共にとの給ふ。六時頃までみてかへる。

廿日 朝戸明てみれば空名残なく曇りて今にも雨降ぬへき氣色なり。あなうしや今
 日は稽古日なるをと打うめかれぬ、と斗有て雨こぼれ來ぬ。家を出る頃にはますく
 降にふる。さればにや來給ふ人も少なかりけり。師の君は昨日よりあやしく心常なら

ずおはすとかや、例の過度に腦をつかひ給ひし故なるべし、さは今日は静かにやすま
 せたまはんこそよけれとて、人々をばみの子ぬしとおのれにてあづかり申て稽古な
 どす。ひる頃よりひのかげやうやくみえ初めて歸路はいとよく雨晴ぬ。今日しも始
 て川越の中島ぬしが嫁の君に逢まゐらせたり、動物詠史といふあやしき詞聞たるもを
 かしかりき。結髪の歴史めきたるもの語も有たり。近き頃の

いてふ齧わりからこ ちご齧
 かつらひたち 今まれにはゆふ人あり
 島田くすしかたはづし 茶せん

このうちにて今もゆふ齧もありされど大方今は

いてふがへし
 たう人齧
 こは大人となくこどもとなくゆふむすびがみといへるものなるべし。儀式の折な
 どゆはぬかみ也。

高島田
 桃わりいてふ
 こは十年より十四五までゆふ也。されどまれくは十九廿位にてゆふ人もあれど
 みな貴嬪のみなり。
 これは此頃のはやりにぞあめる。十六七より廿四五まで島田といへば大方これ也。
 唄女の様なるものさへこの頃はこれのみなり。
 品のよき齧にて一時いたく流行して都の中の女といふをんないはぬはなかりしを
 しはらくにしてすたり。

ばちがたしま田

お初九詣

唄女などの若からぬがゆふなり。素人にも少し年寄はゆふ、總て品は宜しからず
意氣といふ方にやあらん、卅年の唄女いはゆる姉さんと云ふ株は大方是れなり。
島田より丸詣にうつる時にはこの詣誠によく似合へり、人の好みながら赤き切れ
かけたるも可愛氣なり。

東髪は前がみを切て眉の上まで下げたる童などのまだ長からぬ髪を赤き切してゆ
ひ下げたるこそこよなくうつくしけれ。

廿一日 終日ふる。其夜十一時頃大雷、跡にて聞ば淺草久右衛門町へ落たるとかや

廿二日 晴。午後より師の君の御様子見んとて小石川へ行、師と共に中村君の家見
に行。明日君は歸京し給ふなりとか。今日は國子のたん生日なり、いさゝかいはひな

どす。

廿三日 晴。早朝より灸治に行、圖書館へ行、辨當などして行て午後二時歸る。西
村君來給へり。

究竟は理即にひとしとぞきく、入りなんとする昔の迷と覺めはてぬる後の悟とそれ
大方は似たるべし。此わか葉かげそも迷夢のはじめか悟道のしをりか、かれ木の後
に見る人あらばとて、
なほしげれくらくなるとも一木立

わか草

(二十四年七月)

山家如春

冬籠る山した庵は大方の

よのはるよりもどけかりけり

雪中待友

契りてはおかぬものから初ゆきの

ふる日は友のまたれぬる哉

草漸青

冬がれしこぞのふる葉の中よりも

やゝ青みたる垣の若草

歸雁入雲

のどかなるとこよの春に歸るらん

雲路に消る天つ雁がね

。月にのみかゝるとおもひしうき雲に

かげかくれ行春の雁がね

花間蝶

うらやまし春の小蝶はねふるまも

花の木かげをはなれざりけり

夢とのみ消るをみてもたのしきは

うきたる舟の花火成けり

西宮と云内親王對面の時に總角の者は着す半臂汗衫、下襲、表袴、玉之帶等を、

うらやまし世の風しらぬ谷かげに

ちよをしめたる松も有けり

夕がほのみになるをのみまつやどの

かきねにをしき花の色かな

つづくにのこや何といふ花ならん

ながむる軒に日ごとしげるは

七月十七日 みの子ぬしが月次會なり、ひる少し前より家をば出づ。道しるべにとて母君も出立給ひぬ、高等中學の横手の坂下るほど雨少し降來ぬ、空は薄墨の様なるくもやうく立重なりてやがて夕立しぬべしなど道行人もいひぬ、真下まき子の墓谷中なれば母君と共に墓もうでする程、空いよくくらく成て雨いよく降にふる、こゝにて母君に別れ參らせ、みの子ぬしの家は直其むかひの道なればやがて行ぬ、集會者は十人斗成し。

七月廿日 今日は土用の入とぞいふ、土用三郎とかや、この三日のほどの天氣は作物にいといたくかゝる所ありとて、人々空をあふぎて思ひわづらふに、朝よりかさくらし打くもりてひる過るころより少しこばれ來ぬ、さし當りては何ごととも覺えねどことわざいとわづらはしうこそ、そのけにや今日は風ひやゝかにしていと暮しよし。

廿一日 朝より雨降る。晝少し過より稻葉君參る、いよく落はふれにしかば車引かばやと物語らる、かなしきこといと多かり、五時頃歸る、其夜地震す、五分間斗にて止む、夜に入ては雨いよく降る、此夜新聞號外來る、蜂須賀君貴族院議員に成り

富田鐵之助君府知事と成る。

廿二日 朝來雨天。今日の新聞に下田歌子君加納君のもとへ興入せられたる事あり。午後一時頃師の君のもとより端書來る、縫物の依頼なりければ直に行く、單物を持來る、夕刻まで縫物をなす。暮てより國子ともに買物に通るまで趣く、今宵はびしやもんの縁日成しかば雑沓いと夥し、女郎花朝顔などの植木もいと多くみえたり、歸宅後雨や、降増る、久保木より魚少し貰ふ、今日釣に行たるのなりけり。

廿三日 朝より空晴て日のかげいと暑し。午前内に裕衣一枚縫終りぬ。午後より上野伯父君參らる、晝飯を出す、種々の物語りあり、四時過に歸宅せらる。夜に入りて野々宮君、吉田君參らる。野々宮君は試験休みなるよし、十一時歸宅せらる、今宵は夜業なしにて終る。

廿四日 晴天。午前にかいまきの綿人をなす。午後より西村君、菊地のお政君參らる、西村君は三時、奥方は四時ごろ歸宅せらる、菓子折をもろふ。日没針仕事終る。此夜一時に床へ入る。

廿五日 晴天。今日は礪川稽古なり、よべ仕上たる縫ものに火のしなどして出たつ

田町より車を取てゆく、今日は少し遅刻なりけん、最早五人斗來給ひたり、ひる頃みなく歸宅せらる、二人三人のこりて今一題よみかはず、三時頃歸宅す。頭いといたくてせんかたもなく苦しければ今宵は十時に床へ入ぬ、夢におそはれておびえなどす、かしらのあしければなめり。

廿六日 不忍の蓮、入谷の朝顔、此頃花盛りといふ。

廿八日 晝は晴、夜に入てより雷雨いとおびたしく、十一時頃には屋の上打貫様にふる、更てや止けん。

廿九日 空名残なく晴渡りて少し風さへ吹そはりつ、いと暮しよき日なり、晝後母君神田へ行給ふ。其頃より又空曇り來て大粒なる雨降來ぬ、歸らせ給ふ頃には又晴ぬ夜十時頃より雷雨おびたしくす。

卅日 今日の新聞によれば一昨夜横濱の大雷雨成しといふ、東京のみにはあらざりしなり、地方出水の模様あり、おどろくしきこととやいとおぼつかなし。今日は春木座の棟上式なり、午後より先生裕衣縫ふ、夕かた大方出來上る。三枝信君來る、母君例の土産物をくる。夜に入て又雨降る。

卅一日 晴天。裕衣縫上る。午後より書もの、明日小石川稽古なれば此夜一時まで起居る。

八月一日 晴天。朝六時半に宅を出て小石川に行、未だ誰も来たらざりし、師君としばし物語りして菓子など給はる、此次の仕立物頼まる、友達の君は八時頃に揃ふ、大方は避暑に趣き給ひつれば来集者も多からず、十人斗成き、題二ツ、午後二時頃諸君歸る、後にて又しばしもの語りして三時頃かへる。前島君より小説本十二冊借る、(むら竹及涙香の小説)、此日佐々木君代岡村来り、師君に貸置たる吸入器の催促成けり、所在不分明にていたく當惑し給ひけり、きね女暇を乞ひて郷里へ歸るといふ、去れども師君はさまで不自由を憂ひ給ふ様子なし、吾宅へ歸りしは三時過成し、例の小説氣違ひとして此夜十時まで取付限りにて十冊計讀みぬ、しれたる業成や、國子今日關場敬に反物を貰ふ、幾度となく取出しては打眺めたるは嬉しさになめり、此夜山下次郎來る、直一君大病のよし、夜具仕立貰度とて成けり。

二日 晴天。母君山下の見舞に行給ふ、九時頃稻葉君來る。午後山下信忠君參らる直一君病氣に付母君に相談にてもあるやと思はれたれど留守なればしばし依頼して歸らる。母君は四時頃歸宅さる。

三日 晴天。稻葉君參らる。姉君來る。母君岩佐へ參らる。午後母君近邊の子供に物をやる大悦びの事、國子當時蟬表職中一の手利に成たりと風説あり今宵は例より酒甘しとて母君大ひに酔給ひぬ、國子と兩人湯島へ買ものに參る、山加に切を買ひ、中島屋に紙を求め、かね安にて小間ものをとつ、日暮てかへる。

四日 早朝稻葉君押かける、正朔君を伴ひ來たりて預りくれよといふ、されば今日一日はとてあづかる。午後母君山下氏の見舞に參らる。朝小雨ふる、やがて晴天。

五日 稻葉君來る、正朔を今夕迄預りくれ度しとて依頼す。午後江崎牧子君より郵便來る。國子と共に安達君へ暑中見舞に行腦病の物語りをなしたるに、伯父君はくれく讀書作文等をなさる様にと物語らる、腦は神經の集合する所なれば患はこゝに止まらで餘病を引出すこともあり、又は充血して不測の禍を生ずることも有るべければ、小患の中によく養へよとて自身をたとへに引て諫めらる、承はりて歸る、夕飯したゝめゆけなどいひつれど、しのばすの違見はやとて早々歸る、しのばすの記は別にしるす、歸路は池の端をめぐりて大學を通過てかへる、五時過成し。此夜稻葉氏又來

たる、明朝まで正朔置貫度よしいふ。

六日 晴天。早朝より運動にとて近邊を散歩す、歸りて我の廻りを掃除す。

七日 晝晴、夜に入而より雷雨す、土用明といふ、この夜徹夜。

八日 早朝師君より手紙来る、一兩日は腸かたるにて腹痛たえがたければ今日一會休むべきよし成けり、依頼の裕衣も出来上りたるをもて直ちに見舞に行く、さしてのことにもあらずといふ、又綿入を仕立くれよと一枚たのまる、歸宅せしは九時頃成しかば、これより圖書館へゆかばやとて出づ、空は一點の雲なくて焼様なる太陽の光り烟かともゆる大路の砂ほこりなど暑しともあつし、大學を抜て池の端へ出づ、茅町のほとりより蓮の清き香遠くかをりて心地もすがしく成ぬ、ひろごりたるはにくしと清少納言がいひけん夏の柳岸になびくかげもすゞしく、まして水面みえぬ斗咲みちたる紅白の蓮明渡る風に葉うらのかへりぞみゆるもをかし、蓮根のつなぎたるこれのみはあらずもがなとおもふ、競馬の埒結びたるいとみにく、あつかりしが、ふるびて所々こはれなどしぬれば少し氣色なほりし様におもひがたき、東照宮の石の段のぼる程さと吹おろすかせに杉の下露のこぼるゝも涼し、こゝのみは

さらに夏と覺えぬよ、圖書館は例のいと狭き所へをし入らるゝなればさこそ暑さもたえがたからめとおもひしに、軒高く窓大きなればにや吹かよふかせそゝる寒きまでなるいと嬉し、いつ來たりてみるにも男子はいと多かれど、女子の閑覽する人大方一人もあらざるこそあやしけれ、それもそれ多くの男子の中に交りて書名をかき號をしらべなどしててもて行にたれば、違ひぬ今一度書直しこよといわるれば、おもて暑く成て身もふるへつべし、まして面みられさゝやかれなどせば心も消る様に成て、しと汗にをしひたされて文取しらぶる心もなく成ぬべし、今は代言試験も近付し頃成とかにて法律書取しらぶる人いと多かりき、思ふまゝのふみ借得てよむとよむ程に長き日もはや夕暮に成ぬるべし、園の梢に日ぐらし聲高うなきて、入谷のかねかすかにひびき、窓にさし入る夕日のかげ少し薄く成ぬ、おどろかさされて室を出れば大方人も歸りにけり、書をかへして門を出ればからすの打むれてねぐらへかへるかげさへみえ初ぬ、母君の今日は早くかへりね、よべよすがらねむらざりしに身もつかれなばかひなからんとてかへすゝ仰られしを忘れしならねど、いとくおくれにけり、いざや近道をとりて谷中より歸らんとてくる、西日やうくかげろひて紅の色を斗殘してあすも晴

よとうなひ子がうたふ聲も道いそぐ身にはあわたしく聞えぬ、床机といふもの表へならべてあらひたる裕衣ののりこわけなるをきて團扇もてむねのあたりあふぎあるは今行水とりたるなるべし、十斗の女の子がしろいもの所まだらにつけて、三つ斗の子の汗ぼなど出来たるにやかしら斗いとしろくしたるをせをひありくもをかし、片町といふ所の八百屋に新芋のあかきかみえしかば土産にせんとて少しかふ、道をいそげばしとい汗に成て目にも口にもながれいるをはんけちもてをしぬぐひくして、はては少しいたくさへ成ぬ、日は薄くらく成たれど人のみるらんわづらはしくて傘はなほかざしたり、空橋のした過る程、若き男の書生などにやあらん打むれてをばしまに依かりてみおろし居りたり、何事にかあらんひそやかにいひて笑ひなどす、しらすかほして猶いそぎにいそげばひとしく手を打ならしてこちむき給へなどいふ、何の心にていふにや書のかたはしをもよむ人のしわざかとおもへばあやしくも成ぬ、家に歸れば母君は外に出て待給へり、妹は夕げのもうけいそがわしくし居たり、只今まかり歸りぬなどいふはしに、いざ帯とけよ、衣ぬげよ、あつかりし成べし、つかれつらめ、湯もわきてあればあびてこよと、残る方なくの給はするに、かたじけなくもうれしくも

覺えて、汗の麻衣ぬぎ捨てゆあみて上ればあらひ衣の白きを出して、留守のまにこれあらひて置きぬ、着かへよとの給ふ、妹は姉君み給へ、君が好ませ給ふものにておき侍りさつまわりもこしらへ置ぬ、夕げいざとてすゝめらるゝに、すきたるはらの長き道を廻きぬればいとしくうゑたるにはいづれも美味ならぬはなくて打くつろぎたふべ終りぬ。

九日 江崎牧子君へ返事を出す、甲府伊庭氏并に北川秀子君へはがきを出す、國の帯を一本仕立、晝後植木屋用間に參る、依て建仁寺垣結へき様申付く、明日より參るべくとてかへる。洋傘二本張換へさす、一ツは甲斐絹二重張、一ツは毛織子の平常持也、双方にて一圓十錢といふ。

十日 早朝より植木屋參る。

筆 すすさび

日にみる所聞ところ思ことさまぐにこそあれ、行雲のごと流るゝ水のごと過ぎ
はてなん年月のち立歸りてむかしをしのぶくさばへにもと、筆の行まゝ心の赴くま
ゝ富士の烟のぼりたる際のことこそしらね、ふもとのちりのはかなごとをそゝるにか
いしるし置なり。

春はあけぼのといふものから夕べも猶なつかしからぬかは、日ねもす遊びし花の木
かげやうくくらく成ほど。かねのねかすかにひびきてねぐらにかへるからすのこゑ
などものどかに聞えて、

大治二年崇徳の帝の御時殿上御修法どもする夜居の僧阿闍利の衣など盗人ありては
ぎたりとか、折柄朝家の衰へしさまゝしくこそ。

鴨 長明が四季物語七月の部にいへることあり。凡情の愚なる鶏牛犬馬よりおとれ
るなり、日夜世話につかはれて惑のうちに酔をなし、酔のうちに死をなす、約せしが如
く、誰もくやがて霊と成べきを、我も人を祭り又祭らるゝ道理をしらすといへり。

世の人耐しのぶといふことこそ萬の寶にもましてめでたけれ。またをくゞりけんか
ん信履をさゞげし張子房などを始めとして猶其ためし多かるべし。心におもはぬには
あらねど身のおこなふことの難きはいかなるにか。夏のは夏也冬も猶ともし火のも
とにふみどもまなぶほどねぶたさのいとたへがたければ、氷の様なる水かしらよりあ
びてしばしまぎらはすほどやがてこそあれ、身うち少しあたゝまり手足の常にかへる
頃にははやいつか文の上につぶし居ることあやしけれ。母なる人にこやなど呼さま
されて始めて夢覺ぬるもはづかし。いでやこたびこそはとひたすらに念じて、ふたゝ
びふみ取あげて一ひら二ひらは少しおぼえあれど、夫より後は又同じ様也。いふかひ
なく口をしくて父母の遺體とてひぢりはの給ふものから、もろこしにも其ためし有事
よ、いかにしてかこのねぶさ覺してんと我もゝのあたりに錐の先少し突たてつれば、

其いたさはいとたへがたし。それも又しばしにてこゝろのこゝにあらねばにや、眼はみひらきながらよむ文はふとも覺えぬぞ心ゆかね。父君などのおはせし時昔し語りを開けば子に伏し寅に起るとかや、いにしへの二時今の四時間いぬればよきもの也といへるを、我計かくねむきはいかなる故ぞも、こは病のなすわざにやともおもへり、おのれ十四計のとしまでは病ひといふもの更に覺えず、親もはらからもみな腦の病ひにくるしむなるを我は一人かいらいたきなどいふことふつになく、さればにやいとよきより物學びなど人よりはならひとること早くて忘るゝこと少ななど、其頃の師も給へりし、みづからが心にも一たび學びたることいかに年月ふとも忘るゝてふこと有べきならずと常におもへりしほどに、やゝ大人び行まゝにこゝにかしこに病ひ出來て、こと更にかしらいたみ肩などのいたくはれなどすれば物覺ゆる力とみにうせて、耐しのぶなどいふは更に出來うべくもあらず、昨日聞たるを今日忘るゝ夫はまだよし朝聞たるは夕に忘れ今學びたるを今のまに忘れぬ、かく成行てはてゝはいかにかならんとすらんとおもふに、今より心細き事こそ限りなけれ。さはれ猶命の有なんほどは耐へもしのびもして學ばゞやとおもふものほどしらぬえせごゝろなるべし。

所替れば品かはるとやら人情風俗の異なること難波と伊勢の遠からぬさへあるを、ましてこれは左もこそあれと思ふもの語りを聞たるまゝかいしるす也。

倫敦人と巴里人との相違せること

巴里人は街道を行時右に倚り、倫敦の人は左による、巴里の人は兵營の様に廣く大なる家に數家の人すめり、倫敦にては尋常なる家に一族すめり、巴里にては集會をするに珈琲店にて催し、ろんどんにては俱樂部に會合す、巴里の人は寢室屋壁の上部にあり、倫敦人は室の中央に寢床を設く、巴里人は一日二食に過ぎざれど、倫敦人は三度四度の食事をすとか、巴里の麵包は其形長く、倫敦のは四角也、巴里人は珈琲をのみ、倫敦人は茶をたしむ、巴里人は食事の間に頻に話をなすとかいへど、倫敦にてはさることなし、巴里の職人は其友を呼ぶに君如何とよび、倫敦のは傍輩どうだといふ也とか、或人のものがたられしなり。

水戸の人は大方酒をたしむ人多き様也。我師の背の君林忠左衛門君などのことを聞に、常に夕げの折に三ますづゝをものし給ふとかや、それはまだことにもあらず、友など有ての時には一斗をも辭し給はずとなん、ある時山岡鐵太郎ぬしと共に一斗の酒

ものし給ひて後、高足駄にて箱根の山こし給ひしこともありきとぞ、さはれ猶醉給ふことは無きにや、師の君は遂にさる顔し給ひしを見ずに終りしとかたり給へりし。

馬琴が模稜案にいはく、暗き所には神明これを見明き所には王道これを正す。

上田秋成がつら草子に西行法師をかけるうちに、鎌倉の右府仰たまふ、汝が遠つおやの秀郷といひしは世にいみじき弓の上手となん聞ゆる、傳へたることも有べし、かくこそと覺ししみることは忘れずこそ有らめ、事一ことにても教へ承るべく、こはますくおそれある御とはせなり、御物語のはてくはつはもの、道しばしも怠らせ給はぬみ心より、野山を住家のやせ法師にだにものとはせ給ふことのかたじけなさよ、むかひ奉りてはおこがましく家の傳へなりなどとして聞えや奉るべき、まして有難き大宮仕へをいなみたてまつり、みおやたちのいつくしみをさへあだなるものにとしわづかに廿五にして家を出たるいたづらもの、弦引一つだに心にとめしことも侍らず、たゞ一言の忘れがたきは賞を重くし罰を軽くせよといひしも、任ずるもの

をばづかしむればあやふしといひし有難きよ、士卒の疴を病めるを玩ひしは人の心をよく買なすといへども、誠の情よりも覺え侍らず、かまどを滅じて人をあやふきにおとしいるは將師のさかしきにて、國を治め天下をしるべき君の御心にあらず、軍を出し給へることのあやしきまでかしこくませるをよそながら見聞奉るには此方の御とひゆるさせ給へとて額を板じきにすりつけて申すしかく。西行後にこの事を人にかたりていふ、右府は誠にねぢけたる君なり、口に蜜し給へど心には針のおはするぞ、淡高の大度曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中にいれたるは我佛の冥福といふことを生れえさせ給ひけん、只悲しむべきは神の御末の此後やうくをとろえさせ給はん世の姿なるはとて、涙とやめがたくしても語りしとなん。

馬琴が青砥模稜案の内牛裁判の批にいへらく、美女の細腰白刃を藏む房中此を以て轉た爲仇、奸夫の胸膈爪牙鋭し、暗裏人食ふこと如虎彪、兄弟垣に闘ぐ腰越狀、貝公指を拾ふ玉龍の湫、驚くことなけれ窮達塞翁が馬、世間斯の如き有牽牛。同じく模稜案。

牝鷄晨すれば其家安からず、招嫁の鹽梅婦人に成る、親を棄て他を養ふは皆其聘物の多きが爲なり。一ト度名を權る、時は勢ひ禁すべからず、鏡岱毒惡遺書を請ふ時老醫も治し難し、一家の難み獨庵滑稽句讀妙也、潤平いかでしるべき上梁の詞、南人の佳瑞とする所北俗は不吉とす、飛土太婆々を賊して婆々菜園を暴す、李下に冠を正さいるは必賢者、瓜田に沓を入るゝも偷兒にあらず、福の倚る所は禍の始、禍の伏する所は福の基、足をしらざれば禍を招く、得まく欲すれば咎を致す、意馬を卻て心術に養し、痴牛を牽て桃林に隠れよ、一人寡欲なれば一國羞を知らん、さはれ齊東野人の言、和にあらす漢に非ず、綴れども語をなさず、詩にあらず歌にあらず韻を嗣ぐによしなし。

夢は一事を以てその虚實をおすべからず、これを史傳に考ふれば神日本磐余彦神武天皇は夢に天照皇大神武甕雷神と謀りて劍を下し給ふと見て丹敷戸畔者を誅し給ひ活目入彦五十狹茅尊則垂仁天皇は御諸の山の峯に昇りて四方に繩を組粟食雀を逐と夢みて帝嗣に定らる、殷の武丁は夢に依りて賢臣傳説を擧用ひ、周の文王は夢に依りて九十九の齡を知れり、この餘詩書禮經に載する所枚擧に遑あらず。

二夫川の善吉夜仇をさけて山中の廟に隠るゝくだり、破簷月を引て燈明に換ゆべく懸魚雨に朽て鼻を栖まするによろし、風は木の葉を誘て賽錢を散らす如く、狐踪蹟を印して落花を畫くに似たり、神祠ありといへども敬せざれば威をますによしなく、旅店なしといへども慰はざれば疲れを補ふにたらず、物おもふ身のいとしく仰げば月も傾きて丑三ははや過たり、且くこゝに明さんとて古廟の中に進み入、大山祇の冥助を祈りて厄難消除と念するに、秋の夜なればいと長くて曉る様にてまだ明けず一夜を千世とまつ風山河の音凄まじく岩堰く水と我胸と碎けて落る涙には片しく袖をしぼりあへず、思ひつかれて身を倚る壁にもたれてぬるともしらす霎時はまどろみたる夢に。

佛國の探偵秘傳に、分り難き犯罪の底には必ず女あり。

あらはれは

なとり川瀬々のうもれ木あらはれは

いかにせんとか逢ひみ初けん

よみ人しらす

うち橋の中絶

わすらるゝ身をうちはしの中絶て

人もかよはぬとしぞへにける

頼氏日本外史引用書 二百五十八種

天地萬物逆旅 光陰者百代の過客。

謂濱の波面にたゝみ商山の月眉にたる。

干將の刃も持人から。

留春 春不駐、春歸寂寞、厭風風不定、風起花蕭索、

閉閣 只聞朝暮鼓、上樓空覽往來舟、

落葉賦

霜白樹頂老、雨晴山影醉、

紀 齊 名

紅授褒賞下賜

明治二十四年七月廿日

賞勳局にて下賜せらる

島根縣石見國邑樂郡日貫村大津千代太妻

山本 しげ

明治廿四年六月十二日日本村室田種平家宅失火の節同人妻咲の煽烟中に陥り死に瀕するを認め自己の危難を顧みず婦女子の身を以て猛火の間に冒進し爲に體重傷を被むるも屈せず遂に之を救済す其義勇洵に奇特とす依て明治廿年七月勅定の紅授褒賞を賜ひて善行を表彰す

露國皇太子殿下大津に 逢難事件費

二萬四千四百十二圓三十五錢四厘

十八史畧 拔書

肅宗明皇帝、名は紹、幼にして聰慧なり、一日父帝問て曰く長安近きか日近きか、紹曰く長安近し、但使者長安より來るを聞く日邊より來たるを聞かず、帝其對を奇とす、其後群臣と談之に及ぶ、又問ふ、答て曰く日近し、帝愕然として何ぞ前日と異なる、曰く頭を擧れば日を見る、長安を見ず、帝益これを奇とす。

後趙の石勒自ら韓信彭越に比す。

うたておなじ師の君に學びておなじ様にとし月を重ぬるものから、人は追風に帆上げたる舟覺えていと進みにすむを、しれものは只坂にくるしむ車のやうにてともすれば下りがちなるがいと恥かはしきに、手などは生えてふつゝかにて詠草などかきたる我ながらいとあさましければ、かまへて人にみせ參らせぬをあやしう物はぢする人よとて、みの子の君ものつゝみの君とつけて笑ひ給ふに、こと人もいつしかさなんいふ。文月計例のまとゐに夏子の君詠草みばやとの給ふを例の引かくせしかば、打笑ひてやみ給ひにき、しばし有てたとう紙にかく書つけてたまはず、うへにはものつゝみの君へとて、

袖をもてよしおほふともたぐひなき

玉の光りはかくれざりけり

いと汗あゆるこゝちして物も覺えねど、

あらはれん光りなりせばこと更に

狭き袖には何つゝむべき

中々恨めしきまでなる御言葉哉、今はゆるさへ給へと泣ぬ計にいふほど、又みの子の君、

女郎花などこと方にそむくらん

おなじまがきのうちに咲るを

かへし參らせん言葉もしらねど、

咲まじる花のにはひのまばゆさに

そむく心を哀とぞみよ

猶ゆるさへ給へといへば、人々いとい打笑ひ給ふ。

一日例のまとゐに風前薄といふ題給はりぬ、おのれかくなむ、

野邊みれば薄の外の色もなし

千草の花は風にかくれて

師の君披講の折の給ふ、此題生死に關する文字一ツあり、猶考へみよとの給ふ、あまたゝびみもてゆけどえみしるべくもあらず、さての給ふ、結句しかれてとはなどい

はぬ、かくいはいいとめで度かるべきをとなん。

のべみれば薄の外の色もなし

千草の花は風にしかれて

其折小がさ原君あらく吹風にはいとみだれけりとよみ給ひしに、さては實際に違へりとして證歌あげ給ふ。

一方になびき揃へてしの薄

あらし風にはみだれざりける

となむの給へりし。

家に自作りていさゝか野菊など植ばやとて母君苗を買給ひしに、胡瓜成りとしてとりたるもの生たつまゝにさまことなりたる様なれば、相知りたる人にとひなどするにこは夕顔成るべしといふにいとうれしくて、いかで花をみばやとたのしみ居たるにやがて咲くをみれば黄なる花成りけり、あやしくて又とふにさはへちまといふもの成るべしといふ、へちまならば水とらんなどおもひまうけてみに成るをまてりしに冬瓜といふもの成ければ、おこに成て師の君にかくなんと聞えつるにいでやよはみな其たぐひ

ぞかし。

莪と思ふ子は菖に成り、麒と思ふ人は鯨と成るなん世のならひ成り、これに依てかれを思へば得る所また少なからじとの給へりし、達人の給ふことは何事にもかならず説有けり。

ことし春の頃より都わらべのうたふをきけば、かにしてくんねへやせるはへとなんいふ、かくて國會なども開けて歳費節減とかや何とかやいたくかしらいため給し人もありしとよ。さるを又此秋頃はかくなんうたふ、出来たかへ本當だよ、御飯がにえるかへ本當だよ、南瓜がと、或人はいへり、かならず豊年の兆なるべしと、誠いつはりはしらす聞けるまゝを。

家にある茶の樹にはふ虫のまゆを作りたるいとめづらかなりとして、妹の取たるをみるに、たい絹の綿もてつゝみたる様にいとつくしくゆゝしげにもあらざりけり、こをもて猶製作せばかならず有益のものならめなどいふものから、其道のことしらねばせんなし。

蟬 は

あぶら、日ぐらし、つくく法師、朝戸出の袖すしく吹風に軒ばの梢の露散て鳴
出る日ぐらしの聲いといさまし、夕日のかげ消る山のかげにさゝがにのいとかくる軒
ばをながめてものおもふ折しも鳴出るはいと淋し、すさまじかりし夕立の雨晴過て雲
のあしきるゝやがてあぶらせみのかしましく鳴はにくし、夏の暮方より秋にかけてを
しくと鳴たる、なれも同じ心にとおもふにかなしくもうくもつらうもさましくにて
いと哀也、されどいそがしがほなるはいとにくし。

或人大隈重信君の書を得まほしとてこゝかしこに請たれどもいまだ得ることをえず
となんかたる、おのれの師の君は交りも深くものし給はいさゝかの書はおはしますべ
しおのれより願ひ参らせんとてうけがひぬ、やがてとてなんいとせちにのぞび人侍り
哀一ひらにまれ得させ給へとこひつるに、師の君もいまだ更にみ参らせたる事あらず
となんの給へりし、いぶかしうてそれより猶こゝかしこ君に親しき人につきてこひ参

らすれど何方にもく同じやうなるはいかなるにかいといぶかしうこそ。

葉月廿日の頃例の師の君のもとにて歌よむこと侍りしに、其日雨降ければ新秋雨涼
といふ題成けり、にはの面をみ渡せば櫻の葉の色付てはらくと散るさまふとめにつ
きて、

ふる雨に櫻の紅葉ぬれながら

かつちる色に秋ぞみえけり

といひ侍りしに、師の君の給へり、此眼前の景なるものから猶實にのみよりてはよみ
難きものぞかし、打まかせて櫻の紅葉といふべきなるはあらずとて、

そめ出し櫻の下葉ふる雨に

かつ散る秋に成にける哉

櫻の直衣

面白裏赤花

柳は 面白裏青。

紅梅は 面白へにうらむらさ。

青朽葉は 面白へにうらむらさ。

ふたあいは 赤花と青花もてそむる。

村濃は かみを白くしてすそを紫にても紺にてもこくそめし也。

まごは おもてしろくうら青き夏の衣也。

卯花は おもて蘇芳うらちえぎ。

紫苑は おもてすはううら青し。

萩は 七月より九月まで着す。

黄朽葉は おもて紫うら薄紫。

藤は おもて朽葉うら黄。

山吹は

朽葉色といへるは青丹の事かなほ考ふべし。

日本紀抜書

無状あぢきなし、願所、可以爲、木の親、匂々廻馳、草の親、草の姫又野繼、至貴を尊といひ、これよりあまるを命といひ、並に美擧といふ。

勞獲

花月草紙にいへることあり、何にまれ花さへ實さへはじめよりなんとてはいか得ん。

天子詔、上皇宣旨、皇太子 令旨、將軍 御教書。

九月はじめの七日計母君淺草なる三枝殿におもむき給ふ、よからぬこといもかさなりてころろざすことはならず、願はしきことは遠くていとせんなきに家はいやまづしにまづしく、妹は日頃なやましようして打ふし居るなど、取つゝくるにてこがね少し計からばやとて成けり、ひるすぐるも歸らせ給はず三時なるにかへらせたまはぬはなぞ

の故ぞ、花につく世のならひなるにかく落はふれてかゝることいひ行たりとて誰かは
 ものがたらひ合せだにやはする、いふかひなさにいづくをか猶もとめ給ふにやなど思
 ふもいとむねいたし、とあるにつけかゝるにつけ身のいとかひなきなんなげかはしく
 て、いづらなその身は女といふともはや甘とも成れるを老たる母君一人をだにやしな
 ひがたきなんしれたりや、我身ひとつの故成りせばいかいやしきおり立たる業をも
 してやしなひ参せばやとおもへど、母君はいといたく名をこのみ給ふ質におはしませ
 ば、兒賤業をいとなめば我死すともよし我をやしなはんとならば人めみぐるしからぬ
 業をせよとなんの給ふ、そもことはりぞかし、我兩方はやく志をたて給てこの府に
 のぼり給ひしも名をのぞみ給へば成りぬ、さるを兄君うせ父君ゆき、やうく人には
 あなづられ世にはかるしめらるなどいかに心ぐるしかるべきことをと思ふもかなしう
 思ひつゞくる程に、四時といふ頃歸宅し給ひぬ。いかゞ彼方にてはととひ参らすれば
 兒よよろこべよ世に人鬼はあらずとよ、信三君の仁俠なる、あなごとくしや其れ程
 のことになどむび給ふ、猶の給へおのれとりかへ参らせんとて心よく卅金かしてく
 れぬ。伯母君はいといたくやせのみゆるに鰻とらんくひ給へとて其馳走にも成たるよ

とていとうれしげに涙おしぬぐひ給ふ。人の情のかたじけなきにもいとゞ我がみはづ
 かしうて其方に向て心のうちにはふしおがみぬ。其次の日の事成り、小柳町なるも
 ち月にて赤子のいたう病むてふを見舞てこんと母君の給ふ、其前の日にも見舞たれど
 猶いと心細く成しかばとて赴き給ふ、夕ぐれ方かへらせ給て、さて夏よ我みはいとあ
 しきとして來にけり、なにしからぬべく思ふぞよとの給ふ、何事にかおはします、
 身にはいかりは侍らすかし、猶の給へととひ参らすれば、さは聞よ、もち月がり行て
 我みるに赤子はいたうやせさらばひてよも生くべくもみえざるに、家いとまづしう
 て今日の暮の米のしろ覺束なげに打なげくめる、とし寄のえうすぐしがたうて昨日よ
 所よりかりたるこがねかすべきにはあらざりけれどちと計かして來ぬ、いかいゆるせ
 よとの給ふに、なぞの御はいかりぞそはいとよくもせさせ給し哉、情は人の爲ならず
 とかや、俗の詞も侍るものを、こゝにて成る丈のことにあらば、何ごとにもまれめぐま
 せ給へ、いとよき事をといへば、さいはるれば心おちぬとて打笑ひ給ひぬ。

六月の未成けり、半井うしより教へをうけてさはなしうべきや何やしらす。

図書館はしのぶが岡の西のすみ成るべし。音學學校はむかひにて、美術學校は其むかひなり。

谷中へ通ふ大路を少し右へ入て櫻木病院のむかひがはにぬりたる塀高くしなして、門は此頃あらためたればにやまだいと新らし、入ての右より敷石つらねて玄關へ通路一筋、左は花だんにて秋草をかしうしなしたり、北の方にはぬりごめふたつあり、そが右の方はくれ竹のませさ、やかに結びて、咲こぼれたる花どもいとをかし、山あいはかきの外にたけ高うたちて、萩は半ふしながらさけるもよく、薄はいまだなびかぬものから、秋の姿はいちじるくみゆ、女郎花はとくうつろひて桔梗に色をゆづり、をしろいとかいふ花の人めかぬものからなつかしう咲るかたへにかひざいくの作り出たる様に咲たる、取立ていはんもいとこちたし、中庭は梅の老木の半うつろに成て空おほふ様なるもめづらかにをかし、枝ざしをかき松もあり、高野まきのさ、やかなるもいとよし、つくばひはよしありげにて、燈籠も無下の石にはあらじかし、折まが

りたる廊のあたり、板敷のつや、かなる、檼柱もより居まほしげ也、水亭の風鈴かすかにおとなひてしのぶの露のかゝる夕べ例の君の打とけたるあされ姿にて團扇手まさぐりして打ながめ給らんさまよ、いかなるらんとみまほし。

花圃女史田邊龍子君はことし廿四斗成るべし。

故の元老院議官今金鶏の間祇候太一ぬしの一人娘におはしまして、風彩容姿清と洒をかね給へるうへに學は和漢洋の三つに渡りて今昔しのをしへの道あきらにさとり給ひ、書は我師の君いつの高弟にてあいよりあをしと師はの給へり、和歌は天びんと故伊東祐命うしもたゞえ給へりしとぞ、文章は筆なめらかにしてしかも餘ゐんにとませ給ひ、俗となく雅となく世の人もて遊ばぬはなし、其名の世に聞え初しは君が廿一許の頃藪の翁となんいふ小説あらはし給ひしより成けり、其後都の花に八重櫻といふをものし給ひ、よみ賣新聞におだ巻物語を草し、ことし小説くさむらに萬歳の善作あり、又女學雜誌の特別記者として小説に紀行に高名なると多し、さるからにいさゝかもほこりがなどのけはなく、打むかひ參らする折はをかき滑けいものがたり洒

落の談話のみせさせ給ひて、人のおとがひをこそはとけ恐ろしなどおもはするけはいさゝかもおはさいるこそいと有難けれ、おのれは當時の清少納言と心のうちにはおもひぬ。

天野瀧子ぬしは文學士爲之君の室にして、前橋孝義君のいもうとにこそおはしけれ、優柔の御心さま温雅の性はいとよくおもてにあらはれていとなつき安かりけり、學おはせどもあらはさず、文長じ給へども世にしらす、折ふし、われどちのふみのうへ猶ざりの文章くらべなどにてはかくはおはしましけれといとたふとし、なかんづく奇才にたけ給へらんなんいとうらやましき、御子は今二方おはします、文子の君はろうたくふくよかにめ、しく、今より生先いとたのもし、武君はおの子にしおはしませばましていか計するは山松の大空までやおひのぼり給はんすらむ、かく方々の御母君ともなく君はいとわかうおはします、廿六七許にや、み參する所はいとわかげ也。

片山照子ぬしは工學博士東熊君の室にて同じ博士田邊朔郎ぬしが姉君なり、龍子ぬしにはいと子にておはしませば、面やうは少し似給へる様なり、ことしは三十あまりにや、み參する所はいと若かり、書と和歌は君が特技におはします上に手げいにた

け給るなん人の及ばぬ所にこそ、家政をいとよくをさめ給ひてみ心ひとつに萬思し静めたるさまこそうれしけれ、君も人にの給はぬことかゝんはいとくるし、有がたきみ心ばへにこそ、みの子ぬしこそ猶風流の方はすぐれ給へれ、花顔柳姿いにしへゆかしがる人も多かるべし、かりそめにの給ふことも艶にけしきあるは只人の及ばぬ所なるべし。

萬はさし置いていふにもあまり筆にもえたらぬなん伊東の夏子ぬしぞかし、あでやかなるものから艶めかず、まめなるものから打やはらぎて、げに女とはみゆ、書はすがたに似てやはらかに歌はとゞこほる所なくして故人の後をふまず、實景をよみ給ふになん及ぶ人なかりき、かどくしき學文の方はいと世にもてかくしてしられじとのみし給ふものから、薄ものにつゝみたる玉の様に光りはおのづからもるゝぞかし、大方人からのかうくしうなごやかなるに、心ばせなんさすがにおもふこと人にことならせ給ひて、やまとごゝろのいとをかしきぞいわでおもふぞなるべし、君が境界よいかにせんとぐるしうもおはします哉、さはれ財には富たまへり、都大路廣しといへども君が家ほどの財もてる人は少なかるべし、母君も誠のにていとすこやかにおはしま

す、打みる所は何ごともあるをなどさはと問參らせんもいとかなしう涙こぼれにこぼれてえもかきやらぬをかつは人のつゝませ給ふことえもらさじとなり、とははおのれと同じこと、廿にことしは成給へりき。

學びの友いと多かり、信友多く益友多かり、いづれをいづれといふべきならねど、この君たちこそおのれの爲には姉君達にて。つかへまつるべきよしおはしませば猶更にいとなつかし、猶島田政子ぬしの麗質なる、乙骨牧子ぬしが風流洒落なる、鳥尾廣子君の行未頼もしき筆力、高田ふじ子君の艶美なる容貌、前島さく子ぬしが一ふしある和歌の體、橋本花子ぬしがむかし戀しき人から、田邊靜子ぬしが無邪氣なる、清水田鶴子君の計り難心中、小がさ原つや子君はよく父兄の君の教へを守りて今様めかせ給はぬ、水野銚子君は誠に諸修と覺ゆる容儀をさなけれどもいとよくととのひ給へり、中村とし子君はきはめて美にして、長齡子ぬしは沈着不替に、おさなき人には中牟田常子君行末今より思ひやる、伊澤の夏子君きわめて今様の才にたけ給へるなど取たていわんもいとおこなりや。

別れこそ何ごとにつけてもいとかなしけれ、師の君のもとにかひたる猫子をうみぬ、四つ有つるうちのふたつははやう人にやりて残りのなんいと中よくて抱き合てふし居たるなどをかしかりしが、島田の政子君ひとつ得まほしとの給ふまゝに送り參らせんとす、龍子君おのれがもて參らんとていかゞしめし給ふ、師の君のことにめで給ひの成ければ少し心引かれてとかくまぎらはしつるほどに、いざ給へよおのれはまかでんとすなるをとの給ふ、さはせて首輪をだにかへさせてとて真紅のひも褪たる結びかへ給ひぬ、母君も見ておかせ給へみなもみや、ものだにくわせてやらんとて魚少し手に置てくはすればかほ打守りてとみにもくはず、哀やなむしがしらすのなめりとてかきいだきて打ながむれば、にやう／＼となきてえりのあたりひたと抱きつきぬ、今一ツ伴ひ出てみすればふたつながら悲しげになく、引もはなしがたけれど、はつべきならねば龍子の君いだきてやをら出給ひぬ、えんのほとりに今ひとつはつひ居てなきもえせず、うつしごころのなくなりたる様にてふしたるなごりもいと哀なりし。

定 家 卿

昔のしたにうづもれぬなを残すとも

はかなのみちや敷しまのうた

小出の大人はいと人にくまるゝ人成りけり、みの子ぬしのもとをとふて例のこに
くき筋など引かけつゝ物語りどもするうちにわが師の君久子茂子ぬしなどをみな只
呼すてに呼つゝいふ、みの子ぬしがりかかり居る書生のいと聞にくゝわびしく成て、
歸りて後なぞあの翁の傲慢なる今日はおもてよくみ覚えぬ、やみの夜に四つ辻に立て
おもひのまゝに打こらさばやといふ、みの子ぬしをかしがりてさなまがくしくの給
ひそ、いとよき歌よむ君ぞかし、今日もの給へりし、

雨晴て名残しめれるあさ庭は

こほろぎ啼て萩のはな散る

かくなんあるとかたり給へば、こはよき歌かな、さはゆるすべしといへりとなん、
天地をうごかし給やあらずや、書生の洋杖はのがれ給へりとおのれとかたりて笑ふ。

一日背面美人といふ題給はれり、人々をかしがりて笑ひなどするに師の君それよい
とをかしき物語こそあれ、祐命がまだ若かりし時のことぞかし千樹の君おのれなど
したしき人二人三人して墨田川に花見る時、先に行女のうたのねにいにしへのものが
たりにいとよしとかきたるもいかでかくぞなどそゝるに床しがりて、あまた人をおし
分つゝはしり出てふと面をみしに、いかにぞや桑を取たるむかしの人の様に宿瘤はい
かゝ成けん猶其類なりければ、あなや二度驚きぬと高くよべば、かの女つとはしりか
ゝりて祐命が脊を手いたくたゝきて、これにて三度や驚き給ひけんといひしなんいと
どしく興をそへていみじき笑草にせしぞかし、才たけたる女なりしよとて笑ふ。

心くるしきもの

實よりは名の高く成たる、さすがに其位置しをしければ才ひきゝをしられじとする
に、詞も常におもふがまゝはえいはず、まして文かき歌よみなどすべて心くるし
女の身にてもものほめたるもうれしきものと人はいひつれどいと心くるし。

詩經鳴鳩の篇、螟蛉子あり、蜾蠃これをおふ。
この意味をもて馬琴やしなひ子を螟蛉子といふ。

割物は龜甲、蜀紅、七寶、麻の葉、サヤ形、タテワク、其外幾等もあれどこゝ等有也。

模様は雲龍、二葉葵、龍の丸、雛々菊、源氏車、槌車、香の圖、牡丹唐草、菊がら草、蓮がら草、立田、よし野、狂ひ獅子、藥玉、蝶の丸、菊水、花の丸、をとり桐、登り龍、下り龍、鳳凰の丸、其外形かはり鳳凰等幾らもあり。

品もの

三尺の細口にして臺附龍耳の花生一對。

一、花瓶の中ほど善き處へ二本の筋を引く是を見切といふ、其中へ正面の處へ龍に立浪の丸模様を畫き但し表裏とも其廻りは菊桐の模様を飛ばし、古代唐草を以て其あしらひとす、地つぶしは赤、其模様の繪の具はすべて様々のゑのぐにて是をだめるなり。

り。

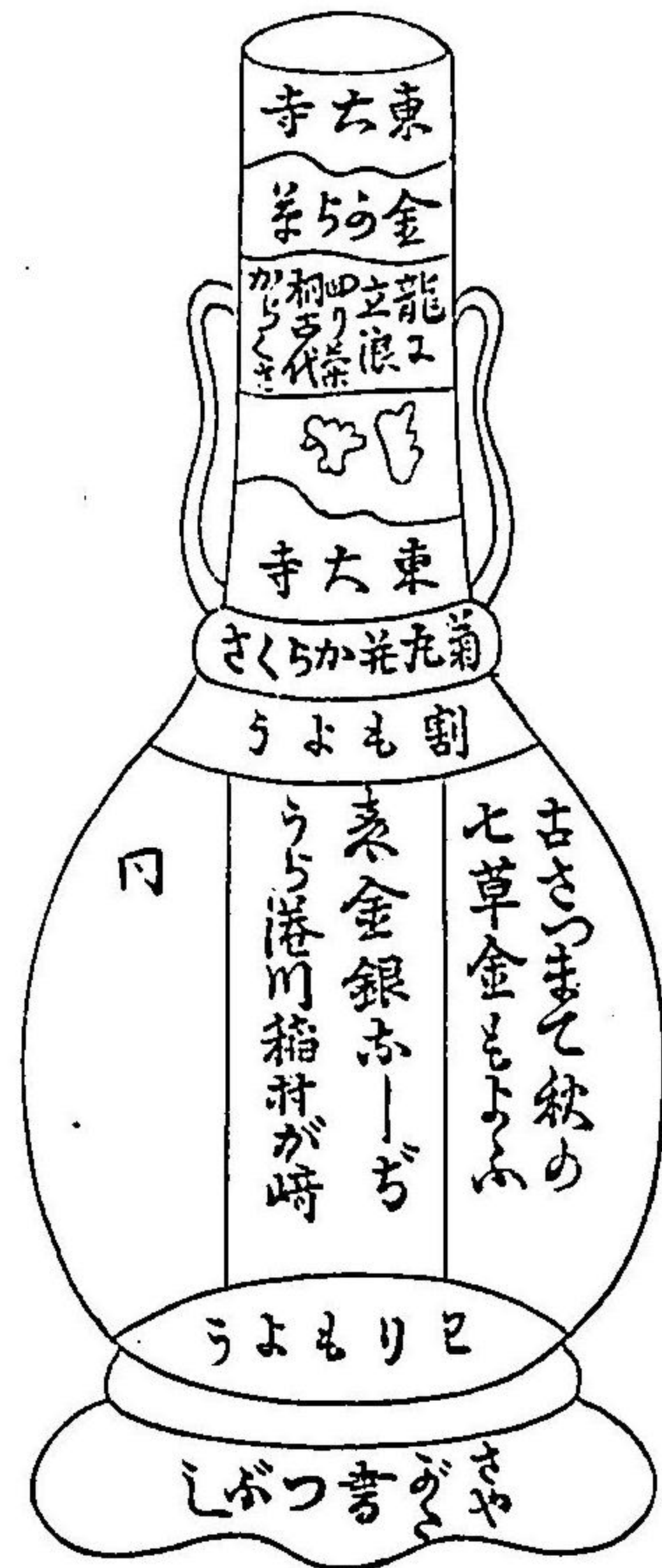
二、上下は雲形を以て境界となし、其中には東大寺を模様を以て色々にあやなし、其地つぶしはさや形七寶の類を以てしめる。

三號中程の帯は菊の丸を卅二ほど描き、其外はから草を以てつめる也、是にて中ほどより上は大がひ終る、併し一號の帯と二號の雲形との間白地なれば是は後に分明四號は帯より以下也、是は畫の中はワク取りとなし、其中へは表の方は金閣寺銀閣寺を一本づゝに向ひ合せ、裏は港川に稻村が崎を向ひ合せ、其彩色は言はず、只ほめればよし、其まはりは上下に割り模様を以て淵こしの區別をなし、其中に種々に古代模様から草等の物にてつめる、夫よりわくの廻りは秋の七草を古さつ摩風に畫き、其あしらひに金模様の蝶を散らし畫き、而して其模様は上の一號と二號の間白地の處まで畫き、地つぶしは金なし地なり、是は雲ぼかし形しるべく、此梨子地はいまだ曾てなきなり、現今工風中也、夫より臺はさや形のかきつぶし、其中の處に丸もやうを描かたよし、是にて目出度出來上る。

一つ金の入用廿々、一匁三圓八十五錢の割、

釜は下焼ともすべて四かま、
 一かまのまき代六十五錢一二錢の割、
 生地代十八圓五十錢、
 品もの圖の如し。

但し一本一釜の割ゆる八かま也。



夏子

源義つね
 やしまがたをしてさかろのあらそひに
 まづかち色のみえしきみかも

豊太閤

日の本にさる者有と犬じもの

から人さへもかしこみに氣無

柴田勝家

露ばかりのこさぬ水のいさぎよき

こころはかめのかみなりけり

加藤清正

鬼とのみおもひのほかの情さ弊

あればや人もなびきよりけ無

明智光春

から崎のまつの木かげにのり捨し

礎、一筋、下り來し、手折、
石ずる、ひとすち、おりこし、たをる、

廿四年九月廿八日買入目覺し時計裏番號。

a
ba wi
p
f s

心こころのこまもよに勝すぐれけり
佐久間盛政さくまもりまさ

ものふは鬼おにこそよけれみだれたる

世よには佛ほとけも何なににかはせむ

真田幸村さだなゆきむら

いくたびもよせくる浪なみをうちかへし

難波なにはのあしのはなと散ちりけり

石田三成いしだみつなり

しばらくは石田いしだの水みづも落おちざらん

うら切きりとほす人ひとなかりせば

木村重成きむらむねなり

今いまはにも心こころをこめしたきものゝ

香かぐはしき名なは世よにほひけり

蓬 生 日 記 (廿四年菊月)

日かげにとほきやへむぐらのあきいと露のをき所なきに、筆さしぬらしてかひつづくればあやしう人のしりうごとのやうにもなり侍しかな。

九月十五日 晴天。九時頃より灸治に行五十人斗待合して十時頃終る。それより直に圖書館に趣く。本朝文粹及雨夜のともし火、五雜俎とをかる。馬琴の著書中に五雜俎といふこといと多く有しかば見まほしくてなり。さわあれども例の不學故中々にえよむべくもあらず、いとせんなし。三時頃館を出てみの子君のもとにゆく。少しものがたりしてかへる。君はおとつひより箱根鎌倉あたりを旅行して昨日歸らせ給ひぬといふ塔の澤にて白なみの立さわぎしてふ物語りも有けり。家にかへりしは五時少し前也し。此夜はいとねむたふてえもたえがたきにわびてはやく打ふしぬ。十時成けん。十六日 今日もめづらしき好天氣也。風もなく雲もなくさわれ暑からず、つねにかゝらましかばなどおもふ。母君は湯島の紺屋に参り給ふ、おのれは衣どもあまたあらひなどする程に午前十時といふころ成けん山下直一君参る。ものがたりすこしする程

に母君もかへられぬ。ゆづりておのれは師の君のしたてもの今日よりはじむ。君は午後の四時頃歸宅せらる。熊ヶ谷より來るとて小補綿もらふ。夜食はやうくひてそいろありき國子と共にす。あすは中秋なるてふを今宵の空もたいならす雲の立さわぐはいかいなどおもふも例なるものから大方かゝるをなげかれぬ。

十七日 早朝髪むすびて師のきみに行。今日はみの子ぬしの月次會なればかしまるらする硯おのれもてまゐらんとて也。十一時半より家を出づ、母君みの子君の近邊まで送り給はる。談話少ししてのちに諸君参らる。今日は中秋なるてふを空めづらかに晴わたりて些斗の雲もなく風はつよからねどすゞしき程に吹ていとよき日也。點取題對山待月なり。小出君及師の君兩點也。

甲 兩 君

山のはの梢あかるく成にけり

今か出らむ秋のよの月

おのれの成ければ賞給はる。今日の各評題は山家水枕邊虫也。天は小川信子ぬし、地は中村禮子ぬし、人は伊東延子ぬし成けり。日没少し前に諸君歸らる、おのれはつ

や子ぬしの迎ひのいとおそければ一人残し参らせんがわびしければもろ共に残る。よ子君迎へに來給てよりおのれは歸る。みの子ぬしより心ぞへの車にて出る程に月は上野の森をはなれて櫻木病院の軒はにのぼりぬ。うたて月をうしろにして歸ることのいとをしさよと心の中にはなげかれぬ。切通し邊へ來る程に雲少しかり初ぬ。家に歸りてより少し月さやかに成しが更けてはいと云かさなりておもひしことよとわびられぬ。今宵久保木の姉君参る。母君と共にものへ参らる。今宵も例のなまけてはやくふしぬ。

十八日 朝來曇天、十一時頃より小雨降くる。今日はさま／＼なすと多くあわたしければ仕たてものはせずして机にむかふ。一日降暮して夕暮方より風いと寒く成ぬ燈火のもとにむかひて更におもへば今日もするとなしに暮たる也、あな口をしとおもふは日々なるものから勉めもあえぬはいかなるにか、我ながらいとにくし。夜一夜雨降にふる。十一時頃ねやには入ぬ。

十九日 朝は小雨ふる。今日は例の稽古日也つとめて家をば出づ。師の君朝げものし給ふ折成り。少しものがたらふほどに人々参りあつまる、てにはのあやまりなどた

だし給ひてさての給ふ、君は此頃新古今をやみ給ふいたく調の似かよひたるなんあるあしきことにはあらぬものからまねぶはいとよからぬことぞかし、猶家集をみたまへ手もとにおはさずばこゝになん侍るなどねんごろに教へ給ふ。あす松園の月次會なればとてその兼題を今日の點取にす八點以上はしたゝめておくらせばやとて也。みの子夏子、廣子、艶子の君達およびおのれの五人成ければ色紙に寄合書しておくる。家に歸りしは三時過る頃成し。空は餘波なく晴あがりぬ。此夜もはやくふしどに入ぬ。

廿日 曇天。師君の仕事をす。別してのことなし。中島くら子ぬしにはがきを参らす。廿一日 朝來曇天。午後より母君築地へ寺参りに行給ふ。望月より使ひ來たる、さつま芋到來す。日没後より雨降出ぬ、更けてはいと風さへそひておどろくしう只天の川の樋口切たらん様成けり。なすことなしに空しく起居て聞へ入りしは一時過る頃成し。

廿二日 曉がたより雨やみて朝日のかげの薄らかにさし昇る程木々の梢小柴垣のひまなどに玉をつらねたる様に露のみゆるもいとつくし、稻葉君参らる。伊勢利來たる午後中島くら子ぬしより通運便をもて書冊返却さる、書狀有けり。日没前までに師の

君の仕立もの終る。たそがれより雨降出て今宵もいたく降ぬ。閨に入りしは十二時也しものから大方は居ねむりのみ成けんかし、なぞかく耐忍の力に乏しきにや、勉めばやとおもふ心さすがに無にしもあらず、筆をとればものかゝんことを願ひ、ふみに向へば讀明めんことをしおもへど、こゝろざし浅く思ひ至らねばにや凡知凡慮いよくくらくしり難きことは日を追ひてしり難く昨日覺えたることは今日は忘れぬ、婦女のふむべき道ふまばやとねがへどそも成難くさはとておの子のをこなふ道まして伺ひしるべきにしもあらずかし、かくてはては何とかならん、老たる親おはします此御上のいとなげかはしきによろしき程なる妹が身の有つきもいと不便也、とさまかうざまにおもへば只身のかひなきのみにぞ寄ける、いでや過て改むればてふ古語もあるを明日よりはとおもふも今宵のみならざりけり。

廿三日 空は曇りたるものから雨もまたふらざりけり。今日は秋季皇靈祭なるものからに隣なる家よりこわいひふかすべきもの借に來たる。家にも牡丹もちなどとのへて先祖のみたまに奉る、例の仕立もの師の君がりもて參る。歸りてみれば稻葉のお鏡の君參られぬ。午後より野々宮君來りとはる。一つは舊門閥の困衰、一つは當時

女學生の意氣、物語りもまたいたくことならせ給へり。猶うきよこそをかしくも歎しくもうくもつらくも有ければと思はれ侍り。三時頃一としきり雨降にふる。野々宮君歸らるゝやがて國子の吉田君に借たる書物かへさんといふに伴ひて湯島までいたる。雲たゞよひにたいよひて空のけしきいと覺束なきものから雨はふらざりき、家に歸りてのちなすこといと多かり。今宵はさまでねぶたくもあらでおもふこと少く成ぬる程也。閨に入しは十二時過る頃成し。

廿四日 今日はみの子の君の家移もし給ふ日おもふに空晴よかしなど昨日より願ひしにおもふがごとにていと嬉し。國子家の障子の張かへをす。午後お鏡君及本所の千村禮三君參らる。種々もの語り有て母君に是非同道いたしくれ度様打頼まるゝに、さはとて伴ひて本所に參らる。甲州なる廣瀬七重郎來る、同性ぶんの犯罪に付被告事件の爲成といふ、おのれの爲にも遠縁の親族なればいといたく心にかゝりそはいかなる事にかとて猶とふに、いとはずかしうつゝましけれど、えいはではつべきにしもあらねばとてかたる、おのれがめひなるものから文こそよの淫婦にて有けれ、夫をかゆることはや六七人にも成ぬ、今相添ふは信州の種商人にて小宮山庄司となんよぶをのこ

成けり、此前にもてるは同じ郡の北野象次といふもの成き、相絶てよりことしは四とせにも成ぬる成べし、こたびの原告は則其をここに侍り、其上覺書に依ればぶんとかの北野とはいつしかふたゝび寄絲のむかしのえにしを結びかへて小宮山よりはさり状受けもとの夫と呼ばれんと大方ならず契りきとか、さるをことしの四月半同郡市橋といふ所に國內一の祭典侍りき、此日甲府の柳町三丁目に山がたやとなんよぶ旅店の二階に彼等二人酒打のみてたわぶれかはして居たりけるをかの小宮山なん聞しりて、おのれなどかはみゆるすべきとて右手に一尺斗の鎗の穂先をたづさへ左手に麻のなはをもてそこなる座敷にをどり入ぬ、二人は心きもゝみにそはず、いかで命ひとつをたすからばやとひたすらふし拜みて打佗たるに、をりしも傍に北駒郡のそれがし村なる伊藤寛作といふもの有て、君たすからんとおぼすならば金の外にもものは侍らじ、おのれよろしくあつかはんとて取なすまゝに、命にかゆるたからはあらずとて、さわれこゝにはこがねも持ねば則百圓の借用證をしたゝめてなん其場はすましぬ、さるものから後におもへばこはまたくかのみたりのものゝ斗りてなせるわざぞとおもふにいきどほりいと胸にみちて則うつたへをおこせる也と也、ぶんが答はまたことなれり、そは

あとかたもなきことにてかの北野象次郎には先に夫婦に侍りし時我衣裝調度など典物せられしもの七草も侍りしが、其後こがねにて又廿金許もかしぬ合すれば百兩あまりのものにて其こがねなんかへさじとてかゝるうたへは起されけん、誠に無實に侍るなり、またかの伊藤寛作とやらん更におもてをみしことも侍らぬものにこそとて陳じ申す、小宮山はいつち行けんかげだにみえねばいとせんなし、伊東寛作もぶんなるものは更にしらすといふ、さるものから其日かしの宿帳には正しく寛作の名前もしるされたるはいかにぞやとてつひに有罪とこそ定まり恐赫さき取財と定められぬ、されどもぶんは更にうけすこは道違へり道理ならずとてこゝに上告はせしなりといふ、にくきものから親族は親族に侍り、かゝるを見聞にえもたえやらず、やがて後にしたかひのほりて辯護は守屋此助君に依頼しつ昨日さまゝくに相談して公判は今日發かれ侍り、今日は事實の取しらべにのみ終りて申渡は明後廿六日となん聞ゆ、申さんもいと耻かゝやしくとて打なげきぬ、さはれ此人も道徳明らかにくらき所にも耻ずといふならねどさすがにまたさる筋あしき罪はまだ得ず有けん、よし今宵はこゝに泊りて夜すがら守屋君の申立などもの語り明す。

廿五日 晴天成り。小石川の例の月なみ會この月のいたくのびて今日催すなり、師の君例のなやましうせさせたまふ頃なればをのれにはやくより來よかしの給はせしみ詞もあなれば十時頃よりして参りぬ、この時七重君も一たび定めの旅宿にかへられぬ、來會者は十八九名成けん、點取秋の鳥てふ題なり、甲乙は伊東の夏子ぬし、おのれとふたり成りけり、賞にはうるはしき柿のみ給へり、家に歸りしは日のやうくらく成る程成りしかば母君途中までむかひさせ給ひき。此夜お鏡の君よりはがき來る。いたくつかれて今宵も早く打ふしぬ。

廿六日 空少し曇る。早朝千村禮三ぬし正朔君と共に來る。おのれは圖書館にふみ見んとてはやう出ぬ。道にて今野はるの商品陳列館に出勤するに逢て伴ひて行。外にも今一人居たり、少し早過たりけんまだ館は開かず。さて恰もよし、真下の槇子とじが慕參せばや今日は彼岸の終りの日なるをとて谷中へ行。寺僧も今寢起たる計成き、あかくむも花たづそふるも悲しきものからいと嬉し、絶す苦の下に聞くらむ松風に袂ぬらして手むけもあへず先打なげかれぬ、さるべき子どもなどもなきにしあらず有りながらはたいかなればか花手向たる人もなく水かれ墓はかはきにたり、しばしおろが

みてこつを出つ、常なき世とはえおもわじとすれど猶このはかなごとやみをもはなれざりけり、かしこぞまだ開かず、しばし立つくしてやがて入ぬ。日本紀及花月草紙月次消息をかりてみる、神代の巻の解しがたきをしいてとかんとすればあやしうねむくさへ成ぬ、花月草紙にねぶりをさまして月なみ消息の流暢なるをうらやましようおもふもかひなし、三時斗り成けん雨少しこぼれ來ぬ、いたくふられなんわびしくて館をば出ぬ、道にしてやみたるは口をしかりき。しのばすの池蓮かれて浮草の花のたよふも淋し、秋は草木の上のみならずみるとみるもの、露けくも有哉とて、しばし立といまりぬ、うしろよりくる書生の我うへなるべし何ごとかさやくがつましようてうつむきたるまゝいそぐもはづかし、家にかへればいたくも早くおはしつる哉とてみなみなよろこびぬ。國子は今日關場君とひ參らせつとて給はりつる栗など我にもくはず。半井うしの事などを聞て來ぬ、いでや猶記者は記者也、朱にまじはるになど色赤うならせ給はざらん、品行のふの字なること信用のなし難きことも姉君が覺す様には侍らずとよとてまめだちて聞えしらさるゝにもむねつふれぬ。我爲には良帥にしてかつ信友と君もの給へり、我が一家の秘事をも打明て頼み參らせ後來扶けにならんなどの

約も有しをそも偽り成りけんかしらす誰か誠をかして打もなげかれぬ。今日は稻葉の妻君も参らせ給へりとぞ、關場君より日本外史及び吉野拾遺をかりて来る。日没に母君に吉野拾遺讀みて聞かせ奉る。十一時斗成けんふしぬ。

廿七日 朝來曇天。午前久保木の姉君参らる。午後より廣瀬七重郎参る。ぶん子公判前裁判執行てふことに成きとていたく失望の體成し、おのれらも同じことなげかれぬ、監視のことにつき種々相談あり、明日またこばやとて日没前かへる。今日はことに打なまけて何ごともえせず、今返るもまた早うふしぬ、いとかひなしや。

廿八日 晴天。午前のうちに國子吉田君に書物かへさんとして行しばらくにしてかへる。午後藤田より目覺し時計を買ふ。家なる時計のいたく損じたればなり。價もいとれんなり、いふよしなどわれ人共におもへばこゝなるのをかしこにうりていさゝかかたがひにて買入る、藤田屋参る。稻葉氏より書狀來る、返書を送る。今日も日ねもす何ごとせしといふこともなかりき。十一時半頃ふしぬ。

廿九日 晴天。母君藤田屋の頼みに依りて貸すべき金のこといひに行給ふ。家のとてあらねど三枝君より借りたる金少しあればそれかさんとてなり、歸路に高野に立寄りてこゝよりも少し斗返金せらる。吉田君三人連にて参らる。日本外史三冊か給ふ、もの少し到來す。正午少し前に歸る。母君は正午に歸宅し給ふ。稻葉君より書狀参る則返事を出し、佐藤梅吉氏に書狀を出す。午後上野の伯父君参らる。藤林のことに付物語り有けり、夕暮に歸らる。此夜はさまでねふたからねば十二時頃ふしぬ。此頃より大雨盆をかへす様成し。

卅日 朝より空のけしきたいならず十時頃より強風大雨誠の野分に成にけり。其最中廣瀬七重郎來る、ぶん子の事に付き種々依頼さる、同人午後歸國の途にのぼる、一時頃より風力次第に減じて二時に鎮靜す。差配人土田來る、久保木の姉君見舞に参らる、近來稀なる大風成き、されども我家は山後の低所なれば、さまでつよからず、破損の場所もあらざりしが、所によりては屋根を吹めくられ塀垣など仆れたるは更也、丸つぶれに成たる家も少なからざりけらし。其夜は空いとよく晴れていとおだやか成し、稽古題二週間分よみてふしどに入しは十二時なりき。

十月一日 早朝師の君がり昨日の見舞に行、路次の樹木塀垣などの仆れたるいとおびたいし、師のもとにてはさもあらず、只此頃植かへ給し木どもの二もと三もと打た

約も有しをそも偽り成りけんかしらす誰か誠をかして打もなげかれぬ。今日は稻葉の妻君も参らせ給へりとぞ、關場君より日本外史及び吉野拾遺をかりて来る。日没に母君に吉野拾遺讀みて聞かせ奉る。十一時斗成けんふしぬ。

れたるのみ成しとなり、所々へ出すべきはがきした、め會計上の計算などしてかへる大小の筆十本給ふ。此日山梨縣野尻君よりぶだう一籠到來す、いと美ことなれば母君安達へも少し送り給ふ。禮狀した、め出す。國子午後より吉田君へももて行、此夜は早く打ふしぬ。

二日 曇天。今日の新聞に津田三藏肺炎症にて空知監獄に死すてふ文あり。暴風雨の損害とも多くのせ、野菜のいたく高直に成たりなどもしるせり、國會朝日の内幕とていたく攻撃したる商賣忌敵かあらぬかにくしとおふも我心からなめり、午後より藤田屋参り金七圓斗來月返金の約束にて貸す、庭の木石などつくろひくる、干物の蠶豆一升到來せしが、庭前なる冬瓜一つ送る、薄暮に成て歸宅す。此夜久保木の姉君参る、栗柿少し到來す、ぶだう一房送る。國子と共に數詠をす、國子一首、おのれ十首の約束にて詠みつるに、一題はおのれ一首かつ、次なるはおのれ三首まけぬ、勝負なしとてやみぬ。此夜は更にねぶからず十二時ふしぬ。

三日 小石川稽古也。空めづらかに晴ていとよき日成。師の君のもとへぶだう少し奉る、來會者十二人斗成し、今日より稽古一日に成る、九月分會計の計算をなし

て歸る、五時頃成し、十二時いぬぬ。

四日 晴天。午前に讀書をなし、午後作文をす、薄暮より國子と共に摩利子天に参る、歸路杉山粉工場を見物す、各商家一人の客なく寂寥たるには驚きたり、前住ける家の前を過てくるにあやしき待合などいふ家出來たり、中坂の頂き先の日の大風にや崩れけん一間斗石段落たり、家に歸りしは八時頃、夫より母君の揉療治少しして習字にかゝる、十二時ふしどにつきぬ。

待合といふものはいかなる物にやおのれはしらねど、只もじの表よりみれば、かり初に人を待あはすのみの事なめりとみるに、あやしう唄女など呼上て酒打のみ燈あかくこゑひく、夜更るまで打興すめり、家あるじは大方女子にて二人三人みめよき酌女もみゆ、家は艶にすぎたるはいりのさま、高どのにはいよ簾かけ渡してすしの聲ねころにくし、家名は行燈にかきたるもあり額打たるもあり、ときはと呼あり梅のや竹のや、湖月はからす森に名高く花月は新橋の裏町にあり、あるはいが嵐の奥座敷に風をいとひ臙のはなれに落花の狼藉をみるなど、大方世の紳士紳商などいふ人のかくれ遊びの場所なめり、少なくとも一町に一ヶ所はかならずあり、多き所には軒をならべて

仕出しの岡持常に行かふを見る、世にはいかに數まんのがねありてかゝる用なき人のいとどかなるよを過すらむ、孟宗は竹をえかねて雪中にこゝえ孫康は雪少なうして窓の光りくらきをなげくに、地租輕減をとふる有志家豫算査定に熱中するの代議士かゝる遊びに費すのがねのをしからずとは不學不識のもの、しれがたき事にこそ。

五日 晴天。日ねもす机に寄て例のよしなしごと書つゝいくる。西村君參らる、近日出店の都合成りといふ。小田病院の怪事をかたる、午飯をすゝめて歸宅せしは三時頃成し、瀧野君より庭前の栗を到來す、今日は甲子なればとて母君いさゝかものとのへなどして大黒天に奉る。日没後母君の揉療治す、國子と共に少しして、今宵はいたくなまけにたり。

六日 快晴。母君朝來はり物をなし給ふ、姉君一寸參らる、午前よりひとへ衣三つ四つ洗ふ、午後よりは例の文机に打むかひぬ。

七日 快晴。午前髪すましぬ、午後より文机に打むかひて文どもそこはかとかいついくるに心ゆかぬことのみ多くて引さき捨ゝするとはや十度にも成りぬ、いまだに一篇の文をもつくり出ぬぞいとあやしき。早うものし初たるなむ師の君に一回丈添刪

を乞ひたるあり、そがつゞきををつらばやと思ふに我ながらおもしろからでかくは引やりつるなれど、さてはつべきならねば別に趣向をもうけなどして又つゝり出るに夫もかれもいとつたなし、昔し今の名高き物語も小説もみる度に我筆我ながらかなしく成りてはてゝは打も捨まほしかれど、中々に思ひ懸ることえやむまじき心が心にをこがましけれど又つゝり出ぬ、あさつてまでにはかならず作りはてん、これ作りはてねば死なんとおもふも、心ちひさしと笑ふ人はわらひねかし。

八日 快晴。午前清書午後作文、十八史略及び小學を讀む。お鏡様參る、明日の各評景物を作る。日暮て後母君と共に藥師に參詣す、勸工場を見物す、植木店に菊少しみえ初ぬ、露店六丁目邊まで下たり、歸路途上にて姉君に逢ふ、歸宅後土産の栗餅を食す、母君ふし給て後、姉君一寸立よらる、これよりも土産にあはもちをもらふ、同道の人ありとて直歸る。風荒う吹出て空げしきいとすさまじ。十一時寢につく。

九日 早朝より支度をなす、小石川の稽古なればなり九時頃より家をば出ぬ、風は只吹にふく、されども空はいと晴たり、師の君に約し參らせたる茄子を持參す、いたく喜び給ひてこれひる飯の時にはくはゝやなどの給ふ、春日まんぢうひとつやきて喰ひ

給ふとおのれにも半を分て給ふ、もの語りども少しする程にやがてひるにも成ぬ、もてなしにあづかりて諸君の來らせ給ふを待程に、かとり子君先參らる、今日は來會者二十二名成し、點取題秋烟にて、小出君の乙はおのれ成しかば短冊を給ふ、あやしう我點は樋口君にのみとらるゝよなどの給ふ、猶天性といふものこそ有けれつとめ給へ進むはかたくしりぞくはいと安きぞかし、我れ後見てんなどの給へば、師の君いでや夏子ぬしよ小出君に盃參らせ給へ、かくまでにの給はすはうきたることにはあらじをなど打笑ひ給ふ、例のひがものはいとつゝましようて只ものゝすみにのみひそまり居るもおこ成りと笑ふ方々あるべし、人々歸後小出君もかへる、みの子ぬしとをのれと又少し物語りす、歸宅せしは日没少し過成し、母様むかひに出給ひて道にて行違ひぬ、奥田の老人參り居りしかば給はりつるくだものなど少しやりぬ、老人は國子道まで送り、今宵和歌二十首斗よむ、ふしどに入ても更に寝むられねば、ふたゝび起てふみどもよむ、十二時ふしぬ。

十日 晴天。湯島の天神大祭也、母君午前より所々遊覽にと參らる午後四時頃歸宅われも老ぬる哉かく氣樂に遊びありくこととて笑ひ給ふ、日没より國子と共に拜禮に

行く、山車は切通し坂に一つ有のみ成り、社内より新花町の方へ出んとて吉田君の表をよぎりしかば國子立よる、しばらくにして共歸る、家に歸りしは七時頃成し、しばし打ためらひて机どもも出て出る程に郵便來る、今朝兄君に時候伺ながら一書參らせたるまゝその返事なめりとおもひて封じめきるにさまゝ有りてさてこなたいとく春よりの不都合勝にていかんともいたしかたなく負債の裁判などしばゝあり到底せんかたなければ財産差押さへといふことに成ぬ、明日は日限ともなればことゝく破産の不幸に立至れり、其頃參りてものがたらひてんと成り、金三圓斗あらば何とか成べきことながら夫すら心にまかせずなど書給へり、いといたうおどろかれて何事ぞこはとて母君ともくはかる、こゝに金四圓はありこれかしこへかさばこゝに又難義やおこりなんいかにせんなどの給へど、只そはなにかは公權の剝奪といふことは人事に於ていと耻べきことにはさぶらはすや。家は又我稽古衣の衣賣しろなすともよしこれもて行て故よし明らめ給ひて渡させ給へ、くらく成なむに明日といふなれば今宵は過しがたかるべしとて車ものして母君をやる、國子と共に案じぐらす程に十一時頃歸宅し給ふ、大方かたの付べき成りと聞に少しむね安くも成ぬ、此夜中より國子俄に

腹痛をやむ、夜ひと夜只くるしみにくるしみてはかなく明ぬ。

十二日 國子なほおこたらず、今日は本願寺のお取越しとかやなりとて母君九時頃より参詣せらる。十時頃より稻葉の妻君正朔殿と共に参らる、ひる飯参る、午後より姉君参る、國子の見舞になり、四時頃母君歸る、日没少し前稻葉君歸らる、秀太郎参りしとて到來の赤飯などくわす、今日は法華宗にても十夜とかにてこゝかしこより配物貰ふ、今日もいたう怠たりにけり。

十三日 晴。兄君如何なし給ひけん只案じに案ずれど更にあみもおとづれもなし、沖なわ縣より依頼の歌師の君に添削乞はんとても行、ものへ行給ひて留守なるこそいと詮なし、又こそ参らめとて歸る。

十四日 さしたることなし。晴。

十五日 もおなじく六時よりものへ行。

十六日 おなじく。

十七日 稽古日なり。晴天成し、題例のふたつ一題十點の一つありけり、伊東夏子君二つ、鳥尾君ふたつあり、松井節哉君八つとらる、明治女學校の學生にて田邊君が知

人なるよし打みる所はいとおとなしやかなる人なり、日没少し前歸宅す、岡田より仕立もの依頼せらる、母君斷らんなどの給を遠路よりのなればとておのれうべなふ。今宵は舊菊月十五日なり空はたいみ渡す限り雲もなくてくすの葉のうらめづらしき夜なりいでやお茶の水橋の開橋になりなめるを行きみんはなど國子にいざなはれて、母君もみてこなどの給ふに家を出ぬ、あぶみ坂登りはつる頃月さしのぼりぬ、軒ばもつちもたい霜のふりたる様にて空はいまださむからず袖にもなふぞおもしろし、行々て橋のほとりに出ぬ、するが臺のいとひさくみゆるもをかし、月遠じろく水を照して行かふ舟の火影をかし、金波銀波こもくよせてくだけてはまどかなるかげいとをかし、森はさかさまにかげをうかへて水の上に斗一時の雲かゝれるもよし、薄霧立まよひて遠方はいとほのかながらに電氣のともし火かすかにみゆるだもをかし、いざまからんまからんと斗いひてはそもはなれ難きぞいとわりなき、またかゝる夜いかゞはみんなど語りつれつゝするが臺より太田姫いなるの坂を下りてくるほど、下よりのぼりくる若人の四たり斗衣はかんにと出立さはやかに折にふれたるからうたぎんじくる哀をの子ならましかば我もえたへぬ夜のさまよとて國子のうら山しげにいふもをかし、馬車

のいとうがはしきに小路につとはしりのく、神田の森に月みんよとて坂のぼるほどいとくるし、のぼりはて、ふと見返るに月はいつしか空高く成て二本ある杉のかげにかくれてさしのぞかざればみることうとし、うたよまざらんはいとくちをしとてさましくにおもひめぐらせど月のかげにやけをされけん、ふつに趣向もめぐらぬこそ猶よみなてふこと成べしとて打笑ひつゝやみぬ、大路をかへりくるほどいとくをしう覺ゆれど、母君のまたせ給はらんなどいとうしろめたうていそぎかへる、八時前なりしかど時計只こゝもとに取寄せてさしのぞき居給えりし、なほ暮く遊事はいとあしきこと成り、母君をふさせ奉りて少しふみどもつゝ。此日は秀太郎小學の運動會としてかま倉地方へ遠足成しかばさこそつかれつらめなど案じくらす。

十八日 晴。午前母君他所へ参らる、おのれは依頼の仕事をはじむ、山下直一君参らる、下宿がへ昨日せしと也、少しもの語りて家の新聞など貸あたへてかへす。午後より菊子ぬし参らる、卒業しけん終り給ひていとよろこばしげ也。一昨日より半井君のもとに遊びてよへ歸りぬ、夏子ぬしはいかゞし給ひしやなどいといたう打案じての給へりし、参らせ給へよなどの給ふ、みにもかねてより参り寄らまほしく思ひながら

猶なんさはる事ありてまかでぬを常に心ぐるしうてのみなんある、かくねんごろにの給ふにも猶いとばかし、さまざまの語りありて歸り給ふ。此夜隣家中島にていとけふなること共ありたり、くらこぬしのもとにふみしたゝむ、十一時頃ふしどに入しかと思ふこと多くていをもねす。一時斗成けん花しよの園には至りつきぬ。

十九日 晴天。何事もなし。

廿日 晴。何事もなし。図書館に行。

廿一日 晴。同。

廿二日 晴。あす半井ぬしを問参せんとす、ふみかいしたゝめて出す、さはれまだ約束の文章は少しもしたゝめぬものをいとおぼつかなしやとおもへど猶せめて出す、入湯などして用意す、空いとよく晴れて塵斗の雲もなきに例半井君へ参るからに雨降らぬ日なかりつればいづら明日はと國子をかへりみていふに、頼むともやわかとて打ほゝゑみぬ。夜に入てより半井君より書状参る、孝子君事廿七日嫁入らすべきよし、其後参りくれ度となりけり、俄のことにて誠とおおぼえず、いとあやし、十二時ねぬ。

廿三日 早朝床を出しに雨降にふる、さは又降らるべき成しなどいふ程に朝日のか

げさしのぼる頃より只晴にはれ行もをかし、稽古題五題・各評一題、難陳三題よみて
ひる飯をたうべぬ。午後よりもち月来る、新平参る、國子の蟬表えまほしと様にいへ
ばやがて二つ斗うる、百足斗もて來し中にか斗のは又なしなどいふ、我身の歌とくら
べられんにいかにせまし穴にも入らまほしうこそ。十一時床に入る。

二十四日 空晴たれどいと寒し。八時頃より家をば出ぬ、師の君は昨日より例のこ
となやみ給ひていとくるしげにおはしますを、近衛家の令夫人うせ給ひしに其弔ひせ
ばやとておのれに留守ゆだねて朝のまに趣き給ふ、前田利嗣君の令妹にて芳紀二十三
とか閉止し若君御出生の月成しとか、來會者今日は多からず、伊東夏子ぬしもいと
くれて参る、前島むつ子君入門せらる、十時許師の君歸宅題二つ成し、師の君より近
衛篤磨君の哀傷の歌を承るに、

なき數に母の入しもしらぬ子の

ゑがほみるさへかなしかりけり

誠心誠意の作はげに天地をも動かすべき成りとして師の君歎じ給けり、午後四時頃一
同歸宅、師の君いとなやましげにて直に打ふし給ふ、おのれ家に歸りつるは日没少し

前成し、國子の宮君を訪て女學雜誌外少々書物をかりくる。半井孝子ぬしが嫁入給
ふいわひもの少しもて行方よろしからめとてなり。さわ明日早朝にと心がまへす 久
しう訪ひ奉らざりしうちに様々あやしき物がたりども多かるを半井君のそをおのれに
つゝまんとて苦心し給ふなど聞にも少しほゝるまれぬ。十二時床にいる。

二十五日 朝來曇天。八時頃宅をば出づ、半井ぬしをとふ、門に車の下り居るは客
人のおはしますにやとおもひつるにさはなくて、兄弟知己の方などへにや暇乞に趣き
給らんとなめり、おのれは玄關にて祝詞のべなどして歸らんとするに孝子の君兄も宅
にて侍りしばし上り給へなどいふ、うしも出來給ひてかにかくとの給ひつれど又こそ
とて歸る、二十七日福岡地方へ送りやるに其後必ず参らせ給へ少し打ちものがたら
ひ度ことあるになどいふ、歸路師の君の昨日いとなやまし氣におわしたればとひ参ら
す、今佐々木君へ診察受けに参り給ひてんといふ所なりけり、留守の用ども仰付かり
て、師の立出で給ひて後、書狀二三通したゝめ出し、おのれは直に家に歸る。午後よ
りは書見をす。此夜十二時床にいる。

二十六日 晴天。國子關場君へ参る。半井君の負債事件聞來る。尾崎紅葉が不品行

なることなどいと多く聞ゆ。岡田より仕立もの取に来る、又依頼し度などいふにこれをも受合ふ。午後鳥尾家難陳歌合二題よみて送る。かしらなやましたれどいとかひなし。今宵はいねしは十二時成し、されどおもふことのなし難きなんこの身ながらにうし。

二十七日 よべ雨や降けん朝庭少ししめりたり。七時地震す。亡兄命日なればとはつもの羨などして奉る。鳥尾君へ参らん時の料にとて洗ひ張させし衣縫ふ、はぎもひる前かゝる、下まへのえり五つはぐ袖にはぎ二つあり。

宮城のにあらぬものからから衣

なども木萩のしげきなるらむ

絶えずかかと打笑ふもをかし、日暮迄は手ならひをす、今宵よりは筆のはこびいと思ふ様に例刻よりはすこし多くなしたり、一時床に入る。

二十八日 雨天。六時頃急なる地震あり、ことしは大地しんの三十七年とかやいひていとうあやふがる人も有るなり、十時頃坂上なる洗たく店の主来る、明日午後までに綿入二枚仕立貫度となり、断らむもさすがにてうけがふ、午後よりもてくる、國子と二人して日没迄に平縫丈なし終りぬ、暮てより空晴行風少し吹く、例の手ならひ

一時斗して、作文にかゝる。

二十九日 早朝配達し来る新聞を見れば、昨朝の地震東京の地こそ何事もあらざりけらし、各地の電報によれば愛知岐阜邊より伊勢路濱松邊など、容易ならぬ災害成りといふ、但し詳細はいまだしれずと成り、横濱などにも家屋の崩れたるなどはなかりしものから電燈會社の烟筒など倒れて點燈しがたしなどいふ、或人はいたく驚怖して東京もやがて震ふべきなめりなどいふ、午後二時過に約束の縫物終る、夫より半井君にはがき奉る、明日参らんと成り、その文したゝめなどす、夕刻より朝日新聞の號外賣りに来る、地震の報道なるべし。此夜床に入りしは一時三十分なりし。夜半より強風、曉方に森川町神社の傍より失火、十二三戸焼る。

三十日 風止まず空雲りたる様にていと寒し。新聞の來るいと遅しと取てみるに、此度の災害地の殊に害を被むりしは岐阜縣下及大垣笠松など也、殊に岐阜は全市焼失更に實情相知れず、岐阜接近の場所加納笠松、關、大垣邊死傷算なく焼失崩潰等枚舉にいとまあらずといふに、江崎牧子ぬしは上加納高岩町に居し給ふなる、如何し給ひけんと思ふに涙たゞこぼれにこぼる、されど鐵道も電信も郵便も不通なりといふに安否を

問參らする事も能はず空しう打なげきて空のみながめぬ。十二時頃家をば出づ、半井君をとふ。二番地の寓所をとひ參らせしに種々込入たる話しもあれば此頃もとめし隠れ家にとの給ふ伴なはれて一丁斗手前なるとあるうら屋に參る、座敷の間敷四つ斗あり、書齋なるべし六疊の間に文机置てそが上に原稿紙筆硯など次第なく置かれたり、障子四枚立てる外は縁なるべし、入りての右は小窓ながら風のいと強ければにやおろし込めたり、左に三尺の戸棚有て其並に同じ三尺の床めきたる所あり、おのれは例の近眼にてえよくもみえねど何やらん景色の寫眞額有けり、君と我とは長火桶ひとつ隔て、相對座しぬ、例のにこやかに打笑みつゝこゝへ寄給へなどの給ふ、七歳にして席を同じうせざるなん行ひがたかる業ながらかう人氣なき所に後めたくも有る事よと思ふにひやゝかなる汗の流るゝ心地す、いふべき事もえいひ出でやらで手に持てるハングケチのみをかしこき相手とまさぐり居たり、孝子嫁入らするといたく苦勞をなしぬ、世の母親が娘を縁付るなん身のやするといふ事は偽ならず、我ながら瘦にたる心地のするなどの給ふ、つぎて新太君、鶴田民子ぬしが關係一條引出ていと面なげにの給ふ、さる頃野々宮して聞しめさせたる其事よ、我家よりさる醜聞の起るべきなど夢

にも思はざりしものをしらで過たるなん別ておのれがあやまりなり、さるに君がかく打絶て訪はせ給はぬなん我身に何事か有たる様にさかしらする人や侍りけん、身はしら雪の清きをもてうたがはれ奉るなんいと心ぐるしう、かつは君が中頃より打絶させ給ひしを小宮山などあやしがりて某に猶曲事ある様になん思はるゝこれもつらし、依ていかで君に以前のごと訪はせ給はらん事をとていといひにくかりしかども野々宮ぬしに委しく語り奉れるにこそ、おのれはかゝる粗野なる男士なれど貴嬢方にいさゝかも害心をなんさし挟まぬ、されば兄弟中の醜聞より御母君などやあやふがりてかく引止め給ふにや、其心配なう參らせ給はゞ嬉しからんなどの給ふ、おのれはさる心にもあらざりしかど笹原はしる御心なめりかし、小説に付てしばし物語りして先日送り置きたるなん此頃變名にて世に出さばやなどの給ふ、耻かしき限りながら可然とて依頼す、小説本四五本かりて又こそ參らめとてたつ、例の今しばしなどの給へど久しうあらむもいとつらきに其まゝ歸る、九段坂より乗車して家に歸りしは五時少し前なりし難陳歌合のまき廻り來れり、今日はこれが判じをなす。床に入りしは十一時成し。

卅一日 小石川稽古成り、朝風のいと寒かるに起き出てみれば霜ましろに置けり、

初霜にこそなどいふ。八時頃家を出て師の君が行く、暮秋の霜といふ題なん出ぬ。
めづらしく朝霜みえて吹風の

寒き秋にも成にける哉

意景成りとして十點になりぬ。次に有孝卿の成りし龍田川紅葉みだれて流るめりてふ
を本歌に取りて、

いさゝ川渡らばにしきと斗りに

散こそうかべ岸のみみち葉

かくなんいひていたく師の君にしかられにき、本歌を取てそを受たる詞なしとて成
り、さもあらばあれ、小言にたゆまず猶かゝる歌もよむべし、其中には少しは聞ゆる
ものも出らんなどの給ふ。諸君の歸らせ給ひしは四時半成し。おのれ歸らんとする時
師の君少しまでよとて止め給ひつ、小紋ちりめん三つ紋付の引通し衣類表丈給ふ。
これは歳暮に参らせんとしたるなれど早き方都合もよかるべし、新年など何某くれが
しの會に出るに紋付なくてもいかいと給ふかたじけなしなど中々なり、少し暗う成
りたれば途中まで母君迎ひに参り給ふ、諸共に歸りて夕飯したゝめたる後、明日の景

物かひにとて本郷二丁目の信富館でふ勸工場へ行、ものとのへて歸りしは九時頃成
し。夫より書物少して今宵は早く打ふしぬ。

十一月一日 朝來快晴 殊に時候暖和にて實に小春の日和成り。十時頃迄判にかゝ
る、夫より髪あげ化粧などして十二時半より家をば出ぬ。師の君がりとひ参らせしに
今行んしばし待てよとて支度し給ふ、夫より諸共に歸るさは我家より車やらんにそは
返せよとてこの車は鳥尾君より歸す。室内の模様も庭園の景も別に記すべし。師の君
抜き歌初冬紅葉には鳥尾君、隠家にてはおのれ、戀も鳥尾君成り、おのれは抜歌給は
る、鳥尾君を辭したるは日暮て餘程の後なりし。師の君の許にかへりつきて後よき歌
をよみたるに褒美などの給ひてくわし給ふ、又車をも給はりて家に歸しは六時頃成し
今日の來會者、

水野君は親子、つや子君、齡子君、きく子君、みの子君、夏子君、かとり子君、の
ぶ子君の 諸君成りし。

此日江崎牧子君に書を出す。さるは電信全通したれば也。來る十九日は前島君のもと
にて難陳歌合せんとて約す。

二日 快晴。裁縫をなす、稻葉君来る。何事もなし。日没より書見をなす、十首斗歌をよむ。習字一時間、十二時床に入る。

三日 天長節なれば、例によりて餅少し斗つかす。山下君参る、しるごととのへて出す。雑誌をかる、早稲田文學をからんとて約束す。午後には君は歸る。午前のうちに裁縫上着丈なし、午後よりした着の裾直しをする。各評廻る、田中君より瀧の川の誘引状あり、断つて延す。日暮てより書見。

四日 晴天。午前裁縫に従事す、午後より習字ならびに書見をす。今日より小説一日一回づつ書く事をつとめとす、一回書さる日は黒點を付せんと定む、但し我が心斗成りけり。日没後國子と共に紙類を中島屋にかふ、心正堂に筆かはりやとせしかど日没よりは門をへてうらす止を得ず歸る、久保木の姉君来る。稻葉氏にはがきを送る、十二時床に入る。

五日 曇天。朝來小雨正午より晴る。安達へ預け物取に行、女坂下心正堂に筆をかふ、三河屋に洗張りを頼む、午前歸宅す。今日も一日する事なしに終る。咄怠情本生。まき子ぬしよりはがき来る、先は無事也。

六日 午前奥田老人参る。震災義捐金を出したりといふ。我もいかでいさゝか成りとも出さばやなど思ひながら母君の免し給はぬにかひなし。ひる飯をすゝむ、一時過歸宅さる、机邊には有ながら思ふ事何もならず、我身恥かしき仕業也。日没後小林好愛君老母死去の報は青山君、師岡君より参る。母君の下駄かひに行。

七日 晴天。早朝母君小林君に悔みに参り給ふ。おのれは小石川稽古なり、八時三十分頃家をば出づ、かしこへ趣きしは九時前成けん、今日は慈善音楽會の催しあればにや來會者いと僅少なりし、午後二時暇を乞ひて歸宅す、家の都合あれば也。母君既に歸宅。午後四時頃強震あり、早卒母君を庭に出さしめなどするまにのみぬ、あやしき風説にこりたればなめり、日没後母君再び小林君に趣く、今宵一夜通夜せんとして也。姉君参る、物語りなどして泊らんといひつれどかしこにも無人なればとて歸す、九時頃成し。

八日 早朝母君歸宅せらる、直ちに寢につく。おのれは圖書館に書物見に行、まだ開館に至らざりしかば櫻木町より根岸布田の稻荷迄をゐるありきす、名高き御行の松など見物す、ほづびやの奇談あり、やがて開館を待て入る。太平記、今昔物語及

び東鑑を貸る、但し東鑑はよまで太平記並に今昔物語をのみ借かへてみる、館を出しは日のや、西にかたぶきし頃成き。向岡彌生町の坂にて若き書生のまだ十七八なると十四斗なると菊の鉢植をわら細にて結ひて下げ來たりしに其細切れて行なやみたればおのれがしめたる絹紐取てあたへんとしたる事、其折來かゝりたる大學の生徒のあやしげに見たる事、其書生が振舞の事、西片町にて別れし事、家に歸りつきしは日没少し前成し、夫より母君再び小林君へ參らる。十一時床に入ぬ。

九日 薄ぐもりせり、母君早朝歸宅せらる。今日は小石川稽古なるをもて髪上げなとす、突然に田邊有榮氏にとはる、狼狽の事、意味有氣なる物語の事、同氏歸宅やがておのれも母君も家を出ぬ。參着遅かりしかば師の君不機嫌の事、來會者廿九名斗有りし、小出君とみの子君との事、大造君に初めて逢ふ、片山てる子君實母に逢ふ、師君泊れとの給ひつれど家にはざりしかばとて暇を乞ふにさればとて車を賜ふ、歸宅す、母君はおのれを迎ひながら西村君が新宅見んとて參り給ひしといふ、行違ひつるなめりとおもふに尋ね給なんいとわびしくてやがて又迎ひに行、師君は車を賜ひてまであやふしとの給ひし夜道を燈火もなくして一人行なんこゝにもかしこにもいといふ方

なき罪成けり、表明といふ所に母君を尋ねあてともぐに歸る、八日斗の月雲に出没して夜霧の道もみえぬまで立渡りたるなど只うつし晝の心地す。二人家に歸りつきしは九時成し。十二時床に入る。

十日 薄ぐもれり。此頃物入つきたるに例の困窮一しほ烈しく致しかたなしといふ、十五日には小出君催しの薊園の追善會に櫻雲臺にまねかれたる其料の着るもの縫ふべきながら、それ所かはとて小説の著述に従事す、十四日迄に編はてんとて成り。午前稻葉君正朔君と共に參らる、縫物依頼さる、せん方なくてうべなふ。午後大根をかふ、十四五本にて三錢五厘なりといふ、此廉にも驚きたり。四時頃より雨降出づ。母君血の道にて打臥給ふ、此夜小林より明日初七日速夜なればとて招待狀參る。

都 冬 月

人をまつ車さむげにみゆるかな
みやこ大路の冬のよの月

雨晴しあしたのの邊を來てみれば

の り を

つ ば ら

山やまにのみ我わがかくれがをもとめしは
 まだ人ひとたらぬ心こころ成なりりけり
 同
 門かどのとはしるしの杉すぎもなかりけり
 くる人ひといとふ住すまか成なりらむ
 隔かぎ年ねん戀こゝろ
 今日けふといひあすといひつゝあはぬ日ひの
 一ひととせにさへ成なりにけるかな
 隠かくれ家が
 かくれがの軒のきばのつたよ心こころして
 色いろにないでそ秋あきはくるとも
 初はつ冬ふゆ紅あか葉は
 霜しもをへて更さらに色いろこき我わが山やまの
 もみちは冬ふゆのものところみれ

廣ひろ子こ
 安やす産うぶ
 みの子こ
 ひろ子こ

ぬれたる花はなに春風はるかぜぞふく
 埋うづみ火び
 ともし火びの油あぶらも氷こほる冬ふゆのよの
 光ひかりとたのむ閨ひやのうづみ火び
 同
 うづみ火びにあたゝまりてもうしろより
 吹ふくる風かぜの寒さむきよ半はかな
 殘ごん菊きく久ひさし
 雪ゆきつりもかけたる松まつの下したかけに
 なほこそにはへしら菊きくの花はな
 初はつ冬ふゆ紅あか葉は
 神無月かみなづきしぐれのそめる紅葉もみぢを
 秋あきのものは誰たれかいひけん
 隠かくれ家が
 同

つばら
 のりを
 つばら
 歌うた子こ
 同

十一月二十二日 書を半井君によす、明日居宅の有無をとふ成けり。此夜したゝめものいと多くて三時過る頃まで執筆す。

二十三日 半井君より書状來る。幸閑に付來訪され度となり、午後より行かましの心にて其かまへなしつるに正午より空俄暗く成て大雨只盆を覆す様也。母君も心地なやましとて打ふしなどし給ひしに、路もいと難儀なめり彼方にてもかゝる折に人の來訪するはいたく迷惑のものなれば今日はやめにせずやなどの給ふ、例の怠惰心に制せられて行す成ぬ。雨日暮て後も降にふる、今宵も三時に床へと入ぬ。

二十四日 起出みるに空高く澄のほりて朝日のかげ花々とさし昇りてぬれたる梢軒ばなどに照り渡れるいと嬉し、昨日違約しまつれるに、今日だに時おくれさせじとて母君しきりに朝飯をはらは訪參らすべしとの給ふ、九時卅分家を出ぬ、かしこへ行しは十一時成けん、本宅の方とひ參らせしに、例の隠れ家といふ、まだ目覺給はじ起し參らせんといふに、いなさてはちと早過たることよ、今しばしこゝに置給へ例覺給はんころにこそといへど、いなくといひて、下婢は出去りぬ、しばしして立歸りていふ、とくに覺給ばかなたへといふ、なるべくんば此方にてといはまほしけれといひ

かねてしたがふ、君は木綿のふるびたる綿入の上にとてらといふものはふりて白か鼠のしごき帶し給る打とけ姿に、さしむかはなんおのづから汗あゆるこゝちす、下婢も歸り行ぬ、例の人なき小室の内に長火桶一ツ間に置てものがたりすることよ、我が學びの友達あるは親戚の人々なぞに聞かせ奉らん何とかはそしられん、あやしかるべき身にも有哉、ましてかたみに語り合ふことなどいとまばゆしかし、新作せんとおもふ小説の趣向筋立などかたりてをしへを乞はんとてのすさび成けり、君まづの給ふいかなる趣向かつきたまひし承らまほしうといふ、心に決しては來りしものから何となくはなじろみて爪くはるゝ心地しけるぞわろき、いとなめげなることなるにあからさまにはとも一度は思ひはべりしながら、文にはことに意を盡しかねてみづから參り侍りとてかたりいづ、骨子は片戀といふことにて侍りとて、其筋だてなどかたる、そはいとよかるべうとて、其くだりはかく／＼せばよからん、こゝはかくせばなどの給ふ、あやしうもの語りの口とけて、いでやこの戀斗あやしきものはなし貴きも賤しきも賢なるも愚なるも其わいだめなき物也けり、されども今のよには其路をもて人をたぶらかし、世をくりますなんいと多き、城をかたむくるは女のみにてはあらざりけり

などの給ふ、奸誘なる美少年の貞淑なる良婦をたぶらかす談、利根の紳士が良家の處女が操をもて遊ぶてふ談などあり、さていはくかゝる類ひはみな其人を愛すにはさふらはす害すにて候也、誠の愛といはんからには其女が一生の大計を思ひはかりて安全なる良人を求め得させんことをこそ思ふべけれ、さて其人を選んに、世人が愛は猶我が思ふ意に満たず、世人が敬は我が敬に過ぎず、世廣しといへども人多しといへどもかの女を敬愛することは我に過るの物はあらず、さらばかれが安全の極り幸福の生涯をすぐさんこと我ならで誰かはなど思ひ到りたるこそ誠の愛なれなどの給ふ、かくて十二時にも成ぬ、ひる飯本宅よりも来たりぬ、辭しかねてこゝにてたぬ、君はなぞさは打とけ給はぬ、おのれはかゝる粗野なるをの子なれど恐れ給ふにはたらじをなといふに、なかははさること侍るべき、こはおのれが生ねにこそ侍れ、年久しく相馴たる友はみなしることにて、かくかたくななるが本色にさふらふといへば、君も少し打笑ひてさることにやされば猶ぞかし、おのれもみる所にそかはれ心は君がの給ふことなるものに侍るを哀れ友とし給ひて隔なくものし給へよといふ、そは今はじまりたることかはおのれはたゞ師の君とも兄君とも思ふなるをといふに、君また少しものい

はず成ぬ、少しありて哀我身こそ幸なきものなれ……………

日記 (二十五年二月)

まつ人、をしむ人、喜ぶ人、愛ふる人、さまざまなるべき新玉のとし立返りぬ、天のとのあくる光りにことし明治廿五といふとしの姿あさらかにみえ初て、心さへにあらたまりたる様なるもをかし、人よりはやくといそぎ起て若水くみ上るもうれし、よべは雨いたくふりて風さへにすさまじかりしを名残なく晴渡りて大空の色のみどりなるに、いかのぼりの聲のいさまじきも、つくばねののどかなる聲も、まじりて聞え渡れる何となくうれし、きのふより氣候とみにことなりて氣味わるさまであた、かし、地震のこと心にかゝればなれと埋火のもと遠くはなれて梅花の風軒ばにゆるく吹く、か斗の新年またせしことなしとて人々よろこぶ、いつも雪の様にみゆる霜の今朝しも置たりといふ色だになければ、

いか斗のどかに立し年ならむ

霜だにみえぬ朝ぼらけかな

とおもはれぬ、雑煮いわひとそくみななど例年の通りなり、化粧などしてさて書初め

をなす、國子は日出山をした、めたり、おのれのは

くれ竹のおもふふしなく親も子も

のびた、んとしの始とも哉

など様のことをした、む。山下直一君、久保木秀太郎年頭として来る。母君近隣に祝詞のへに参りたまふ。午後藤林房藏、西村釧之助、志川とくの二君参る。岩佐君門禮にて歸宅、夫より姉君、田部井参る、小時にてかへる。小宮山より年始状ながらおぶん一條のはがき着、喜多川君よりも年頭状来る、日没後國子は裁縫、おのれは書見をなす、お寶とよぶ聲今宵より聞ゆるもをかし、初夢といふらんからに今宵みるこそ誠ならめど、ふるくより明日のものと成り居れるを、進みゆくよのしるし夢取こしてみよとにやをかし、ふしどに入しは十二時斗なりけん、時計直しにやりてわからねどねたり。

二日 曇天。早朝より年始着の三ッ揃へ仕立にかゝる、訪人まれなる宿のならひあら玉のとしともいわず、いとくもの、静かなるもとめねど閑成けり。午後より小宮山来る、おぶんの物がたり四時頃までする。今日年頭にこし人は土田恒之助ならびに

もと師の君がり仕へたる玉とよぶ女今二人三人成けり。今宵も裁縫に夜をふかした

三日 曇天。よべは雨少し降たれど今日の空は夫ほどにもあらず。午前綾部喜亮参る。午後上野伯父君并に三枝新君まゐらる、三枝君母君と伯父君に年頭として金子を送らる。種々はなしあり、一あし伯父君先にかへる、日没すこし前新君歸宅。この夜もよべにおなじくふけては雨に成りけり。

四日 曇天。年頭者は藤田君、菊地君のみ、野尻君、澁谷君より年頭状着、野尻君にはすでに差出したればよし、澁谷ぬしはこそ赴任以來住家知れ難く、さりとて人とはんも少し間のわるきに、思ひながら不沙汰なしたるに先よりはこと更に年賀いわれたる、答禮せずはとて直に返事を出す。午後甲州後屋敷村より奇異なる年頭状つきたり。今日までに諸々よりこし年頭状、熊ヶ谷より山下君、甲府より伊庭君、岐阜よりまき子君、音羽の前島君など成り、此方よりさし出したるも十五通斗はあるよし、今よりも猶四五軒はくるべしなどみななくいふ。今日もひねもす裁縫、猶夜更るまでもなしたり。

五日 曇天成しが十時頃より晴になる。佐藤梅吉参る、一酌にて歸宅。午後より田部井参る。おなじくこの夜も裁縫よふかして一番鳥の聲聞てふしどに入たり。

六日 曇天。折々に雨さへふる風もいと寒かり、寒のいる日なりときけばことわりなり。三ツぞろへの綿入物をさる。この夜もおなじく三時まで裁縫。

七日 曇天寒し。明日はかならず降りなるべしなど國子などのいふはおのれが年頭にまわらむと定めたる日なればいやがらせんとていふなり。今日は目に立たる來客もあらざりし、稻葉君親子、おく田の老人の二組のみ、日暮迄に裁縫は仕終へたり、國子と共に入湯す、半井君に奉らむとし玉ものかひにとて本郷三丁目まで行、空いとよく晴て風少し吹初ぬ。山崎君、横山君、雨宮君より年頭状つく。この夜綾部喜亮、久保木一條に付ものがたりにくる。おのれらはあすの仕度かれこれして夜をふかしたり。

八日 早起空打あふげばいとよく晴て塵斗のくもなし、うらくとかすみたる様なるが誠に春とのみ覺ゆ、出がけの支度かれ是するまに、綾部喜亮久保木同道して参る、佗濟になる。歸宅直に國子は神田邊へ、おのれは車ものして先西村君へとて行、茨城より伯母君参られたりとて面會す、明日は歸國せんとおもふに是よりさく坂迄参

らんとの所なり、そなたより給はずば逢がたかりしなどいひて嬉しげに物がたりす
 出て師君へ行、病中且來客なればと下女のいふにをして對面もいかゞ哉、さらば御
 老人はといふに只今ねぶりに付きたまひし所なりといふにわびて、更ば又こそとてか
 へる、みの子君を新小川町にとふ、あがれよなどの給ひつれど先をもいそげばとて暇
 ごひして出づ、車いそがせて平川町半井うしの本宅に來てみれば門戸かたくとざして
 かし家のはり紙なゝめにはられたり、先むねとわろかれて立よりてみれば、半井氏御
 尋の方は六丁目二十二番地小田何某方まで參られたしとなり、さらばとて又同家へ
 行、半井ぬしは何方へにかと訪へば、下女に似たるをな子打笑みながらに奥に入たり
 引違へて出來たるは主婦にやあらん三十斗の人我がとふに答ていふ様、うしはさる頃
 より旅行して只今は留守に侍り、御用ならばこゝにいひ置給へといふ、御旅行はいづ
 方へかと又とへば、只地方へと斗いふ、今は尋ぬるも無益しとおもへば、只おのれは
 樋口と呼ぶるゝものに侍り、別しての用なるならねど御年頭の御禮にとて參りつるな
 れば御歸京のふし其由申つぎ給てよ、又御手数なるべけれど御歸京の報をもねぎ奉
 るになんといひて出ぬ、なぞの御旅行か、まさしく御隠れ家になるべし、ぶしつけは

覺悟なり、頼み參らすこといと多かるをいかで對面せずにはとて、例のうら家をとひ
 寄たり、まづ庭口の方よりみればるんがはの障子新たにはりかえて物何となくあらた
 まりたる様なるは、もしよの人の住家にかはりたるかなどもうたがわる、格子戸のも
 とにたちてあまたゝびおとなへど誰れいらへする人もあらず、さては留守にやとおも
 へど、火鉢にたぎる湯のおとなど人なき折のさまにもあらず、うちにかとみれば格子
 戸の尻にせんさして出入かたく禁じたり、こゝ迄來て入れられざるも何となく物たら
 ぬ心地のするに、いかで對面給はらずやとさまゝにいひ入たれどかひなし、水口の
 戸の明はなしあるにいさゝか力を得てそこよりいりぬ、さしのぞけばさまゝの家財
 つみ重ねたる納戸めきたる所、奥のかたにうしはをわすにかとおそるゝものぞきた
 れど、人ありげにもみえず、留守なる所に上り居らんも後の人ぎゝいかなるべきか
 といそぎ立かへらむとす、さるにても參りしかひには奉らんとてもてきしものだにお
 かばやと思ひ寄て、臺所の板の間なる所に土産の小箱さし置て出ぬ、車にのりて歸る
 道すがら思へばあやしき事をもなしたるかな、我身むかしはかゝる先ばしりたる心
 にもあらざりしを年たけると共におもての皮厚く成るなり、はしたなくもなりつるこ

とよ、かゝる筋のこと世の人も聞ましかば何とかいふらむ、あやしうなき名などた
てられなんもするべからず、いがいはせんなど思ひ出づれば心は身をせめていとくる
し、家に歸りしは二時半頃なりし。宮塚の伯母君参り居られたり、留守に姉君并に森
照次君参られたりといふ、宮塚ぬしと暫時對話、西村の伯母君参る、おのれの早歸り
におどろき給ふ、夫より日没迄西村伯母君談話、其中に國子歸宅、母君御伯母君を送
りて表町へ参り給ふ、この夜日頃のつかれと遠路のつかれにや、疲勞ことに甚だし、
さらに何事をなすべき心地もせねど、半井うしには是非一書参らざるすみかたかるべ
しとしてしたむ、幾そ度書直しけん角に心にもいらす、からうじて書終へたるはよ
み返してみるに何となく末におそれの種やまかんとおそろしくさへ成て、状態にいれ
たるまゝ、便にもたくせず、余の事に移りぬ、母君九時頃歸宅。十二時まで詠歌十
九日 早起小石川初稽古なればいそぎ出づ、さるにても西村の伯母君はいかに
歸國やし給ひけん、道筋なれば訪奉らばやとて寄る、今日はたゝんか、いかにせんか
など様にものがたらる、少時に師君のもとに行、昨日對面をこはざりしとて師君大
立腹なりと下女報す、光長君來り給へり、師君に昨日の理由をのべて詫をなす、來會

者十名斗なりし、諸君歸宅は四時少し前成けん、夫より暫時二階にておのれが事に付
て談話、半井君一條をもものがたる、夫につきての心得かに角とをしへ給ふ、小説み
ばやわれにも又考案ありなど心切にの給ふ、日没暇ひして出ぬ。この夜よりおのれ
が平常の綿衣仕立にかゝる。一時床にいる。

十日 晴天なれば今日は安達に年頭として行かばやと國子と共に支度をなす、父君
墓所にも年始に参らざらんなん心ぐるしきに、今日こそはとて、まづ安達より先に
行、小時にて築地に参り墓参、夫より直に歸宅、姉君のもとに年賀いひに行歸宅、小
宮山おふんの兩人参る、日没前迄居たり。この夜はなすこといと多くて、ふしどにい
りしは一時なりけん。

十一日 晴天寒し。母君四谷上野君に参らる。半井君よりはがきつく、旅行にも何
にもあらず以前の隠家にありといふ、おもひしことよと打笑ふ、さるにても文出さ
りしこそ心安かれ、よくも書そこねなしたること哉と我ながら嬉し。午後母君歸宅、
その前に久保木及び田中君來訪ありたり。今日はひねもす何ごとなしに一日を終へぬ
床にいりしは十二時成けん。

十二日 早起、雪ちら／＼と降りてぬ、見るまに一寸斗も積りたるは極めて大雪になるべきなめりなどいひ合ふ程に、十時斗の頃には名残なく晴わたりて日のかげさへもれ出ぬ。午後よりは雪たゞ消にきえて雨だりのおと軒ばに茂し、暮てよりは又雨に成ぬ。此夜より又小説著作にかゝる。ことの外になまげたり。

十三日 晴天。図書館へ行く、九時頃より家をば出づ。太平記、大和物語をかりる。但し大和ものがたりはみずして、太平記のみ閲覽す、三時頃出館、家にかへる。母君の爲に按摩を雇ふ、舊幕臣なりとて述懐のはなしあり、日没後母君なほよろしからずとておのれ又按摩を爲す。十二時床にいる。

十四日 晴天也。母君神田邊に年始に趣き給ふ。午前のうちに綿人ものをなす、午後より作文にかゝる。日没後より歌をよむ、宿題五ツ、十首を詠す、十二時床にいる。この夜濱田何某夜にげの奇談。

十五日 早起、小豆がゆの節行ふ、午前髪あげをす。午後より作文。夕刻吉田君年頭として参らる、夜食を出す、八時頃まで談話、國子附木店まで送りて行。十二時床にいる。

十六日 小石川稽古なり。早起行、みの子君すでにあり、例のかるた君入給はではいとさう／＼しきに是非をいはず來給へかしなどかへす／＼いふ、師君も行へしなどの給はするに、さらばとて宅へは状をさし出してこゝよりともなはる、來會者十七人斗、無禮講の一座中々にわづらはしかりしを終りしは三時斗成し、この夜小震あり、この日堤よし子君入門。

十七日 九時頃までねむる、朝飯を終てやがて車給はりて歸宅す。母君大立腹なりといふ、ひたすらに先非を後悔す。母君は小林君よりかけて三枝へ年頭にとて趣き給ひし留守なりけり。山下直一参る、晝飯を出す、二時ごろ歸宅、廣瀬ぶんへはがきを出す、三時頃母君歸宅、山下直一より借りたる早稻田文學通讀、よべ夜更しをなしたるに風をや引けんせき出たえがたければわびていと早くふしどに入たり。三時頃大震。

十八日 天気晴朗。吉田君にはがきを出す、みの子君親戚の縁談一條につきてなり。母君望月へ趣きたまふ、廣瀬ぶん参る、ひる飯を出す、種々談話、三時頃歸宅、この夜も早く打ふしたり。

十九日 天氣快晴。母君下谷邊年頭にて午前より出かけ給ふ、風邪ことに甚だしければ打ふす、服藥などす。此夜ねつ甚だし。

廿日 快晴。母君ぶん一條に付常總館へ趣き給ふ、おのれは猶病床を出ず、今日も一日打ふしたり、母君歸宅ぶん既に監視換をなしたること、常總館主人かはるべきはなしあり、食事兎角す、ます、此夜も服藥して寝たり、濱田の妻子來る、九時頃歸宅。

廿二日 快晴、寒氣甚し。明日は小石川稽古なるに、今日打ふし居らば母君又との給はんも斗りがたくて、早朝よりおくる、晝飯など味はなけれど常の通に食したり。御歌會始、御製並に豫撰の歌ども今日の新聞紙上に出たり。することなしに打ふしたり。

廿三日 天氣快晴なり。おもむろに髪など結びかへて午前十時といふに家を出ぬ、師のもとには來會者すでに十人斗ありし、伊東夏子ぬしも風邪にて参り給はず、小出君及び小笠原政徳君參會歌話あり、吉田かとり子君落車の災難あり、今日は來會者と多かりし、日没終會 師君より鮭甘酒漬一箱給はりて歸宅す、田中君より新小説か

りる、歸來閱覽に一夜を更す。

廿四日 天氣快晴。朝來手紙を二通した、め、午前丈習字をなす。午後より小説閱覽。

廿五日 無事。

廿六日 無事。

廿七日 曇天。午前例の通習字、午後より小説稿にかゝる。この夜なす事なしにふしたり。

廿八日 早起、曇天、あたゝけし。終日小説從事。

廿九日 曇天。

卅日 晴天。小石川稽古歌合ありたり、歸宅日没。上野君母子來たりし由なり。

卅一日 しるす程のことなし。

二月一日 無事。

二日 無事。

三日 半井うしへはがきを出す、明日參らんとてなり。しばらくにしてうしよりも

はがき來たる、明日拜顔し度し來慰給はるまじきやとの文牒なり、こはおのれが出したるに先立てさし出し給へるなるべし、かく迄も心合ふことのおやしきよと一笑す。

四日 早朝より空もやうわるく、雪なるべしなどみないふ、十時ごろより突まじりに雨降り出づ、晴てはふり／＼ひるにもなりぬ、よし雪にならばなれ、なじかはいとふべきとて家を出づ、眞砂町のあたりより綿をちぎりたる様に大きやかなるもこまかなるも小止なくなりぬ、壹岐殿坂より車を雇ひて行く、前ぼろはうるさしとて掛させざりしに風にきをひて吹いる、雪のいとたえがたければ傘にて前をおほひ行くいとく、九段坂上るほどほり端通りなどや、道しろく見え初めぬ、平川町へつきしは十二時少し過る頃成けんうしが門におとづる、にいらへする人もなし、あやしみてあまた、びおとなひつれど同じ様なるは留守にやと覺えて、しばし上りがまちにこし打かけて待つほどに、雪はたゞ投ぐる様にふるに、風さへそひて格子の隙より吹入る、寒さもさむし、たえがたければやをら隙子ほそめに明て玄關の二疊斗なる所に上りぬ、こゝには新聞二ひら(但し朝日、國會)配達しきたりたるまゝにあり、朝鮮釜山よりの書狀一通あり、唐紙一重そなたがうしの居間なれば明けたにせば在否は知るべきながら、

ら、例の質として中々には入りもならず、ふすまの際に寄りて耳そばだつれば、まだ睡りておはすなるべしいびきの聲かすかに聞ゆる様なり、いかにせんと斗困じたる折しも、小田よりなりとて年若きみづしめ郵便をもて來たりぬ、こはうしの此頃世にかくれて人にあり家しらせ給はねば親戚などの遠地にある人々より書狀はみな小田君へむけてさし出し給ふなるべし、この使ひもこれ持來たりたるまゝうしをば起しもせでよろしくなどいひて歸りぬ、一時をも打ぬ、心細くさへなりてしわぶきなどしば／＼する程に、目覺給ひけんつとはね起る音して、ふすまはやがて開かれたり、寝まきの姿のしどけなきを恥ぢ給ひてや、こは失禮と斗いそがはしく廣袖の長るりかけたる羽織き給へり、よべ誘はれて歌舞伎座に遊び一時頃や歸宅しけん、夫より今日の分の小説ものして床に入しかば思はずも寝過しぬ、まだ十二時頃と思ひつるにはや二時にも近かりけり、など起しては給はらざりし遠慮にも過ぎ給へるよとて大笑しながら、雨戸などくり明け給ふ、あなや雪さへ降り出でたるにさぞかし困じ給ひけんとして勝手のかたへ行、手水などせんとなるべし、一人住みは心安かるべけれど、起るやがて車井の綱たぐるなど中々に倦しかるべきわざかなと思ひ居たるに、臺じうのといへるものに

消炭少し入れて其上に木片の細かにきりたるをのせてうし持て来たまへり、火桶に火起し湯わかしに水入れて来るなどみるめも佗しくて、おのれにも何か手傳はし給へ、お勝手しれがたければ教へ給ひてよ、先づこの御寢所かた付ばやとてたゞまんとしたるに、うしいそがわしく押とめ給ひて、ななく願ふ事はなにもなし、それは其儘に置給ひてよと迷惑げなるにをしいか々とてやみぬ、枕もとにかぶき座番附さては紙入れなど取ちらしあるに、紋付の羽織糸織の小袖など床の間の釘につるしあるな、どううがわしさも又極まれり、昨日書状を出したる其用は今度青年の人々といはいたく大人顔する様なれど、まだ一向小説にならざる若人達の研究がてら、一つの雑誌を發せんとなり、世にいはゆる大家なる人一人も交えず、腕限り力かぎり仆れて止まんの決心中々にいさぎよく、原稿料はあらずともよし、期する所は一身の名譽てふ計畫ありて、一昨夜相談會ありたるまゝこは必らず成り立つべき事と思ふに、君も是非とたのみて置きぬ、十五日までに短文一編草し給はずや、尤も一二回は原稿無料の御決心にてあらまほしく、少し世に出で初めなば他人はおきて先づ君などにこそ配當いたすべければなとくれぐれの給ふ、さりながらおのれら如き不文のもの初號な

どに顔出しせんは雑誌の爲め不利益にや侍らむとて辭せば、何としてさることやはある、今更に其様なこと仰せられては中に立てそれがし甚だ迷惑するなり、先方にはすでに當になしたることなればなど詞を盡して仰せ給ふ、さればよろしく取斗らひ給ひてよ、實はこの頃草しかけし文御めにかけてやとて今日もて参りぬ、完成のものならねどとて持てこし小説一覽に供す、よろしかるべしこれ出し給へ、おのれは過日ものがたりたるもの一通の文としてあらわさばやと思ふなりなどもがたらる、其中うし隣家へ鍋をかりに行く、とし若き女房の半井様お客様がお樂しみなるべし御浦山しうなどいふ聲、垣根一重のあなたなればいとよく聞ゆ、イヤ別して樂しみにもあらずなといふはうしなり、先頃仰せられしあのおかたかと問はれて左なりといひたるまゝ、かけ出して歸り来たまへり、雪ふらずば、たく御馳走をなす筈なりしが、この雪にては晝餅に成ぬとて、手づからしることをにてたまへり、めし給へ盆はあれど奥に仕舞込みて出すに遠し、箸もこれにて失禮ながらとて餅やきたるはしを給ふ。ものがたり種々うしが自まんの寫眞をみせなどし給ふ、暇をこへば、雪いや降りにふるを今宵は電報を發してこゝに一宿し給へと切にの給ふ、などがわさることいたさるべき、免しを

受けずして人のがりとまるなどいふ事いたく母にいましめられ侍ると眞顔にいへば、うし大笑し給ひて、さのみな恐れ給ひそ、おのれは小田へ行てとまりて來ん、君一人こゝに泊り給ふに何のことかわあるべきよろしかるべしなどの給へど、頭をふりてうけがわねば、さればとて重太君をして車やとはせ給ふ。半井うしがもとを出しは四時頃成けん、白がひくたる雪中、りんくたる寒氣ををかして歸る、中々におもしろし、ほり端通り九段の邊、吹かくる雪におもてもむけがたくて頭巾の上に肩かけすつぼりとかぶりて、折ふし目斗さし出すもをかし、種々の感情むねにせまりて、雪の日といふ小説一編あまばやの腹稿なる、家に歸りしは五時、母君妹とのものがたりは多けれどもかゝす。

六日 小石川稽古。

七日 ことなし、但し山下君、西村君、荻野君、石井來給へり。

八日 ことなし。

九日 奥田老人病氣の報あり、母君直に參り給ふ、國子と共に同事に付てさまざま相談す、荻野君來給ふ、朝日新聞を持參したまふ、原町田、澁谷へ書状さし出しくれ

度とはがきを依頼さる、日没後母君歸宅、老人は左までにもあらざるよし、此夜姉君秀太郎來る、十時頃まで談話歸宅、母君國子も今宵はねむからずとて、二時頃まで起居給へり。

四谷右京町二十七番地 上野兵藏

麴町平川町三丁目十五番地 半井 洌

同町六丁目二十二番地 小田久太郎

越後國南蒲原郡三條町 澁谷三郎

和歌四天王の著名の歌

頓 河

月やどる澤田のおもにたつ鳴の

兼 好 水よりたつ明方の空

手枕の野邊の草葉の霜枯に

みはならはしの風の寒けさ
淨 辨

滝江の氷にたてるおしの葉に

ゆふしもさやぎうら風ぞふく

廣 運

庵結ぶ山のすその夕ひばり

あがるもおつる聲かどぞきく

に つ 記 (二十五年二月)

二月十日 朝來机邊にあり。午後母君奥田へ見舞に参り給ふ。日没少し前小石川より郵便來る、師君風邪にて一人にて歩行も出來難しとのこと、早速参くれ度趣故、直に支度して行く、師君いたく喜び給ふ、逆上甚だしくともすれば本心をも失なひやせんと思ふ様なるに種々後事など托しておかばやとて呼つる也とて、心細げに泣き給ふ、種々談話、君が來給ひしより心落居てや少し快よく成たる様也との給ふ、藥などすゝめて十時にも成ぬ、明日又とて床にいりし。

十一日 快晴。師君大さによろしき方也。下婢のことに付て伊東家一條のものがたりあり、右らにつきおけいのもとへ使ひに行く、其もやうに依りて更に伊東君へ行く岩松のもとより車、伊東君にて暫時對話、但し夏子君は他行中なりし、歸路佐々木君にて藥取をなす、午後水野せん子君参らる、三時過る頃宅より國子迎ひに来る、新参の下婢のおのれと見違へたる奇談あり、夫より直に暇乞して歸る、四時成し。上野房藏來たりたるよし、國子それより吉田君へ行く、歸宅せしは日没後なりし。吉田君よ

り梅と水仙のいけ花もらひて来る。此夜園子日記の書き初めをなしたりとて見せる。此夜二時床に入る。

十二日 雨天。父君の命日なれば母君寺参りし給ふべき筈なりしが見合せにす。小説十五日までに半井うしへ送べき約なるに期日も近づきぬ、また上の巻許にて中下とも残れり、さらば明日の稽古は断りいひて休まばやと師君のもとへはがきを出す、此夜小説少しよみて母君に聞かし参らす、思ふことおもふまゝにもならで今宵もいたく怠りにけり。

十三日 晴天。朝來小説にかゝる、終日従事、此夜終夜、曉がたに少しねむる。

十四日 大雨。終日小説に従事し、燈明に及で全備す、半井うしへはがきを出す、明午後参らんとて也、重荷おろしたる様になりて、今宵はいたく安心す。

十五日 雨はやみたれど風寒し。午前にかをいで、師の君が先行く、伊東君老母歸宅されんとする所成し、師君これより佐々木君へ参り給ふよし、暫時居りくれたし、出て出かけ給ふ、二時近くなるまで歸宅なし、おのれも廻町行きに心いそがれて留守居の婢女に依頼して暇乞す、九段坂上より車にていたる、半井君方に來客ありげなれ

ば軒ばにしばしたゝすみ居しにうし窓より面を出し給てお入あれ心配の人ならず、我が兄弟同様のものぞとの給ふ 入てみるに何といふ人かしらす年若く色黒き人なり、小説一覽に供すいたくほめらる、其人も種々にいふ、雑誌の名はむさしのとつきたるよし、遅くも來月一日頃までには發兌すべき見込也といふ、男子の方は一月交代のつもりなれど君のみは連月に願ひたしなどいはる、うしが新著の草稿みせ給ふ、小がさ原艶子嬢といふ人物の名ありこれは心づけて直し給へなどいふ、小時にて歸宅。芝兄君病氣にて困窮甚だしといへるに金少し通運便にて送りたりしが今少し送られたしとはがきにていひこしぬ、さらば明日おのれが参らんなどいふ。久保木参る。園子とおのれとがすもじかひに行く、留守にて母君腹痛のこと、歸宅早々手當をす、夜を盡してわるかりし。この日總選舉投票當日なれば市中の景況いづ方も何となく色付きたる姿なりし。

十六日 大風、寒氣甚だし。母君は森照次君がり金子かりにと趣き給ふ、おのれは芝へ行、萬世橋より鐵道馬車それより車にて行く、貧家のさまは思し如く成しかど、病氣はさまでつよからず大安心す。持参の金子送る 種々物がたりひる飯こゝにてた

へぬ。三時頃歸宅の途につく、新橋より又馬車、歸宅せしはや、日没に近かりし。母君森君の方首尾よかりし物がたりをし給ふ、一同よろこぶ、この夜原町田澁谷君より返書来る。

十七日 早朝結髪して家を出づ、荻野君を中徒町の旅宿にとふ、物がたり種々書物をかきり、夫より圖書館へ行く、三時歸宅習字をなす、日没後入湯さかなかひに行きし奇談あり。

十八日 晴天、寒風おもてを切るが如し。森君に禮ながら借入金に行ばやとて支度す母君と共に家を出しは九時成けん徒歩林町にいたる、森君は留守成し、小君に種々談話證書したゝめて八圓かきり、昨日小林君まられたるよし。同家とう難のはなし及び栗塚國會議員同難にかゝりたるはなしなどあり、ひいて小説著作のことに移る。晝工竹内桂舟は小君が甥の師なるよし、折々は參る事もあり、同人は硯友舎連の一人なれば美妙齋紅葉連各君とも入懇なればもし同人らに紹介などを要せらるれば其勞とるべしとなり、右關係の事どもものがたりて同家を暇乞せしは十一時成し、梅が香聞ながら菘下より參らんとて根津神社をぬけてかへる、風寒けれど春ははる也、鶯の

初音折々にして思はずてあしとゞむる垣根もあり、紅梅花をかしき目にうばはるゝも少なからず、家に歸りしは十二時頃成けり、夫より新著の小説にかゝる、稻葉君來訪正朔君の衣類もらひ度とて也、日没少し前三枝より出産祝ひの赤飯来る、夕飯ことに賑々しく終りて、諸大家のおもしろき小説一巡母君によりて聞かしまいらす、國子が日記を見てよく書きたりなどいふ、夜更て雪降り出づ、おのれが臥床に入しは二時ごろ成けん。

十九日 母君先おき出給ひて妻戸おしたまふ、さてもつもりたる哉尺にもあまりつべし、まだいくばくか降らんとすらむなどの給ふは雪のことなめりとうれしくてやをら起ぬ。國子をも起して共にみ出るにあめもつちも木立も軒ばも白妙ならぬ方なし、綿を投たる様にふるさまいといさましく、ならば角田川あたりに一葉をうかべたらましかばなど風流がりて笑はれぬ、朝いひしまひて後も中々にやまず、待人もなき宿ながらせめて這入だけでも道あけばやとて國子と共に支度のみはいさましくして雪かきす、尺といひて二三寸はあまりつべし、近來覚えぬことなど語り合ふ、終りてより習字せばやとするに手ふるひてせんかたなし、力業する人の手かくことものうくするは斷

りぞかし、荻野氏より借りたる雑誌並に山東京山編のくもの絲巻通讀、朝日新聞の記事少し見て晝飯にす、午後より早稲田文學中徳川文學、しるれる傳井にまくへす詳釋、俳諧論など四五冊通讀、岩佐君來る、母君新中のもとへ參り給ふ、日没後歸宅せらる。一時臥床に入る。

廿日 晴天。遅し寢過したり、朝の間に脚の絲巻よみ終る、雜書少し見る、夫より習字、姉君來る、雜話、午後結髪して師の君が行く、田町にて田中君の橋道守君發會へ赴き給ふにあふ、暫時立話し、師君病ひよろしからずとのよし傳へ聞きて小石川へ行く、師君大よろこびのこと、種々明日の手傳ひしてしるこの馳走などにあづかりて歸る、荻野君參り居られたり、晚飯馳走す、おのれらは仲町にかひものせんとて一あし先に家を出ぬ、歸宅は日没後成し。此夜短冊した、めなどして床に入る。

廿一日 晴天。十時家を出づ、小石川へ行く、師君と共に車をつらねて會席へ趣くみの子君すでに參り居られたり、種々談話、文雅堂參る、四人ひるめし、其内加藤君參る、來會者は四十人計の見積り成し所追々に増加して五十人にもなりぬ、此日の點取題、雪後春月、黒川眞頼大人、三田諱光君、小出榮君の點なりし、黒川君甲はかと

り子ぬし、小出君甲は佐藤東君、三田君の甲黒川大人が乙はおのれのなりし、景品など給はる、諸君歸宅後別に小宴を開きて佐藤、井岡、田中三君並に師君おのれなど歌話あり、終會は八時頃成き、車を小石川によせて勘定のはなしなどす、又茶菓を給はりなどして歸宅す、此夜は何ごとをもなさずして床に入る、夜深く雨ふり出づ。

廿二日 雨天、寒し。午前はなし得たることもなく、午後より著作にかゝる、されども大方は紙と筆にむかひたるまゝとりてかくまでにはいたらざりき。和歌五題計よむ、風邪にやあらん、頭痛たえがたければ此夜は早くふしたり。

廿三日 曇天。朝のまに江崎君並に兄君へ出す郵便をしたゝむ。夫より小説原稿にかゝる此夜も早く床にいりたり、ねぶりがかねて小説の趣向などたてる。

廿四日 曇天いとあたゝかし。朝來昨夜たてし趣向によりて筆をとる。田中君より明日かすよみなすべきに付參りくれ度しとて書狀來る。日没後小説二三冊よみて母君に聞かし參らす。夜に入りて強風。

廿五日 風やまずいと寒し。髪ゆひてさて家を出づ、戸田君先參り居らる、伊東君は何ごとかさしつかへありて參り給はず。かす詠題三十、四時頃に終る。小説のもの

がたりして田中君自作の小説二冊計みせ給ふ。日没頃車を給はりて歸る、十一時頃床に入る。

廿六日 快晴

廿七日 小石川稽古也、強風寒氣はなはだし。早朝より行、前田君より來たりし歌に返歌したゝめておくる、三田彌吉君夫人入門せらる。四時頃歸宅す。

廿八日 早朝圖書館へ趣く。此日も強風寒し。萩野君旅宿を訪て書物を返しなどせしに竹洲君原町田へ一昨日參られたるに實君計なりし、暫時對話夫より圖書館へ行く、館内にて新潟縣人田中しをの女史に邂逅、禪學の事に付て談話、女は長岡の戸長の嗣女なるよし、良人は洋畫を業とするとか、女禪學に志深けれど地方の習慣女子をして就學の便を得せしめず、偶近方の寺院などに布教の僧ありと雖も俚耳に入り安き小乗の淺薄なる事のみにて事大乘のうん奥に致らす望洋の思ひありといふ、今たび上京の便に任し原坦山君に教へを乞はゞやと思ふなどいふ、該學に關する書物など取調べたり、歸路同行して女史が池の端の寓居まで趣く、後日を約して立別れぬ。歸宅せしは日没少し前なりき、この日野々宮君來訪されたるよし、

廿九日 ことなし。

三月一日 田中君より手紙來る、過日小説のことに付て新聞社の周旋依頼し置しに我が著作の小説一二回見度し其上にて相談せんといへる人あるよし、至急遣はされたしとて也、直ちに柵なし小舟に筆を下ろす。此夜一回丈書き終る、國子などの此月は必らず都合よかるべき也一日早々うれしき報を得たればなどいふ。

二日 午前髪をゆひて午後より新小川町に行く、田中君まさに各評の締切に成し所なりけり、打とけたる物語に長き日のくるゝも知らず、燭を取て猶談す、晩飯の饗應を受けてきて車にてかへる、日没よほど過ぎ成けん。この夜は目立たることなく、只田邊君受持の難陳二題よみて床にいる。

三日 雨天也。早朝田邊君に書狀出す。各評廻り來たる。選みの上長谷川君に送る。姉君晝頃に參らる、今日は上巳の節會なればとて白酒いり豆などとのへて一同祝ふ、柵なし小舟繕稿にかゝる。外にことなし。

四日 雨天、暖かし。和歌七題十五首計よむ。小説稿いそがはし。

五日 雨天。早朝小石川稽古に趣く。來る人十名計成し、水野君鎮地菊間神社へ奉

納の和歌をよみくれ度しとて、則ち今日の點取にす、有松喜色なりけり、終りて後今一
 題詠す、來る十一日梅見に行べき約束をなす、みの子君ある方より我が自作の小説見
 度しとて由來たれりとして今夜中に一回分遣はされ度といふ、趣向のあてもなければど
 うにか可成とてうけ合ふ、一同歸路につきしは四時頃成し、泥路歩行いと難義なり
 し。此日前島君より女學雜誌をかりる、歸宅早々日没まで通讀、夫より小説著作に従
 事す、夜を徹してみなし子第一回稿終る。つまどのひまのしらむを見て暫時寝むる。
 六日 雨天。十時起く、再び稿をあらためて郵便に付したり。小説著作、詠歌、習
 字などの日課を勉めて、夜に入ては讀書などをなす。十二時床に入る。

七日 連日の雨夜の間に晴渡りてうらくと霞む朝のけしきいとのか也。蕩々た
 る春風に庭前の梅花花びらみだれて薫れる雪の降くるに惜しみがは然のこゑなど我や
 どの春よの人に見せまほし。今日は半井うし訪はやとて母君に結髪をわづらはした
 り、晩さんの後ぞとて母君國子籠をたづさへて下りたち給ふはわか菜つまんとて世
 世には金殿樓閣に住む人もあるべく綾羅錦しやうにはこるもあるべし、借問す綿衣三
 年改ためず破窓わづかに膝をいるゝに過ぎざれど優々たる春の光春の匂ひの身にも心

にも家のうちにもみち渡りたる我が親子許たのしきものありや非らずや。さても今日
 も午前はなすことなしに終りて、晝飯たゞちに麴町へと趣く、我が半井うしへ行時と
 して雨天か風かにあらぬは無し、今日こそ例にも違しなれなど笑ひ居しに、家を立出
 る頃より空俄にさわぎ初めて九段坂のあたりよりあられまじりに雨すさまじく成りぬ
 君のもとへつきしは一時過る頃成り、門の戸押せどもあかず例の朝寝しておはすな
 るべしとおもへばからうじて明て入りぬ、みれば火桶に火あかくして湯などもたぎり
 居るにうしは見え給はずこはあしきこととしてけり、留守なる様にも思ひつれ
 ゝに歸らんも残りをしてしばしあるに歸り來給へり、湯あみに趣きしなりとていた
 く佗給ふ、先頃の人も居りたり、談むさしの、ことに及ぶ、連中に種々さわりありて
 發兌の日數かく計には延たれど熱心の度は實に非常なるものにて柳塙亭寅彦の如きは
 原稿に金を添てまで出したしとのい氣組なり、其外右田年方は晝の寄附をなし、板木
 師は木の代丈も送らむといひしを堅く辭したり、小説雜誌の發兌日に月にしげくして
 濱の真砂たゞならねどかく計熱心なるは未だ見し事も聞しこともあらずと書肆もいへ
 り、此上は諸新聞にて廣告料丈寄附になしんさつの職工が手間料を無代にし、數萬

の顧客が定價の上に幾分の義捐をなすにさへいたらば眞に武さしの萬歳なるべしと大笑し給ふに、おのれも今一人もたえず笑ふ、大人また都の花も二千五百、難波がたも二千五百の賣れ高なれば、我むさしのは五千ほど世に流布させ度しとの給ふ、今一人のされば寅彦に文章を作くらして弊よきものを撰びて縁日又はかん工場前など様の所に目立ちたる服装をさせて節おもしろく讀賣廣告をさせなんはいかにといふ、おのれ曰く猶よきことあり、萬世橋などの袂に立ちて往來の人々に無料配付をなさば五千はおろか萬も五萬も世に流布すべしといへば一同大笑す、君が閨櫻は小宮山にもみせぬ、氏が説にはむさしのは君が所有のぬしたるべしとなり、一二いふべき所も有しが世の批評の爲にとて殘しおく氏はいへり、晝は寅彦が意匠にて年方にゑがするつもりなれば左覺せよ、君が姓名を表はさぬを床かしがりていかなる人ぞ見たしなど人々のさわぐがをかききぞと例の給ふ、但し武藏野は十五日發兌のつもり、次號の原稿は廿日過ぎまでに送られたしとの給へり。昨日の事なりし、國子がいつはりの無き世なりせばいか計人の言の葉うれしからまし、歌を反對によりて給へといひしかば偽りのあるよなればぞかく許人のことの葉うれしかりけるといは、いはなんとして笑ひし

が大人が詞に似合しきもをかし、三時にも成しかば又こそとて暇を乞ふ、今しばしまたるべし何か馳走をなすべきになど止め給ひしが空も漸く雲深くなる様なればとてしひて歸る、歸路より段々に晴て家へつくほどには一點のくもなくなりしもあやし。奥田老人参り居られたり、晩さんを馳走す。關場君よりはがき來たり、國子に参りくれ度しとあれば何事かしれねど明日参り給へなどいふ。難陳廻り來る、書うつして伊東君へ送る。此夜はいたく頭痛してたえがたければ早くふしたり。森川町失火ありたり。

八日 午前くに關場君へ行、ひる飯馳走に成りて午後歸る、悦子君實家の妹十歳なりとかいへるを中島師のもとに入門させ度紹介を依頼したしと也、同家より御伽草紙貸與さる。此日中は何ごとの目立ちたる仕事なくて、日ともしに成ぬ。風いとあらく吹き出づ。

九日 晴天。早朝より支度をなして小石川へ行く、月次會なり、暫時ありて田中君といらる。今日の來會者三十八九名成し、島田政君も参られたり、點取題野慈にて重嶺、恒久、信綱、安彦四君の點なり、恒久君の甲重嶺君、安彦君の甲恒久君、重嶺君

甲安彦君成しかばこは誠に詮なしなどいふ、信綱君の甲はおのれ成けり、十一日梅見と定まる、相談種々、日没一同退散、關場君依頼一條異義なくとのふ。

十日 曇天。武藏野雜誌次號に出すべき趣向のあらまし文して半井君へ送る、石井へはがきを出す、明日の天氣はいかならむ哀人は好天氣なれかしと待らむものを、我爲には降てくれよかし、友といへど心に隔てある高等婦人の陪從してをかしからぬこととに笑ひおもしろからねど喜ばねばならぬこそ我が常に屑しとせざる所なるものを、植半八百松の鹽梅も我が爲には何のものかは、母妹を弊屋に残して一片の魚肉にも猶あかせ奉らぬものを、龜井戸の梅花を分けて橋本に一ぱいの鯉こく何うまかるべき、人の愉快とする所は我が暗涙をのむの所なり、天ふれかし心あらばと打歎かれぬ。今日は終日心なやまして何の仕出したることもなくて日没に成りぬ、國子關場君に復命をもたらず、同家より報知新聞かり來る、夜に入りてよりおもしろき小説母君によりみて聞かし奉る、其うち雨降出つ、萬歳ともとなへまほし。稻葉君夫妻、正朔君同道相談とてきたる、此夜一泊、十二時床にいる。

十一日 起出てみれば妻戸の際しろし、雪なりけり、さこそは梅見を約せし人々の

落膽し給ふらむなど思ひやる。十時といふ頃より空は只晴にくて雪のとくること烟の如く消てひる頃にははや道もかわきつらむと覺ゆ、前島君より手紙來る、今日もとよりながらあすはいかゞ道わらくとも参り給ふべきにや、君まで我もなどありたりおのれはやがてそを携へて師の君許おもむく、こゝにて返書を出す、晴天なれば明日参るべくとのこと也、初心の人の詠草直しなどして歸る、直に關場君へはがきを出す暫時して同家よりはがき來る 行違ひになりたる也。

日記 (三 月)

十二日 日かげは薄けれど晴なれば梅見の催し實行すべきなり、我が家を出しは九時なりし、其際三枝信三郎君参る、師のもとにて一同そろふ、車を連て向島にむかふ、おのれは一人馳せ抜けて小梅に吉田君をいざなふ、既に趣かれし後なりき、臥龍梅に六花の清楚たるを見て、これより徒歩江東梅にむかふ、庭園廣潤樹風愛すべく、花は少しすがれたれど花香の袖に移つてあやなき咎をおひ給ふ君もなからずやとをかし、奥の亭に粗菜を味ひ給ひ雞卵にうるをやしなふなど高等婦人のいかにめづらしく喜び給ふらむ、嬉々たるよろこびの聲愛々たる眞の笑かゝる折にこそ人の情は見ゆるになん、この園より車にて木下川へぞおもむく、細流清くなみをうかべて萬頃の水田まだ返さず折に交る麥生の若やかなるなど造化が自然の美を盡したる中を徐々としてはこび行かれぬ、をううつたる老松の洒々たる間に紅白の香花すきて見ゆるはこゝろざす林なりけり、到りつきて見るに入口にはほそき鐵にて門を設けたるこれ無からましかばと恨み也、前の二園何方劣りたるならねど、このうちに入るに及んで更にこゝの

今一段まされるあるをしり得たり、花は今十分の香を放つて萬枝色ならざるはなく、ことに雨後の天色朗々として風なくあたゝかに、人はあすの日曜をと心に期すらむ、花下不風流の洋杖も見ず、くだ物の皮投打てあたら園内塵塚にする輩もなく、たまたま見ゆるは一瓢に眞意を屬せしじつ徳出立か、遊獵銃を肩にする青年あるのみ、小亭のほとりにて三宮君の夫人同行にて遊覧したまふを見たり、暫時ありてこゝを出づ、かた山君がしきりに名残を惜しみ給ふもをかし、この園伊東君はいひ給へり紋付上下なりと、げに其評や當れるべし、今少し亂雑の植かたならましかばと思ふ、狭きあせ道を幾筋傳ひて向島新梅屋敷にいたる、こゝはいまだ早かりし、出る頃より天俄に陰雲をもとざされぬ、車をいそがせて木母寺植半樓に至る、こゝに一酌の間、遊戯種々あり、日没に及んで歸路につく、堤にて師君に別る、家に歸りしころには大雨盆を返す様に成ぬ。

十三日 大雨。午後よりはれる。師君依頼の縫仕事にかゝる、夜を徹して従事す。この日稻葉君小石川柳町に移轉す。

十四日 曇天。縫上りし衣類もて小石川に行く、師君としばらく談話歸る。稻葉君

参り居られたり。此夕へ新聞號外來る、陸奥農商務大臣依願免官、河野敏鎌氏後任の報なり、但し陸奥君は宮中顧問官に任せられたり。

十五日 晴天。今朝配達の新聞を閲し來たるに内閣の動勢定まらず、品川内務大臣職を副島伯にゆづりて身を宮中顧問に轉せられたるを始めとして、或は後藤遞信大臣冠をかけたるべしといひ、何某の大臣辭表を呈出されたりといひ、物情粉々記者得意の筆をふるふ可き時機と見えたり。午後母君森君へ趣き給ふ。其留守に稻葉君を尋ねて渡會といふ人本郷より來る、もと千村方に居し職工のよしにて種々談話、稻葉君が食言家なることを縷々として述べ、驚く可きこと一ツにして足らず、我も國子もあきれにあきる、小時にして柳町へ向けて趣く。母君歸宅、それらの談話少しする程に同じく本所よりなりとて又一人きたる、稻葉君につきてのはなしをなす、かゝりしに村松老人あわたしく來たる、こは此人々の我家より先に村松に行きてこのもの語をなしたるからにいたく驚きて、そを我家にも告げんとて來られしなり、村松老人しばらくにて歸る、母君と國子と入湯に趣かる、引違にお鏡どの參らる、我れに種々の事問はれしかど、如何答ふ可きにやたゆたはれて深くはもの語らひもせざりき、母君

もやがて歸宅せらる、前よりのことに付て今よりは來訪無用なりお前様ゆえ兩家にまでいたく迷惑のかることあればとて斷る、お鏡どの涙など流して辨解さるゝに母君もこゝろ弱くなき給ふ、おのれは聞くに堪かねて次の間に退きさりぬ、同人歸宅。此夜もいたく怠りてはやく臥たり。

十六日 晴天。一點の雲なし。本妙寺にて種痘を行ふといふに我れもくに子も行はやとて支度をなす、兩人の結髪を終りて母君は奥田へ御用ありて趣き給ふ。おのれは聖學自在通讀、午後早々秀太郎と共に種痘に行く。外に何事もなし。

十七日 晴天。みの子君發會也、十時頃より支度をなす、渡會といふ人來る、稻葉君のことに付てしばらく談話、其中に西村君來る、其人歸宅おのれは直に家を出づ、師君のもとにて少し物がたりす、田中君へ行しは十一時過る頃なりけん、今日の來會者豫定より稍多く廿六七名ありたり、點取題朝雲雀、重嶺君、鶴久子君の甲は伊東の夏子ぬし、三科子君の甲はおのれの成りけり、諸君の退散されしは五時成けん、おのれも直に車にておくらる。此夜は何事もせずして臥したり。

十八日 曇天。十時頃よりは雨に成りぬ。姉君來訪さる、午後開場君並に中島師の

もとより手紙来る、この手紙につきて近邊なる舊中島師かた下婢なりし今野たまかた
 に行く、これが返事のはがきをした、むる程に、思ひかけず半井うし來訪し給ふ、あた
 りを取片付るなど大さわき成し、我家に來給ひしは實に始めてなればなり、母君并に
 國子にも初對面のあいさつなどなすいとくだ、し、居を本郷の西片町に移し給ひし
 よし、其報知がてらむさしのの事はんとて也といふ、むさしのは種々延々になる事
 ありていよく、明後廿日出版の都合なり、校正も廻り來たりしが我が轉宅の日成しか
 ば君のもとに廻さん日間もなく我れ代理をなしたるにもし誤字脱字などあらばゆるし
 給へとの給ふ、茶菓を呈したる斗にて二時間斗ものがたらる、今しばしなどいはまは
 しかりしがいそぎ給へばえと、めあえず歸宅し給ふ。母君も國子もとり、うわさ
 す、母君は實にうつくしき人哉、亡泉太郎にも似たりし様にて温厚らしきことよ、誰
 は何といふともあやしき人にはあらざるべし、いは、若旦那の風ある人なりなどの給
 ふ。國子は又そは母君の目違ひ也、表むきこそはやさしげなれあの笑む口元の可愛ら
 しきなどが權謀家の奥の手なるべし中々心はゆるしがたき人なりなどいふ、母人何は
 しかれ半井うしが詞にかく近くもなれるに他には行く所もなし夜分など運動がてら折

折に參るべければなどいはれしこそ當惑なれ、人の目つまにか、れば正なき名やた、
 んなど杞憂し給ふ、國子さていふとに角に家の狭きなん不都合なる、あはれ今一間あ
 らましかばか斗に心ぐるしからまじ、いかでこの隣りなる家、よりは少し廣やかな
 るをかしこに家移りせんはいかになどいふ、おのれは詮なきこと也、我友とする人は
 家の狭きひろき衣の鮮と弊とをとはず、かざりなき詞かざりなき心をもてこそ交らめ
 もしかしこは家せまし衣ふるびたりとて捨る人あらばそはをしむにたらずといふ、そ
 れはそれながらいかにもなれば心ぐるしきぞかしてくに子は笑ふ。今日の半井うし
 が着服は八丈の下着に茶とこんのたつ縞の袖の小袖をかさねて白ちりめんの兵兒帶ゆ
 るやかに黒八丈の羽織をき下し給へり、人わろしと聞く新聞記者中にかゝる風采の人
 も有けりと素人目には驚かれぬ。秀太郎來る、少し話して歸る。日没後國子に日本外
 史の素讀を授けて、さて聖學自在の愚者の辨一章讀みて聞かす、母君のかたをひねり
 てふさせ奉る。一時床に入る。

十九日 雨天。小石川稽古也、早朝に至る、師君まだ朝飯前なりし、首藤陸三氏の
 女小間使となりて今日よりこ、にあり、名對面するも中々に心ぐるし、難陳の開卷な

れば龍子ぬしもてる子ぬしも参られたり、東君、大造君は來たられず、午前に一題詠じて、午後よりはじむ、例は口述するなれば思ひのまゝには誰もえいはず、口ごもり勝なれど、今日は筆にいはせたることとて人々の難論さかなりし。春の夕べのかた田中みの子ぬし高點になる、戀の喜憂はおのれなりけん、四時退散、田邊君、田中君と約して明後廿三日上野圖書館にて逢はんといふ。歸路稻葉君のこと問はんとて西村君の店をとふ、劍君留守、常女としばらく談話、夕飯馳走になる、提灯をかりて歸る道路汚泥ほと／＼困難を極めぬ、此夜なすことなしにふしぬ。但し關場君今日入門の筈なりしが障ることありて得せず、断りはがき來る。

廿日 晴天。今日はむさしの發行とかきくに春季皇靈祭にもあればとてすしなど調ず、近隣兩三軒に配りなどす。伊東君に約束して今日來訪せんといひしかば午前より其の支度をす。山下直一君來る、早稲田文學九十號持参して借くる、同人歸路もろ共に我れも行く、同じ道なればなり、行々ものがたりつゝ行くに車夫などの同車にてなど進むよの人ならましかばいかばかりか加しからん、さるを何とも思はず同行するは心に邪心のなければなるべし、耻は情より發するものにやをかし、御茶の水橋にて

袂を分ち、伊東ぬしのもとをとふ、談話數刻、心腹を吐露し盡して今日はこと更に嬉しかりし、歸るべし／＼といひ／＼いつしかに日をも暮しぬ、晩飯馳走になりなどして猶中々にはなし盡すされどいつをいつとも定められぬにいざやとて暇をこふ、八時成りし、車を給はりて歸る。歸宅後、種々母君に談話、伊東君と約せしこと無効に成しことあり、直に手紙をしたゝめて其むねを通す、何をもなさずして今宵もふしぬ。

廿一日 晴天。晝後何某の妻來る、ひる飯馳走す、おのれは半井うしのもとへとふことありて行く、今度の住家のいと近くてみえ渡るほどなるがいと嬉し、表は例の戸ざし堅して庭口よりぞ自由の出入はゆるしためる、物がたり種々、大人前日の風邪猶よからずとて咳などいたくし給ふ、家にて相談せしこと半井うしにもかたる、おのれが小説到底よに用いられまじきものなればつゝみなく断り給てよ、おのれはおのれの心を信するが如く人の仰せられし言を信するものなれば、君もし表面のみの賞詞を下し給ふ共其眞偽をし斗るべき智は侍らすかし、君が眞意をえしらすして一向の詞のみを頼み奉らんに、我が愚かさはさておきて君いかばかりか加し給ふらむ、とても世に用いられまじきものなれば、今より直に心をあらためて我が身に應すべきこと目論見候は

ん、只み心のうちを聞かせ給てよとくり返すに、君いたくあきれ顔して、そは又何ぞの事よ、おのれかひなしといへども男のかたはし也、うけがひ参らせしこと偽りならんや、月々に案じ日々にかうがへて君が幸福を願ふぞかし、我れはあくまでも相携へて始終せんと思ふを、君はなどさ斗にうたがひ給ふ、さりながらこれより他に良善の策あらば止め候はじ、なくば今しばしたえ給へ、我思ふに君が著作此むさし野兩三回の後には必らず世に名をしられ給はん、さすれば朝日にまれ何にまれ我れ周旋の方法あり、家事の經濟などに付て愛ひたまふことあらばそはともかくも我すべし、むさし野初版より二千以上の發賣あらば利益の配當あるべき約なればこの分のみは我れのも合せて君に奉らんの心なり、か斗に思ふ心、偽ならんや、大方は察し給へなどの給へり 談宗教のことに及ぶ、過つる日野々宮君に約して會堂へ行かばやと思ひしも障ことありてはたさやりしと云ふ、大人そはよき事を先承りし哉、あやふかりしことよ、あたら御身渦流に巻き入られたまはん所なりしとて嘆じ給ふ、そは何故といへば君縷々として教會の表面裏面を述給ふ、汚行彼の如きあり醜事是の如きあり、牧師狀師は恰も色情の教師の如く、集合する男女の信者は殆ど其生徒に外ならずとて痛論し

給ふ、さりながらこはおのれが耶蘇をいたく排斥する心よりかゝる感も隨ひて生ずるにや、大方の教會かゝるにもあらざるべけれど、十中の七八は其類ならんと思ふを眞に宗教に熱心におはせば甲斐なし、さらすは先敬して遠ざけ給ふかたよかるべしなどの給ふ、後日を約して歸路につく、四時なりし。此夜入湯することなしに臥したり。

廿二日 晴天。午前習字及著作に従事す。ひる飯直に家を出づ、圖書館行きの約束あればなり。かしこに至りて女のさる人や來りしと問へば、さおはしたり此下駄なめりとてみするは、さらさ形ある皮のはな緒也、みの子ぬしなめりと思へばそれと我れのと一とつにして館に入る、目錄書の臺の上にしきりになにかした、め居給ふは思ひしごとみの子ぬし也、走り寄りて聲びくに挨拶す、相携へて樓上婦人席に入る、先に一人の閱覽人あり、醫學の生徒ならん外科といふ書籍を見居たりき、田邊君はおはさぬのなるべしあまりのを、よなどいひて笑ふ、いつもは大方朝よりなれば午後にてうみつかれて睡たくさへなるを、今日はみる間露斗りにして閉館のすゞの聲す、そゝや追出されぬべしとて笑ひながら室を出づ、男子の方一人の止まる人なかりし、徒歩山内をぬけて廣小路に出で仲町にてみの子君かひ物をし給ふ、小路を入りて池の端に蓮

玉を味ふ、道々種々談話、中島師君の事などかたる。家にかへりつきしは日没成し、
 みの子君とは真砂町にて別れたり。伊東君より手紙来る、前日のことに付て也。國
 に日本外史素讀を授く。半井君よりはがき来る、明日参りくれ度しらせ也。今宵もす
 ることなしに早くふしたり。

廿三日 曇天、少しあた、かし。半井うしを午後よりとふ、むさしの、表題の文字
 書きくれ度と也、しばくいろひたれど聞かるべくもあらねば十字斗しるしぬ。又む
 さし野卷末にのすべきもの少し斗不足なれば何にもあれ明午後までに作り終りてがな
 との給はず、雨少しこぼれ來ぬればいそぎかへる、直ちに著作にかゝる、文章一篇草
 さんとて也。今宵雨いとつよくふる二時頃まで机邊にあり。

廿四日 大雨。又文章あまりおもしろからねば、春雨を詠する長歌になす、師の君
 に一覽をこはんとて大雨中家を出づ、雨傘といふもの一つもなければ、少さやかなる
 洋傘にしのぎ行く、雨はたいいなる様にふるにいと高き下駄の爪皮もなきをはきて汚泥
 なる道を行くに困難なることおびたし、師君のもとへ参りつきし頃は羽織もきもの
 もひたぬれにぬれぬ、師君二階の病床におはしき、もの語種々、長歌添削をこふ、談

文章のことに及ぶ、おのれ日々日記を作るに言文一致なるあり、和文めかしきあり、
 新聞體になるあり、かくては却りて文の爲に弊害とのみなりて利は侍らずやあらむと
 て師君の異見とひ参らす、そは一定の文則なくてはなさざるかたぞよき、何にまれ一
 の方にしたがいてものせよなどの給ふ、今のよの新聞屋文といふものこそ我とらざる
 所なれ、さるものからこも又一つの道具にて用なきにしもあらず、それはそれこれは
 之ぞかし、すべて文にまれ歌にまれ氣骨といふものこそあらまほしけれ、さりながら
 女といはんには常の行ひ姿形をはじめ物いふにも筆とるにもなよやかなるを表と
 したるぞよき、心の内にこそは、政の成敗、天がしたの興廢、さては文武の弛廢、何
 にまれ思ひいたらぬくまなくて、しかも形にはあらはさぬなん誠の女なる、しかはあ
 れどひたすらにをしつゝみたるのみならましかばつひによはきに流れてはては心まで
 青柳のいとのごと成ぬべきなめり、たとへばくろがねのまろがせを烟の内につゝみた
 らん様なるがよきぞかしなどをしへ給ふ、ひる飯たべて少しまで見すべきものありと
 の給ふにぞ、しばし初心の人の詠草直しなどしてまつ、藏より一冊の手記と衣服とを
 取出し來給へり、ながきぬのいたくなへたる様なるに何某くれがしの會などさこそは

困すらめ、これもて行き調じ直せよなどの給はず、例ながらにいとうれし、この一冊かまへて人に見すまじきものなれどそこにはなにかさけてなんとて、常陸帯と表書きしたる日記みせ給ふ、こは下の巻也。上は師君水戸に下り給ふ道すがらの記也といふ、これは林ぬし江戸へのほり給ふ別れのきざみよりかきはじめて師の君ひとやにつなぐれ給ふ迄の也、あるは涙をしのんで門出を送りたまふ曉の鳥の聲、あるは空しさふすまにあまよをしのび給ふくつわ蟲の聲、あるは初めの音づれ待得給ひし件、あるは身をなきものとおぼしなして更に故郷の母君をこひ給ふくんだり、あるはさばへなすねじけ人らがよこしまのことども、それが恥かしめをさけんとて妹君さては取でより供につれ給ひし小女なんどしるべのかたにしのはする折のこと、八重むぐら高くしげる館の内にたゞ一人國をうれひてつまごとしのび給ふ心の中、其折々の歌の心ばへなど哀にもかなしくもそゝる涙ぐまれて打もおかす詠め入りぬ、君十九の時におはしける、おのれは歌の姿の哀なるよりも文の詞のなだらかなるよりも、其心ばへのいさましさを、しきなんかしこみても猶あまりありけり、師の君の給ふ、こは其折なれば書けたる也、今はた思ひ出てつらばやとするに詞の花はいか斗もかざられなんこの感

情をいかでうつし得べき、文の眞とはかゝるをいふなれ、こは又文章といふもの學びたる時ならず、詞すらよくしらねばたゞ有たる事を有りたるまゝにしるしたるなれど、中々今ものしたりとて及ぶべくはあらず、されば文まれ歌まれよしおのれ其ものに向ひおらずとも眞といふこゝろになりてつゞくり出なば人をも世をもうごかすにたるべきものぞ、その小説をものせんとするもかゝる心ばへにてぞあれよかしなどをしへ給ふ、雨もやみぬ、あさては早くより参りくれよなどの給ふ、暇を乞てかへる、添削給ひしを直に原稿紙にうつしかへて半井ぬしがり行く、心の中種々なり、昨日森ぬしより文來りぬ、二月斗前より烟のしろのたしをたのみて六月がほどをうけがわれぬ、さるを俄にさはる事ありてこの断りをいはれたるなれば母君も妹もいたくなげきまどふ、何とかすべし心安かれなど口にはいひ居しかど、ちいさき胸には波たちさわぎていかにせんと斗成しが、思ひ出ては半井ぬしのみ也、常義俠の心深くおはしますをいかですがり奉らばやとぞ思ふ、行々衰人なからましかばなど願ひしに思ひやつらぬきけんうしのみ成けり、うたみせ参らす、むさし野は今日版に上りぬとか、こは此次のにせんとに角にあづかり参らせんと給ふ、いひにくけれど思ひ定めてその

打出しぬ。面あつきことよ、半井うし案じ給ふ氣色もなく、そはうけ給はりぬ、何とかなすべし心安かれと疾にの給ふ、この月はおと、其の洋服などあらたに調せしかば少しふところなんあしき、されど月末までにはと、のへるべしとて白湯のみ給ふやうに引うけ給ふ、かたじけなきま、又涙こぼれぬうれしさにも早く母君に聞せ奉らばやと思へばあわたしく暇をこふ、嬉しきこと嬉しげにもあらず恩を恩ともしらぬとや覺すらん心には思へど口に多くあらはし難きはかひなかりける、此夜もすることいと怠りぬ。

廿五日 朝來打くもり雪ふる、十時頃より晴渡りたれど風いとつよし。今日はおのれが誕生の日なればとて魚などもとめていさゝかいはひ事す。午後より母君姉君がり参り給ふ。西村ぬし来る、物がたり種々、日没少し前水野ぬしより和歌小集の招き文来る。半井うしよりは廿八日まで小説の草稿まはしくれよとの文来る。今宵はさまざまにこと多し。

廿六日 稽古日。小雨。水野君行の相談と、のふ、點取題三ツ、おのゝ十點を得たり、五時頃歸宅。半井氏より重太君迎ひに来たれば好事あり直に参られたしといわれたりとか、今宵はすでに遅し、明早々参れとて今宵は臥しぬ。日没後芝より兄君参らる。

廿七日 午後より半井君へ行く、小説雜誌むさし野出版になりたりとて一本をあたへらる、昨日の好事とは、君が別著の小説改進新聞に出さんとするの事也といふ、あれ斗はゆるし給へあまりといへば恥かしといひしに、夫は困る也すでに繪の注文さへなしたりといわる、更にせんないづ方にもとて諾す、原稿今一度校閲せんとてわが方に引取る、作りかへんとて也、四十回になしくれよの頼みなれど、三十五回ほどにてよろし、先は奮發し給へとて渡さる、明後夜中に二回ほどお廻しありたし、二十九日より掲載の都合なればなどの給ふ、了承して歸る、母君兄君大悦びの事、藤田屋來る、金一圓かりて兄君に二圓斗かす、日没兄君歸宅。此夜十時二回分の校閲終りて、母君と共に半井君のもとへ行く。之夜は外に何もせず。

廿八日 朝來小説にかゝる。三時頃一日分丈持参、二回分の畫の注文をなす、歸宅日没。國子むかひに来て居りたり。此夜何事もなさず。

廿九日 改進新聞早朝にみる、いまだ小説の載すべき餘地見えず、明後日あたりよ

りならんといふ、むさし野廣告出たり何となく極りわろし、午前水野君各評をよむ、午後早々師君のもとへ持参添削をこふ、みの子君参り居らる、雑誌のこなしつけ、新聞の談あり、歸宅四時。夫より一日分文章す、半井君のもとへ持参せしは十時なりし今夜も國子同道。

卅日

四月一日

四月五日 今日水野君和歌小集の催しある日也、朝來晴天。半井師に約して今日は二回丈是非送らんといひし改進新聞原稿未だ一回もした、め終らず、困じ果て、強いて著作に従事す、十一時に家を出んとするに十時過ぐるまで草稿した、め居るにからくして一回分書き終へたれば、いそぎ化粧などして家を出づ、詫がてら半井君のもとに行、同君留守、伯母の君に言譯申て走がせぬ、至り侍しは一時近かりけん、來客早いと多かり、點取夜歸雁及び野遊成し、來會人數三十名斗酒肴も中に三曲の合奏あり水野せん子君の琴聲心なき身にもそいろにみみかたふかれぬ、始は小がう、次は松竹梅、酒宴やんで又一曲何といふ曲かしらねといとおもしろかりし、散會は九時、車

にて送らる。此夜二時まで小説著作に従事す。

六日 曇天。早朝庭の桃の枝を下ろす。奥田老人参らるべければ同人にやらんとて也。

月といふつきの光りもみえぬかな

やみをやみともをばざる身は

誰かみん誰かするべきあるにあらず

なきにもあらぬのりのともし火

みちのくのなき名とり河くるしきは

人ぞきせたるぬれ衣にして

散ぬればいろなきものを櫻ばな

こひとは何のすがたなるらむ

ゆく水のうきなも何か木の葉舟

ながるるまゝにまかせてぞみん

日記 (二十五年四月)

かまへて人にみすべき

ものならねど、

立かへり我むかし

を思ふにあやふくも又

ものぐるほしきこといと多なる、

あやしうも人みなば

狂人の所爲とやいふらむ。

四月十八日 雨天。午前内に片町の大人がり行く、此日頃惱み給ふ所おはす上に何事にやあらむ立腹の氣にてはかく、敷は物語も賜はらぬなむ心ぐるしければ、いでや今日こそは御心取らんとて出たつ、小石道のいと惱ましきをからうじて行くに、河村君よりの下女水など汲居たり、大人は早起出給へりやと問ふにうなづきてしるべをなす、例の庭口より書齋の椽にのぼるほど大人出来給へり、例はいとなつかしき物

がたり種々して歸るべき時なき様なるを、此頃はあやしう異人のやうに成給へり、御病氣はいかゞぞなど問ふに、少しは好しされど頭のいたきのみは困じ居る也とて、後腦のかたを手してたゞき居給へり、何方も花ざかりと承るにたれこめてのみおはすはなぞやといへば、日陰の身なればとてしほれぬ、一昨日の夜上野の夜櫻を行てみし許、飛鳥山も墨田河も更に訪はず、さるにてもかく引籠りのみ居れば病ひも怠る時のなきにやと思ひたれば、少し散歩をこゝろみなどしたるにいよく頭いたきやうなり、如何にせば宜かるべきにや殆ど其策に困しみぬ、かくては遂に死ぬべきにやあらむなど心細きことの給ふ、頭うなだれがちに言葉少なく、それも此方より問ひ奉らぬ以上更に物語なし、武藏野一昨日までに諸事し終りて昨日發免のつもり成しがいかにしけむいまだ廻り來らず、此度のはいづれもく宜しからぬやうなりなどの給ふ、おのれのは別しての無茶苦茶にて嘸かし困じも怒りもし給ひけん、我師中島とじ常に會日其他にて弟子の詠歌よろしからぬ時はいたく顔色わるき様也、大人にも同じこと、我が著作のあまりわるきに怒り給ひていと御病氣の重らせ給ふならずや案じられ侍りといへば、いやさることはあらずと事も無くの給ふ、むさしの三號の分は

當月中に原稿廻し給へなどの給ふ、さるにても暇のなきなん健康上にいたく影響を及す也、朝日新聞の方も明日より又執筆することになりたり、せめて一月の猶豫あらばよけれど幸閑を得がたきが弱りきる也、など物がたたる、我れもいろ／＼いふと有しが、五月蠅げなるに遠慮してそこくに暇ごひしぬ、されども止めんともし給はざりけり、歸路快々たのします何ごとをかく計怒られけん、我れに少しも覺えなし、いかにせば昔しの如く成るべきにや、家に歸りてもこの事をのみいふ、母も妹も共にいたく案じぬ、母の給ふ、夫も其筈ぞかし世にも人にもかくれ給ふ身なればこそ此花咲鳥うたふ春の日をさゝやかなる家の内に暮したまふなるいか計く心くるしからむ、まして花柳のちまたを朝夕の宿とし給ひしものが俄にあし踏だにし給ひ難ければそは道理也などいふ、今日は何事のなすもなくて日を暮しぬ。

十九日 晴天。今日の改進黨新聞配達が待遠也、誰人か我が後には出けんと思ふに南翠外史也、あな嬉しや大人の也けり、されば我が身いか計大いそぎに端をりちいめても前後とも大人のなれば嬉しといふ、今日は來客いと多し、鍛冶町石川及び菊地君與方など近火見舞の禮にとて來給へり。午前習字、午後より小説少しみる。著作にかゝ

る。櫻井君たのまれの詠草一冊書く。

廿日 晴天。圖書館へ書物見ゆ、太田南畝、藤井懶齋が隨筆ども見る、明治女學校の生徒及び駒場農學校何某氏の妻刀劍類寫圖の模寫に來られしに逢ふ、歸路廣小路まで同伴す。満山の櫻大方はうつろひたれど流石にまだ見る人は多かりき。日没少し前家に歸る。

廿一日 曇天。午後より大人のもとを訪ふ、むさし野來月分趣向につきてなりけり畑島君も参り合されたり、種々物がたり、大人達の趣向の談合いとおもしろし、四時頃歸宅。此夜田中君より明日小金井行の催しありとてはがき來る。夜雨降出づ。

廿二日 今朝はいとよく晴たり。小金井行はいとうれしけれど、むさし野へ切日限もさしせまりたり、悠々たる暇なければやめになす。午前洗濯を少しなす。明日小石川稽古なれば各評兼題など少し詠す。

廿三日 晴天。小石川へ行、日就社員鈴木光二郎氏師君履歴を採報の爲訪問、二階にて種々談話あり、其間島田政子君と共に下座敷に語る、悲話縷々思はず袖をぬらしぬ。

廿四日 早朝關君へはがきを出す。

廿五日 曇天。國子齒痛の爲姉君と共に谷中坂町妙清寺内へ願がけに行く、歸宅早々後かたもなく平癒したりといふ、奇なる事也。小説はじめて原稿にのぼす。日暮れより雨降り出づ。此夜母君に新小説よみて聞かし參らす。

廿六日 より雨天。

廿七日

廿八日

廿九日 まで小説一向に盡力せしものから出来上らず、終夜従事。

卅日 小説いまだ十頁計しか出来ず、せん方なければ其趣半井うしへ申さんとす、ことに今日は小石川稽古なり、朝來大雨なれどもをして家を出づ、師君のもとに十二時まで居る、歸路直に片町の師君が訪ふ、大人は次の間におはすなるべし、河村君老母及内室小女等火桶のほとりに居たり、大人の病氣を問ひなどせしに、師君痔疾にておはせしをいたく秘し給ひしから、一時になやみつよくなりて一昨日切斷術を行はれぬと也、いたく驚きていかにやと氣遣ふにいとなめしけれど病間にて對面せんとして

此間へ通す、石炭酸の香いとつよし、こは日々洗でますればなめり、種々談話、流石の大人もいとくるしげにみえ給ふ、一時歸宅。

五月一日 午前十時頃より家を出で、下谷伊豫紋に口取を買ふ、桃水君に參らせんとて也、十二時頃より片町に行く、物がたり種々、追々快方なりといふ。

三日 西隣の家に轉宅せんといふ相談ととのふ。

四日 半井君のもとを訪ふ、轉宅一條を物がたりて原稿七日までと日延をなす。

五日 晴天。轉宅、久保木田部井手傳ひに来る、此夜より又小説にかゝる。兄君偶然に来る。

六日 一日小説に従事、ならず。

七日 晩景までには何とぞ著作し度大勉強、但し今日は小石川稽古日なれど行かず。

八日 終日まだ成らず。

九日 小石川會日なれど早朝よりは行がたし、三時頃に至りて小説完備す、則ち直に髪を結びなどして先半井うしがり行、藤村にてむし菓子少しとのへ持參す、直に

歸る。其足にて小石川へ行く、師君大立腹。

十日 より蟬表内職にかゝる。

十一日 おなじく。

十二日 おなじく。

十三日 師君のもとへ行く。

十四日 稽古日、田中君より田邊君傳言を聞く、島田君のこと師の君のこと、歸路は日没少し前なりし、思ふこといと多し。

十七日 田中うじ會也、午前より行、來會者十二三名、車にて送らる。

十八日 小がさ原君のもとに數よみの催しあり、招きにあづかりしもの五名、題は二十三題成けり、終りて後ばら新美香園にばらを見る、歸宅は日没。

十九日 半井君をとふ、一時は日に日に快方成しを、又いさゝか無理などをなしたるにや依けん、更に切斷を行はずんば、能ふまじと思ふなりなど物がたたる、いといなやましげなるにいか様にせんと計打守り居る折しも、醫師來診に來しかばおのれは歸宅す。

廿日 又見舞に行く、昨日切斷はなしたれどいまだ充分ならざる様也、今一度切らずんばなどいふ、今日も氣分わるげ也、二時間計居てかへる。

廿一日 小石川稽古也、早朝に行く、我小説のこと田中君よりの物語りもあり、何とか答へなさずばわるかるべく、さりながら半井ぬしが種々懇となる言葉行爲を思へば是を捨て彼につくなん義に於てなかなかなるべし、いか様にせんと斗師君にも相談をなす、そは道理なりしからば斯なさんなど仰給ふ、むさし野上卷閱覽に供す、歸宅は日没。此夜野々宮君教會よりの歸り也とて一夜の無心に參る十二時頃まで談話。

廿二日 野々宮君と種々ものがたる、半井うしの性情人物などを聞に俄に交際をさへ斷り度なりぬるものから、今はた病ひにくるしみ給ふ折からといひ、いづこへぞかく斯る事いひもて行かるべき、快方を待てと心に思ふ、九時頃野々宮ぬし歸宅、午後より又半井君病氣を訪ふ、朝鮮より友人兩三名來たりしとかにて、此邊亂雜也けりおのれ行たる故にや人々は早かへりぬ、其こと由謂なきにもあらじ。今日は日曜なればにや重太君及び小田君參る、初じめて果園氏近づきになる、直に歸宅。

廿三日 雨天。

廿四日 雨いたく降る。九雲夢書寫す、十葉計。

廿五日 雨いとつよく降る。午前の内九雲夢十葉計うつして、夫より小説草稿にかゝる。今日の改進新聞にむさしの上編の評をのせたり。

廿六日 連日の雨晴る。早朝より九雲夢書寫す。

廿七日 大雨。九雲夢書寫、此夕べ半井君より手紙來る。

廿八日 晴たり。小石川稽古に行、しかるに老人昨夜より急病生死おぼつかなしと

聞く、今日の稽古休み給は、なごいさめたれど、師の君聞給はず、終日教へをたれ給ふ、醫師も來たる、此分にては今が今にてもなかるべしと云ふ。おのれ夕つ方一先歸宅、又參らんとて也。歸家直に半井君に趣く、病氣見舞かつは返事すべきこと有て也。日没前藤田屋來たりて終日庭作りす、酒飯を供して勞にむくふ。此夜長齡子ぬしより借りたるよみ賣新聞小説三人妻二十回許見る。

廿九日 早朝直に小石川病人を訪ふ、正午時まで居る、此間に小がさ原家及伊藤老母見舞に來る。一時歸家して九雲夢少し寫す。更に夕がたより小石川へ行く。

我はじめよりかの人に心ゆるしたることもなく、はた戀し床しなど思ひつることかけてもなかりき。さればこそあまた、びの對面に入げなき折々はそのことともなく打かすめてものいひかけられしことも有しが、知らず顔につれなうのみもてなしつる也。さるを今しもかう無き名など世にうたはれ初て處せく成ぬるなん口惜しとも口惜しかるべきは常なれど、心はあやしき物なりかし、此頃降つゝ雨の夕べなど、ふと有し閑居のさま、しどけなき打とけたる姿などそこともなくおもかげに浮びて、彼の時はかくいひけり、この時はかう成りけん、さりし雪の日の參會の時手づから雑糞にて給はりしと、母様のみやげにし給へとて干魚の瓶付送られしこと、我參る度々に嬉しげにもてなして歸らんといへば今しばしく君様と一夕の物語には積日の苦をも忘るゝものを今三十分二十五分と時計打眺めながら引止められしこと、まして我が爲にとて雑誌の創立に及ばれしことなどいへば更也、久しうわづらひ給ひての後まだよわくとなやましげながら、夏子様召上りものは何がお好ぞや、此頃の病のうら無聊堪がたく夫のみにても死ぬべかりしを朝な夕なに訪ひ給ひし御恩何にか比せん、御禮には山海の珍味も及ぶまじけれどとて、兄弟などの様にの給ふ、我料理は甚だ得手なり殊に

五もくすし調すること得意なれば、近きに君様正客にして此御馳走申べしとて約束したりき、さるにても其手づからの調理ものよ、いつのよいかにして賜はることを得べきなど思ひ出るまゝに、有し頃戀しう、世の人うらめしう、今より後の身心ぼそなど取あつめて一つ涙にひぬものから、かく成行しも誰故かは、其源はかの人みづから形もなき事まぎ／＼しういひふらしたればこそ、わりなう友などの耳にも傳ひしなれ、友に信義の人しなければ、やがて眞そらごと師の君に訴にけん、されども猶師の君にまこと我れを見る眼おはせばかくはかなき邪説などにやす／＼と迷はされ給ふべきにはあらしをなごさま／＼に思ふほど、憎くからぬ人もなく成ぬ、いでや罪は世の人ならず、我李下の冠のいましめを思はず、瓜田に沓をいれたればこそ、いつしか人の目にもとまりていひととき難き仕義にも成たれ、人の一生を旅と見てまた出立の二あし三あしがほどなる身には是れのみにも非ざるべし、道のさまたげいと多からんに心せでは叶はぬ事よと思ひ定むる時ぞ、かしこころ心定まりて口惜しき事なく、悲しき事なく、くやむことなく、戀しき事なく、只本善のせんに歸りて、一意に大切なるは親兄弟さては家の爲なり、これにつけても我身のなほざりになし難きよなど思ふ折

しもあれ、又さる人に訪はれなどしてかの人のことと物がり出たる、この人にはもと末いはで叶はぬ筋なればかく／＼しか／＼にてさらに／＼參す成しなど語るに、其人打かたぶきていな／＼夫は眞のみにも非らじ、かの人のおづからさることいひ出したるなどかけても思ひより難し、大方は君様本名あらはし難しなどつね／＼の給ひしかばかの人おのが性などにて世に出し給ひしには非ずや、さるををし計づよき人々に角ものいひ構へてかくいひ開けたるなるべし、我思ふにかの人もし／＼邪心ありて爲に計ごとを廻らし給ふともよかく拙なき事くわだてられん筈なし、外に手段もあるべきこと也、又かの人質としての憐みつよく心切なるは我人共にしる處にて君様にのみの譯ならねば夫は證とするに足らずかし、元來不懨放縱の人なれば、ありし頃もさら也常は柳闇花明のさとを家居として、金錢をみることに芥の様に、ある時は五十金を一夜につひやし、今日七十金の収入ありしも明日は僅かに五圓をあますのみなどの事あるはめづらしからず、一昨年のこと也、正月の一日にはれぎ五十金出して調せしを、二日目に友の窮する由き／＼て残りなくぬぎてやりつ、其身は古るびたる二子の袷に浴衣かさねて寒中をしのがれぬ、されども妹の君嫁入らせ給ひし時に思ひ定

めしことありて俄に身もちつゝしみ給ひつ、人知らぬ宿に蟄伏して我世の春待ち給ひしは事實也、あながち君様に志しありてのみにも侍らざめり、又俄に家居たゝみて跡なくわたまし給ひしは、かうやうの事より隠れ家の世にもれんこと恐れ給ひての業ならずやとおのれは思ひ侍る也など、一々に證を引てあげつらふ、かくてはいといかの人憎くみ難し、恨みは大方の世の人受けり、かの人にくみ難しと思へば我輕忽の所爲今さらに取かへさまほしく、さりとともよも腹立はし給はじ、我が心の潔白なるは思ひ知らせ給ふべきものと思へど、か計仁慈ふかく義侠つよかりし人につれなうもてなしたる我何の罪人ぞや、そもく我はじめ逢参らせたる頃、女の身のかゝる事に従事せんはいとあしき事なるを、さりととも家の爲なれば詮すべなし、さりながら行末見込ある筆つきなるをつとめ給はかならず世に知られ給はんよなど、又兄の様にの給ひしことなぞくり返にも悲し、いでや世の人は何ともいへ我にけがれなく、かの人清くさへあらばそしりは厭ふ處ならず、猶今の御住家尋ねあて今までの如く只兄君としたしまんか、しかはあれどかの人世にすぐれたるみにくき形などならばよけれど、憎くや美形の人の口いとふせぎ難く、且はかの人心にも其美形なるに依りて

177 記 日

我が計に思ひしたふなどをし計られんか夫も口惜し、必竟は我が人と思ふにも非ず戀ふにも非らず、大方結び初たる友がきの中終始かはらざらんが願はしきにこそかくさまぐの物おもひをもする也、されど猶かくいふも我迷ひに入らんとする入口にやあらん、今こそ人も我もにござりたる心なく行ひなく、天地に恥ぢずして交りもなさめやうく入立てむつれよるまゝにいかにか我心人の心替り行かんか計り難し、かの人のは是非曲直我が目にうつるほどはまだ酔つるならず、はては善も悪も取捨の分別なく、人のそしり世のはかり見もかへらず、徳に外れ道に戻る人にもならんは今踏たゆるとさらぬとの只一あしの違ひぞかし、あやふしともあやふしと思へばそゝろに身の毛も立ぬ、一心我をはなれて観すれば、愛憎厭忌何ことかある、物信ふかければ悔いふかし、疑心も掛念も猶凡情俗心のみ、さればこそ君子の交りは淡くして水の如しとや師君の疑ひも友のねたみもかの人交りも無かりし昔しに何事かある、只る莊子が蝶の翻々たる如くあれも夢也、是も夢なり、覺めんはいつのはてしなけれど我心の神明に照し無心無邪氣に成終らんのみ。

なき名の立ける頃、

みちのくのなき名とり川くるしきは

人ぞきせたるぬれ衣にして

されどたゞ、

行水のうきなも河か木のは舟

ながるゝまゝにまかせてぞみん

今日を限りとおもひ定めてうしのもとをとほんといふ日よめる、

いとゞしくつらかりぬべき別路を

あはぬ今よりしのばるゝ哉

ある時は厭ひ、ある時はしたひ、よ所ながらも語りきつて胸とゞろかし、まゝわたり文を見て涙にむせび、心緒みだれ盡して迷夢いよく闇かりしこと四十日にあまりぬ、七月の十二日に別れてより此かた一日も思ひ出さぬことなく、忘るゝひま一時も非ざりし、今はた思へば是ぞ人生にかならず一度びは來るべき通り魔といふものゝ

類ひ成けん、道にかんがみ良心に訪へば更に心やましきことなく、思ひわづらふし更になし、我徳この人の爲にくもらんとして却りてみがれぬ、いでやこれよりいよくみがきて猶一大迷夢見破りてまじと思ひ立しは、八月の廿四日、澁谷君に訪はれし翌日成けり。

しのぶぐさ (二十五年六月)

六月一日、中島の老君病いよくあつして我を迎ひの手紙來る、参りし頃ははや物もの給ひやらす、常はうとき師の兄君さては其娘たちなど枕もとに寄りつどひてすゝり啼し給ふさま悲しともかなし、思へば廿一日の朝のことなり、咳にいたく苦しみ給ひしかば我紙をもみて参らせたるに、病みつかれし目かすかに開きて誰ぞや夏どのか我もこたびこそは生くまじう覺ゆるよと物心細くの給りしかば、何としてさることか侍るべきみ心つよふ覺せなどなぐさめし折まだかく俄になどは思はざりしをと、そゝろに我も涙ぐまれぬ、みの子ぬしも参られたり、今日一日のうちもいかにやくと心もとながるほどに夜にも入りぬ、醫師は佐々木東洋君なれど、俄かのことのあらん時にとて返したなる矢島といふをも頼み置くなり、八時といふ頃より苦しともなく息せわしく成て身もだえし給ふこと限りなし、矢島参りて皮下注射など二度び斗したれど露ほどもしるしなく、見る目いと詫し、師の君はまして心も心ならねばやあと枕に立そひてくれ惑ひ給ふさまことわりなり、十時といふ頃佐々木君も参られぬ、此頃

より少ししたゆみ初て、曉がたまで我も人も静かならねど夢路に入りぬ、つぐの日もさして重るともなく時々身もだえはし給ふものから、兎角暮したり、夜に入てよりはいよく限りと覺しくて手足の置處なげにみゆ、矢島にいたく請ていなせじといふものから皮下注射を更にしたり、それより唯ねぶりに眠りて三日の午前十一時といふに空しく成りぬ、みの子ぬしは其日斗家に歸りて折にあはず、いそぎ参られていと口惜しがる、房子君も一あしおくれにたり、此折のことども書んも中々なり、このほどの二日三日ひるなく夜なく立かはり入かはる人、さしも狭からぬ家ながら唯みちにみちていさゝかの間もなし、夜るなどはみな寄りつどひてをかき物がりどもしてねぶたさをまぎらはず、かゝる折にこそさまぐの人の心も知るべきながら、我見るにあざやかならず聞く耳さとならねば甲斐なし、甲斐なしとけれど又おのづからに目とまゝり耳に聞えなどする事種々なれど、さのみはとてなん。四日小出ぬしが催しにて櫻雲臺に何某の追善會ある日也、師の君の代りとしておのれ行く、田中君と同車也、心こゝにあらねば歌もえよめすやがて歸る。五日にからは柩に納めぬ。六日の午後野邊送り左法をす、祭主は春日何某成き、伊東夏子ぬしとおのれとしわきの役をなす、

師の君も徒歩にて砲兵工廠前まで行給ふ、これより車也、喪服にやつれ給へるさま悲しともかなし、今日生憎に故松平慶永ぬしが一週年の祭を星が岡に行ひ給ふ日とて、宮内省出仕の人々さてはうた人中有名のたれかれなどは参り合されず、されど送る人は二百人に過たるべし、大方は夫人令嬢斗なりき、式場にての左法よりはじめて墓處に柩おさめ給ふまでえ書つゞけやらず、まして師の君の心いかならんかし、人々おのゝ歸りさらぬ、師の君はらから、宇一君、くら子ぬしの二人、伊東君母子、みの子ぬし、おのれの八人車をつらねて歸りつきしは日没近かりき、此人々もおのゝ家に歸るに、おのれも又半井うしのもとよりいふ事ありとの文もあり、今宵斗はとて歸る。

七日 何は置て半井うし訪て見よと母君もの給ふに、ひる少し過る頃より行く、例の従姉妹の君も居られたり、おのれいつも取立たる髪など給はざりしを島田といふものになして有しかば人々めづらしがる、是よりは常にかくておはせよかし、いとよく似合給ふをなどいはれて中々に恥し、半井ぬし扱の給ふやう、種々に御事多かる中をさぞ出がたくやおはしけん、實は君が小説のことよ、さまざまに案じもしつるが到底

繪入の新聞などには向き難くや侍らん、さるつてをやうくに見付て尾崎紅葉に君を引合せんとす、かれに依りて讀賣などにも筆とられなばとく多かるべし、又月々に極めての収入なくば經濟のことなどに心配多からんとて是をもよく計らはんとす、されど夫も是も我は日かげの身立出て何事かなし得べき、委細畑島にいとよくだのみてそれが知人より頼み込せしなり、此二日三日のほどに君一度紅葉に逢ては見給はずや、もし其時に成て他人に逢ふはいやなりなどいはれんがあやふくて先この事を申なりとの給、何事のいなか有べきいと辱しといふ、雑話さまざまにて歸る。直に小石川へ到る、こゝは只人々酔へる様なり、夢の様にて十二日にも成ぬ、十日祭の式行ふこゝに親しき人十四五人招きて小酒宴あり、伊東夏子ぬし不圖席を立て我にいふべき事あり此方といふ、呼ばれて行しは次の間の四疊計なるものゝかけ也、何事ぞと問へば、聲をひそめて、君は世の義理や重き家の名や惜しきいづれぞ、先この事問まほしとの給ふ、いでや世の義理は我がことに重んずる事なり、是故にては幾多の苦をもしのぐなれ、されど家の名はた惜しからぬかは、甲乙なしといふが中に心は家に引かれ侍り、我斗のことにもあらず、親あり兄弟ありと思へばといふ、さらば申すなり、